

Veritas NetBackup™ for Microsoft Exchange Server 管理者ガイド

Windows

リリース 8.1.1

VERITAS™

Veritas NetBackup™ for Microsoft Exchange Server 管理者ガイド

最終更新日: 2018-03-28

マニュアルバージョン: NetBackup 8.1.1

法的通知と登録商標

Copyright © 2018 Veritas Technologies LLC. All rights reserved.

Veritas、Veritas ロゴ、NetBackup は Veritas Technologies LLC または同社の米国とその他の国における関連会社の商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、サードパーティの所有物であることをベリタスが示す必要のあるサードパーティソフトウェア（「サードパーティプログラム」）が含まれている場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。このベリタス製品に付属するサードパーティの法的通知文書は次の場所から入手できます。

<https://www.veritas.com/about/legal/license-agreements>

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されます。Veritas Technologies LLC からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Veritas Technologies LLC は、本書の提供、内容の実施、また本書の利用によって偶発的あるいは必然的に生じる損害については責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

ライセンス対象ソフトウェアおよび資料は、FAR 12.212 の規定によって商業用コンピュータソフトウェアと見なされ、場合に応じて、FAR 52.227-19「Commercial Computer Software - Restricted Rights」、DFARS 227.7202、「Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation」、その後継規制の規定により制限された権利の対象となります。業務用またはホスト対象サービスとしてベリタスによって提供されている場合でも同様です。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

Veritas Technologies LLC
500 E Middlefield Road
Mountain View, CA 94043

<http://www.veritas.com>

テクニカルサポート

テクニカルサポートは世界中にサポートセンターを設けています。すべてのサポートサービスは、お客様のサポート契約およびその時点でのエンタープライズテクニカルサポートポリシーに従って提供されます。サポートサービスとテクニカルサポートへの問い合わせ方法については、次の弊社の **Web** サイトにアクセスしてください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP.html

次の URL で Veritas Account の情報を管理できます。

<https://my.veritas.com>

既存のサポート契約に関する質問については、次に示す地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

世界全域 (日本を除く)

CustomerCare@veritas.com

Japan (日本)

CustomerCare_Japan@veritas.com

マニュアル

マニュアルの最新バージョンがあることを確認してください。各マニュアルには、2 ページに最終更新日付が記載されています。最新のマニュアルは、次のベリタス **Web** サイトで入手できます。

<https://sort.veritas.com/documents>

マニュアルに対するご意見

お客様のご意見は弊社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの誤謬脱漏などの報告をお願いします。その際には、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。ご意見は次のアドレスに送信してください。

NB.docs@veritas.com

次のベリタスコミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問することもできます。

<http://www.veritas.com/community/ja>

ベリタスの Service and Operations Readiness Tools (SORT) の表示

ベリタスの Service and Operations Readiness Tools (SORT) は、時間がかかる管理タスクを自動化および簡素化するための情報とツールを提供する **Web** サイトです。製品によって異なりますが、SORT はインストールとアップグレードの準備、データセンターにおけるリスクの識別、および運用効率の向上を支援します。SORT がお客様の製品に提供できるサービスとツールについては、次のデータシートを参照してください。

https://sort.veritas.com/data/support/SORT_Data_Sheet.pdf

目次

第 1 章	NetBackup for Exchange の概要	10
	NetBackup for Exchange について	10
	NetBackup for Exchange の機能	10
	NetBackup for Exchange の用語	13
第 2 章	NetBackup for Exchange のインストール	15
	NetBackup for Exchange のインストールの計画	15
	オペレーティングシステムおよびプラットフォームの互換性の確認	16
	NetBackup for Exchange 用 NetBackup サーバーの要件	16
	NetBackup for Exchange 用 NetBackup クライアントの要件	17
	NetBackup for Exchange の Exchange サーバーソフトウェア要件	18
	Exchange スナップショットバックアップの Snapshot Client 構成とライセンス要件	18
	Exchange オフホストバックアップの要件	19
	Exchange インスタントリカバリバックアップの要件	19
	NetBackup for Exchange のライセンスについて	20
第 3 章	Exchange クライアントのホストプロパティの構成	21
	Exchange クライアントのホストプロパティの構成	21
	[Exchange]プロパティ	23
	スナップショットバックアップによるすべての Exchange トランザクションログ ファイルまたはコミットされていない Exchange トランザクションログ ファイルのみのバックアップについて	25
	Exchange 個別のプロキシのホストの構成	26
	インスタントリカバリバックアップでの Exchange トランザクションログの切り 捨てについて	27
	ストレージユニットに対するバックアップの実行による Exchange トランザク ションログの切り捨て	27
	Exchange バックアップでの一貫性チェックオプションについて	27
	クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシャルについて	28

第 4 章	NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成	30
	NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について	30
	NetBackup および Microsoft Web サービスについて	31
	EWS アクセス用の特権付き NetBackup ユーザーアカウントの作成	32
	Exchange 用の最小の NetBackup アカウントの作成	33
	「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について	36
第 5 章	Exchange ホストの構成	38
	分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設 定	38
	ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認	41
第 6 章	Exchange 個別リカバリの構成	45
	Exchange のバックアップと個別リカバリテクノロジー (GRT) について	45
	メールボックスの検出と個別リカバリテクノロジー (GRT) について	46
	Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ	47
	Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ	49
	Exchange の個別操作および NetBackup メディアサーバー	51
	個別リカバリテクノロジー (GRT) を使う Exchange バックアップの構成 (非 VMware バックアップ)	51
	Exchange 個別リカバリテクノロジー用 Network File System (NFS) のイン ストールおよび構成	54
	Windows 2012、2012 R2、2016 でのネットワークファイルシステム (NFS) 用サービスの構成について	54
	2008 および Windows 2008 R2 での NFS 用サービスの構成につい て	62
	Server for NFS の無効化	67
	メディアサーバーでの Client for NFS の無効化	69
	個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用するバックアップおよびリストアの ための UNIX メディアサーバーおよび Windows クライアントの構 成	71
	NBFSD 用の個別のネットワークポートの構成	72
	Exchange 個別リカバリテクノロジー (GRT) でサポートされるディスクストレ ージユニット	72
	個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用する Exchange バックアップの複製 に対するカタログ化の無効化	73
	個別リカバリテクノロジー (GRT) を使う Exchange バックアップまたは VMware バックアップのカタログ化	74

NetBackup Client Service のログオンアカウントの構成	74
--	----

第 7 章

Exchange のバックアップポリシーの構成 (非 VMware)	77
Exchange 自動、ユーザー主導型、および手動バックアップについて	77
Exchange Server のバックアップポリシーの構成について	78
Exchange Server のポリシーに関する推奨事項	79
ポリシー属性	82
NetBackup for Exchange ポリシーへのスケジュールの追加	83
Exchange ポリシーのクライアントを NetBackup へ追加	86
クライアントリストの物理ノード名の使用	87
Exchange ポリシーへのバックアップ対象の追加	87
Exchange のバックアップとトランザクションログについて	94
Exchange Server のスナップショットバックアップの構成	95
Exchange Server でのスナップショットバックアップについて	96
Exchange スナップショット操作の制限事項	97
スナップショット操作を実行する場合の Exchange Server の構成に 関する要件と推奨事項	97
Exchange スナップショットバックアップの一貫性チェック	98
Exchange Server のスナップショットポリシーの構成	99
Exchange Server のインスタントリカバリバックアップの構成	106
Exchange インスタントリカバリ方式について	107
Exchange インスタントリカバリに関するポリシーの推奨事項	108
Storage Foundations for Windows (SFW) と Exchange インスタン トリカバリについて	109
インスタントリカバリを使用する場合の Exchange Server の構成要件	109
Microsoft VSS プロバイダによる Exchange インスタントリカバリ	110
インスタントリカバリが設定された Exchange スナップショットポリシー の構成	110
手動バックアップの実行	117

第 8 章

Exchange Server、メールボックス、パブリックフォルダのバックアップの実行	118
Exchange サーバーデータのユーザー主導バックアップについて	118
Exchange Server バックアップ操作のソースクライアントの選択について	119
ユーザー主導 Exchange バックアップのオプション	120
Exchange Server のユーザー主導スナップショットバックアップの実行	120

第 9 章

Exchange Server、メールボックス、パブリックフォルダのリストアの実行	124
Exchange サーバー主導リストアとリダイレクトリストアについて	124
Exchange リストア操作の宛先クライアントの選択について	125
Exchange データベースデータのリストアについて	127
既存の Exchange Server トランザクションログ	128
Exchange スナップショットバックアップのリストアについて	128
Exchange スナップショットのリストアオプション	129
データベース可用性グループ (DAG) のスナップショットリストアの実行	130
Exchange スタンドアロンサーバーのスナップショットリストアの実行	133
別のデータベースまたはリカバリデータベース (RDB) へのデータベース可用性グループ (DAG) スナップショットバックアップのリダイレクト	135
別のデータベースまたはリカバリデータベース (RDB) への Exchange スタンドアロンサーバーのスナップショットバックアップのリダイレクト	139
リストア後の Exchange データベースの手動でのマウント	143
個々の Exchange メールボックスおよび共有フォルダの項目のリストアについて	143
Exchange メールボックスフォルダおよびメッセージの件名の特殊文字	143
Exchange の個々のメールボックス、メールボックスフォルダ、パブリックフォルダまたはメッセージのリストアを実行するための前提条件および操作上の注意事項	144
Exchange Server メールボックスオブジェクトまたは共有フォルダオブジェクトのリストアのオプション	145
Exchange メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトのリストア	145
Exchange メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトの代替パスへのリダイレクトリストア	148
コマンドラインを使用した Exchange 個別バックアップイメージの参照またはリストア	154

第 10 章

VMware バックアップを使用した Exchange Server データの保護について	155
VMware バックアップによる Exchange Server データの保護について	155
Veritas VSS provider for vSphere について	156

Exchange サーバーを保護する VMware バックアップのサポート	156
Exchange Server を保護する VMware ポリシーの使用に関する制限事項	157
Exchange Server を保護する VMware ポリシーの構成に関する注意事項	158
Exchange Server を保護する VMware バックアップの構成について	159
Veritas VSS provider for vSphere のインストール	161
NetBackup アクセラレータを使った VMware の完全バックアップの速 度の増加	162
Exchange を保護する VMware バックアップを使用した個別リカバリ テクノロジー (GRT) の構成	163
Exchange サーバーをバックアップするための VMware ポリシーの構 成	165
レプリケーションディレクトクを使用して Exchange サーバーを保護する VMware バックアップを構成し、スナップショットレプリケーションを管 理する	168
Replication Director を使用して Exchange を保護する VMware バッ クアップで個別リカバリテクノロジー (GRT) を構成し、スナップショッ トレプリケーションを管理する	170
スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使 用して Exchange Server をバックアップするための VMware ポ リシーの構成	171
NetApp ディスクアレイ上の共有 CIFS へのアクセスを使用した NetBackup の構成	173
VMware バックアップからの Exchange データのリストアについて	174
VMware バックアップでの Exchange データベースのパッシブコピーの保 護の有効化	176

第 11 章

修復された Exchange Server または代替の Exchange Server への Exchange データベ ースのリカバリ	178
Exchange データベースのリカバリについて	178
Exchange データベースのリカバリ	179

第 12 章

Exchange サーバーのバックアップとリストアのトラ ブルシューティング	181
NetBackup for Exchange デバッグログ	181
NetBackup for Exchange クライアントのデバッグログの自動的な有 効化	182
NetBackup for Exchange のバックアップ操作のデバッグログ	182

NetBackup for Exchange のリストア操作のデバッグログ	183
Veritas VSS provider ログ	186
NetBackup for Exchange Windows クライアントのデバッグレベルの 設定	187
オフホスト Exchange サーバーでのイベントビューアログの表示	188
イベントビューア内からリモート Exchange サーバーへの接続	188
リモートサーバーへの Exchange システム管理ツールのインストール	189
NetBackup の状態レポート	189
NetBackup for Exchange 操作の進捗レポートの表示	190
Exchange リストア操作のトラブルシューティング	190
異なる Exchange サービスパックまたは異なる累積更新プログラムの レベルへのリストア	190
Exchange Server のトランザクションログの切り捨てエラー	191
Exchange のバックアップとリストアのパスの長さ制限の動的エンフォースメ ント	191
Exchange スナップショット操作のトラブルシューティング	191
個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用したトラブルシューティング Exchange ジョブ	192
Exchange 2010 と 2013 でのメモリ使用量の増加	193
DAG のバックアップとリストアのトラブルシューティング	193
データベース可用性グループ (DAG) の現在のホストサーバーの検出	194
データベース可用性グループ (DAG) のバックアップ状態の表示およ びリセット	194
Exchange Server の VMware のバックアップとリストアのトラブルシュー ティング	195

付録 A

NetBackup Legacy Network Service (Exchange 2010)	197
NetBackup Legacy Network Service のログオンアカウントの構成 (Exchange 2010)	197

索引	199
----------	-----

NetBackup for Exchange の概要

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup for Exchange](#)について
- [NetBackup for Exchange](#) の機能
- [NetBackup for Exchange](#) の用語

NetBackup for Exchangeについて

NetBackup for Microsoft Exchange Server は、Exchange Server がインストールされている場合に、Exchange データベースのオンラインバックアップおよびリストアを含む NetBackup の機能を拡張します。この機能は、Windows の NetBackup クライアントソフトウェア用のアドオン機能または拡張機能として提供されます。この製品は、バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースと緊密に統合されているため、この項では、NetBackup の機能の概要だけを説明します。Exchange ファイルのバックアップ操作およびリストア操作の多くは、他の NetBackup ファイルの操作と同じです。

NetBackup for Exchange の機能

[表 1-1](#) に、NetBackup for Exchange Server エージェントの機能について説明します。

表 1-1 NetBackup for Exchange Server の機能

機能	説明
NetBackup との密接な統合化	NetBackup との密接な統合化によって、次のことが可能になります。 ■ NetBackup の手順およびソフトウェアに詳しい管理者は、バックアップおよびリストア操作を行うために NetBackup の構成および使用を簡単に行うことができます。 ■ Exchange Server のバックアップのユーザーは、NetBackup 製品群の機能および利点を活用できます。これらの機能には、ソフトウェアデータの圧縮と暗号化、スケジュールされた操作とユーザー主導の操作、複数データストリームのバックアップ、インラインテープコピーなどが含まれます。 『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。
集中管理	管理者は、Exchange Server および他の NetBackup クライアントコンピュータのバックアップやリストアを、中央サイトから定義することができます。
メディア管理	Exchange Server のバックアップは、NetBackup のマスターサーバーがサポートする各種のストレージデバイスに、直接保存されます。
最小限のバックアップ時間	管理者は、完全バックアップまたは増分バックアップの実行を選択できます。完全バックアップには非常に時間がかかる場合があるため、頻繁に実行する必要はありません。その間は、トランザクションログのバックアップを行うことによって、完全バックアップ以降に行われた更新の増分バックアップを短時間で実行できます。失敗した場合は、完全バックアップおよび増分バックアップがリストアされます。 リカバリ中、Exchange Server によって、データベースが更新され、ログに書き込まれた各トランザクションがデータベースに適用されます。Exchange Server のリカバリが完了すると、システムが最後の増分バックアップが実行されたときの状態に復元されます。
Exchange Server のバックアップ方式	NetBackup では、完全バックアップ、累積増分バックアップおよび差分増分バックアップと呼ばれる、Exchange Server のすべてのバックアップ方式がサポートされています。ユーザーバックアップは、コピーバックアップとして機能します。
オンラインバックアップ	Exchange Server を停止することなく、Exchange Server のデータおよびトランザクションログのバックアップを行うことができます。Exchange のサービスおよびデータは、Exchange Server のバックアップ中も引き続き利用できます。
自動バックアップ	管理者は、ローカルクライアントまたはネットワークを介したリモートクライアントに対して、自動的な無人のバックアップを行うスケジュールを設定することができます。完全バックアップと増分バックアップのどちらも自動的に実行でき、NetBackup サーバーによって中央サイトから完全に管理されます。管理者が手動でクライアントをバックアップすることもできます。
リストア操作	管理者は、バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを使用して、バックアップを参照したり、リストアを行うバックアップを選択することができます。

機能	説明
Exchange を保護する VMware バックアップのサポート	ユーザーは Exchange サーバーを実行している仮想マシンの一貫した完全バックアップを作成できます。デフォルトでは、NetBackup によって DAG のアクティブなデータベースの保護が提供されます。VMware イメージから Exchange データベースと個々のデータベースオブジェクトをリストアできます。NetBackup は、スナップショットとスナップショットのレプリカ (ストレージライフサイクルポリシー) の管理に Replication Director を使う VMware のポリシーをサポートしています。
Exchange スタンドアロンサーバーおよび DAG のサポート	NetBackup for Exchange は、Exchange スタンドアロンサーバーと Exchange データベース可用性グループ (DAG) のバックアップをサポートしています。Exchange バックアップで Microsoft 社がサポートする唯一のバックアップは VSS です。 DAG の場合、NetBackup では、データベース可用性グループ (DAG) のアクティブおよびパッシブ VSS Writer のバックアップがサポートされています。レプリケートされたデータを NetBackup でバックアップする場合の利点は、アクティブな Exchange Server への I/O の影響を軽減することです。NetBackup はレプリケーションデータにアクセスし、アクティブな (または移動中の) Exchange Server だけを残します。NetBackup は優先サーバーのリストに基づいて特定のサーバーのパッシブコピーをバックアップできます。
スナップショットバックアップの一貫性チェックの機能強化	スナップショットバックアップの場合、NetBackup は Microsoft 一貫性チェック API を使用して、データベースおよびトランザクションログの一貫性を確認し、詳細情報を表示します。これによって、一貫性チェックと並列してバックアップを実行できるため、スナップショットバックアップにかかる時間が短縮されます。Exchange DAG の場合、一貫性チェックを無効にするか、またはチェックを無視してバックアップを続行できます。
スナップショットバックアップおよびリストア	NetBackup for Exchange では、スナップショット方式を使用して Exchange のバックアップおよびリストアを実行できます。別の Snapshot Client ライセンスを使用すると、オフホストバックアップ、インスタントリカバリバックアップおよびハードウェアプロバイダを使用するバックアップを実行できます。 p.96 の「Exchange Server でのスナップショットバックアップについて」を参照してください。
個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用した個々の項目のリストア	バックアップで GRT が使用される場合、ユーザーはデータベースの完全バックアップから個々のメールボックスおよび共有フォルダの項目を直接リストアできます。 p.45 の「Exchange のバックアップと個別リカバリテクノロジー (GRT) について」を参照してください。
メールボックスオブジェクトのリダイレクトリストア	メールボックス、メールボックスフォルダ、メールボックスメッセージ、パブリックフォルダおよびパブリックフォルダの項目を、新しい場所にリストアできます。
データベースのリダイレクトリストア	バックアップは、ローカルサーバーまたは代替サーバー上の別のデータベースにリストアできます。
リカバリデータベース (RDB) へのリダイレクト	バックアップは、リカバリデータベースにリダイレクトできます。

機能	説明
VMware バックアップでの NetBackup アクセラレータのサポート	NetBackup アクセラレータは、VMware の完全バックアップの速度を増加できる可能性があります。バックアップ時間の短縮によって、VMware バックアップをバックアップ処理時間帯内に簡単に完了できるようになります。Exchange 向けのアクセラレータのサポートは、現在、完全スケジュール形式のバックアップだけに制限されています。この制限は、Exchange を保護する VMware バックアップをアクセラレータなしで実行する場合にも適用されます。
バックアップの圧縮	圧縮することで、ネットワーク上のバックアップのパフォーマンスが向上し、ディスクまたはテープに格納されるバックアップイメージのサイズが縮小します。NetBackup では、圧縮を使用するバックアップの GRT はサポートされていません。
暗号化	暗号化機能によって、ポリシーに示されているクライアントのバックアップが暗号化されます。NetBackup では、暗号化を使用するバックアップの GRT はサポートされていません。
クラスタサポート	NetBackup for Exchange Server エージェントは、クラスタ化した Exchange Server をサポートしていますが、クラスタには対応していません。Exchange Server でサポートされるクラスタソリューションに関しては、Exchange のマニュアルを参照してください。
マルチテナント環境	Exchange Server データベースのバックアップとリカバリはマルチテナント環境でも全面的にサポートされます。NetBackup はマルチテナントの Exchange 環境でテナントのメールボックスへのメールボックス項目のリストアをサポートしません。テナントのメールボックスに関する項目をリカバリするには、非テナントのメールボックスにリカバリをリダイレクトしてください。

NetBackup for Exchange の用語

表 1-2 NetBackup for Exchange の用語

用語	定義または説明
Exchange Server、Exchange	NetBackup for Microsoft Exchange Server のマニュアルでは、「Microsoft Exchange Server」を「Exchange Server」または「Exchange」と記述します。
個別リカバリテクノロジー (GRT)	ユーザーは、データベースの完全バックアップから個々のメールボックスおよびパブリックフォルダの項目をリストアできます。
Microsoft 一貫性チェック API	Microsoft CHKSGFILES API またはインターフェースを指します。
NetBackup Exchange 操作作用のアカウント	バックアップやリストアを実施するための十分な役割またはグループメンバーを持つ、固有の Exchange メールボックスと関連付けられた Active Directory ユーザーアカウント。
NetBackup File System デーモン (NBFS D)	NetBackup メディアサーバーの NetBackup File System デーモンは、NetBackup クライアントによる nbtar イメージのマウント、参照、および読み込みを許可するプロセスです。このプロセスは、クライアントで GRT 操作に使用されます。これらの操作には、バックアップ、バックアップイメージの参照、リストアおよび複製が含まれます。

用語	定義または説明
NetBackup for Microsoft Exchange Server	NetBackup for Microsoft Exchange Server のマニュアルでは、「NetBackup for Microsoft Exchange Server」を「NetBackup for Exchange Server」または「NetBackup for Exchange」と記述します。
スナップショット	スナップショットテクノロジーを使用して実行されるバックアップおよびリストアを指します。NetBackup for Exchange Server のマニュアルでは、VSS はスナップショットと同義です。
VSS	スナップショットバックアップおよびリストアの実行に使用されるソフトウェアプロバイダを指します。NetBackup for Exchange Server のマニュアルでは、スナップショットは VSS と同義です。

NetBackup for Exchange のインストール

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup for Exchange のインストールの計画](#)
- [オペレーティングシステムおよびプラットフォームの互換性の確認](#)
- [NetBackup for Exchange 用 NetBackup サーバーの要件](#)
- [NetBackup for Exchange 用 NetBackup クライアントの要件](#)
- [NetBackup for Exchange の Exchange サーバーソフトウェア要件](#)
- [Exchange スナップショットバックアップの Snapshot Client 構成とライセンス要件](#)
- [NetBackup for Exchange のライセンスについて](#)

NetBackup for Exchange のインストールの計画

NetBackup for Exchange を使用するには、次の作業を実行します。

表 2-1 NetBackup for Exchange のインストール手順

手順	処理	説明
手順 1	オペレーティングシステムおよびプラットフォームの互換性を確認します。	p.16 の「 オペレーティングシステムおよびプラットフォームの互換性の確認 」を参照してください。
手順 2	NetBackup for Exchange の Exchange ソフトウェアの要件を確認します。	p.18 の「 NetBackup for Exchange の Exchange サーバーソフトウェア要件 」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 3	NetBackup for Exchange の NetBackup ソフトウェア 必要条件を検証します。	p.16 の「 NetBackup for Exchange 用 NetBackup サーバーの要件 」を参照してください。 p.17 の「 NetBackup for Exchange 用 NetBackup クライアントの要件 」を参照してください。
手順 4	スナップショット操作のために、このバックアップ形式の 要件を検証してください。	p.18 の「 Exchange スナップショットバックアップの Snapshot Client 構成とライセンス要件 」を参照してください。
手順 5	マスターサーバーに NetBackup for Exchange の有効なライセンス、NetBackup オプション、または使用するアドオンがあることを確認します。	p.20 の「 NetBackup for Exchange のライセンスについて 」を参照してください。

オペレーティングシステムおよびプラットフォームの互換性の確認

ご使用のオペレーティングシステムまたはプラットフォームで NetBackup for Exchange エージェントがサポートされていることを確認してください。

オペレーティングシステムおよび互換性を確認する方法

- 1 次の Web ページに移動します。
<http://www.netbackup.com/compatibility>
- 2 文書のリストで、次の文書をクリックします。
[アプリケーション/データベースエージェント互換性リスト](#)
- 3 Snapshot Client でのサポート情報については、次のマニュアルを参照してください。
[Snapshot Client 互換リスト](#)
- 4 VMware でのサポートについて詳しくは、次のマニュアルを参照してください。
『[仮想環境における NetBackup のサポートに関する記述 \(仮想化テクノロジー\)](#)』

NetBackup for Exchange 用 NetBackup サーバーの要件

NetBackup 8.1.1 の NetBackup for Exchange エージェントに含まれる新しい機能を使用するには、お使いの NetBackup for Exchange クライアントを NetBackup 8.1.1 に

アップグレードする必要があります。NetBackup メディアサーバーは NetBackup for Exchange クライアントと同じまたはそれ以上のバージョンを使う必要があります。

NetBackup サーバーが次の要件を満たしていることを確認します。

- NetBackup サーバーソフトウェアが NetBackup サーバー上にインストールされ、実行可能な状態である。NetBackup サーバーのプラットフォームは、NetBackup がサポートするものであれば、どのプラットフォームでも問題ありません。
[『NetBackup インストールガイド』](#)を参照してください。
- ストレージユニットで使用するバックアップメディアが構成されている。
必要なメディアボリュームの数は、いくつかの要因によって異なります。
 - 使用しているデバイス
 - バックアップを行うデータベースのサイズ
 - アーカイブを行うデータの量
 - バックアップのサイズ
 - バックアップまたはアーカイブの間隔[『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』](#)を参照してください。

NetBackup for Exchange 用 NetBackup クライアントの要件

このトピックは Exchange サーバーのバックアップを実行するため、NetBackup クライアントおよび必要なバージョンをどこにインストールする必要があるか記述します。

- NetBackup 8.1.1 の NetBackup for Exchange に含まれる新しい機能を使うには、NetBackup for Exchange クライアントを NetBackup 8.1.1 にアップグレードする必要があります。NetBackup メディアサーバーは NetBackup for Exchange クライアントと同じまたはそれ以上のバージョンを使う必要があります。
- 次で NetBackup クライアントソフトウェアをインストールしてください:
 - Exchange メールボックスサーバー、または Exchange メールボックスサーバーであるすべての VM において
 - 個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用する場合、参照またはリストアの操作を実行するすべてのメールボックスサーバーに NetBackup クライアントをインストールしてください。
 - Exchange クラスタまたは DAG の各ノード
 - (非 VMware バックアップ) 任意のオフホストクライアント

- VMware 操作のために、クライアントソフトウェアをアップグレードする場合は、Veritas VSS providerの最新版をインストールする必要があります。プロバイダの既存のバージョンがあれば、最初に古いバージョンをアンインストールしてください。

NetBackup for Exchange の Exchange サーバーソフトウェア要件

NetBackup サーバーまたはクライアント上の Exchange サーバーソフトウェアに関する次の項目について確認します。

- Exchange サーバーソフトウェアがインストールされ、実行可能な状態になっている必要があります。
- Exchange サーバー NetBackup ソフトウェアの必要条件について詳しくは、次を参照してください。
p.16 の「[NetBackup for Exchange 用 NetBackup サーバーの要件](#)」を参照してください。
p.17 の「[NetBackup for Exchange 用 NetBackup クライアントの要件](#)」を参照してください。
- Exchange を保護する VMware のバックアップを実行する予定で、Exchange データが GPT (GUID パーティションテーブル) のディスクに存在している場合は、Granular Recovery はサポートされません。
- Exchange Server は、オフホストクライアントにインストールする必要はありません。

Exchange スナップショットバックアップの Snapshot Client 構成とライセンス要件

Exchange Server のリストアのスナップショットバックアップを実行するには、次の構成要件とライセンス要件を満たす必要があります。

- 構成するスナップショットの形式が、自分の Exchange 環境でサポートされていることを確認します。次の互換性リストを参照してください。
[Snapshot Client 互換リスト](#)
- NetBackup Snapshot Client を構成し、使用するスナップショット方式の構成要件を満たすことを確認します。
『[NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド](#)』を参照してください。
- Veritas Storage Foundation for Windows (SFW) を使用する場合は、ソフトウェアレベルがサポートされていることを確認します。
- 次のスナップショットオプションまたは Exchange 構成には、別の Snapshot Client のライセンスが必要です。

- インスタントリカバリ
- オフホストバックアップ
- ハードウェアプロバイダを使用したバックアップ

Snapshot Client のライセンスは、Microsoft のデフォルトプロバイダまたは SFW を使用する Exchange のスナップショットバックアップには必要ありません。

- 追加インストール要件は、インスタントリカバリおよびオフホストバックアップに適用されます。
p.19 の「[Exchange オフホストバックアップの要件](#)」を参照してください。
p.19 の「[Exchange インスタントリカバリバックアップの要件](#)」を参照してください。
- データベースバックアップから個々の項目をリストア (個別リカバリ) する場合、追加のインストール要件が適用され、別の構成が必要です。
p.51 の「[個別リカバリテクノロジー \(GRT\) を使う Exchange バックアップの構成 \(非 VMware バックアップ\)](#)」を参照してください。

Exchange オフホストバックアップの要件

オフホストバックアップの次の要件および操作上の注意事項に注意してください。

- Exchange は、オフホストクライアントにインストールする必要はありません。
- Microsoft 一貫性チェック API を使用して Exchange の一貫性チェックを行う場合、Veritas は代替クライアントに Exchange システム管理ツールをインストールすることを推奨します。それから Exchange Server を再起動します。Exchange 代替クライアントに Exchange システム管理ツールをインストールしない場合は、VC9 ランタイム DLL をインストールする必要があります。これらの DLL は Microsoft 社の x64 VC9 のダウンロードのページからダウンロードできます。
<http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?familyid=BD2A6171-E2D6-4230-B809-9A8D7548C1B6&displaylang=en>
一貫性チェックに関する詳細情報が利用可能です。
p.98 の「[Exchange スナップショットバックアップの一貫性チェック](#)」を参照してください。
p.27 の「[Exchange バックアップでの一貫性チェックオプションについて](#)」を参照してください。
- インスタントリカバリのオフホストバックアップの場合、次の要件を参照してください。
p.19 の「[Exchange インスタントリカバリバックアップの要件](#)」を参照してください。

Exchange インスタントリカバリバックアップの要件

SFW VSS プロバイダを使用する場合、インスタントリカバリバックアップには Storage Foundation for Windows (SFW) SP1 が必要です。

NetBackup for Exchange のライセンスについて

NetBackup for Exchange エージェントは NetBackup クライアントソフトウェアとともにインストールされます。個別のインストールは必要ありません。エージェントの有効なライセンスがマスターサーバーに存在する必要があります。

ライセンスを追加する方法に関する詳細情報を参照できます。

『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』を参照してください。

NetBackup クラスタの場合、NetBackup サーバーが存在する各ノード上に、NetBackup for Exchange の有効なライセンスが存在する必要があります。

Exchange クライアントのホストプロパティの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [Exchange クライアントのホストプロパティの構成](#)
- [\[Exchange\]プロパティ](#)
- [スナップショットバックアップによるすべての Exchange トランザクションログファイルまたはコミットされていない Exchange トランザクションログファイルのみのバックアップについて](#)
- [Exchange 個別のプロキシのホストの構成](#)
- [インスタントリカバリバックアップでの Exchange トランザクションログの切り捨てについて](#)
- [ストレージユニットに対するバックアップの実行による Exchange トランザクションログの切り捨て](#)
- [Exchange バックアップでの一貫性チェックオプションについて](#)
- [クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシシャルについて](#)

Exchange クライアントのホストプロパティの構成

Exchange クライアントのホストプロパティで、選択した Exchange クライアントの設定を構成します。このダイアログボックスに表示されるオプションはクライアントシステムにインストールされている NetBackup のバージョンに基づいたものとなります。クライアントをアップグレードした後もこれらのオプションがすべて表示されていない場合は、NetBackup 管理コンソールを閉じ、再び開きます。

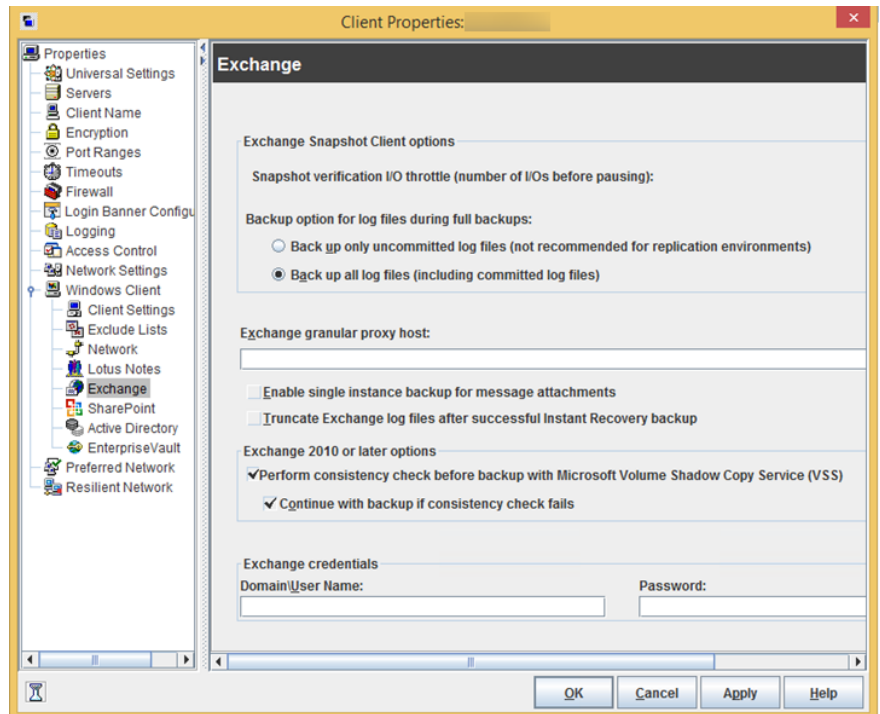
Exchange クライアントのホストプロパティを構成する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールまたはリモート管理コンソールを開きます。
- 2 左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]>[ホストプロパティ (Host Properties)]>[クライアント (Clients)]を展開します。
- 3 右ペインで、構成する Exchange クライアントを選択します。

クライアントがクライアントリストに表示されない場合は、[処理 (Actions)]>[クライアントの構成 (Configure Client)]をクリックします。

メモ: クラスタ環境またはレプリケートされた環境の場合、各ノードを選択します。各ノードで同じ設定を構成する必要があります。クライアントの仮想名の属性を変更する場合は、DAG ホストサーバーのみを更新します。

- 4 [処理 (Actions)]の[プロパティ (Properties)]をクリックします。
- 5 [Windows クライアント (Windows Client)]を展開して、[Exchange]をクリックします。



- 6 必要なオプションを有効にします。
p.23 の「[Exchange]プロパティ」を参照してください。
- 7 [OK]をクリックします。

[Exchange]プロパティ

[Exchange]プロパティは、現在選択されている Windows クライアントに適用されます。クラスタ環境またはレプリケートされた環境では、すべてのノードで同じ設定を構成します。仮想サーバー名の属性を変更する場合は、DAG ホストサーバーのみ更新されます。

[Exchange]ダイアログボックスには次のプロパティが含まれます。

表 3-1 [Exchange]ダイアログボックスのプロパティ

プロパティ	説明
スナップショット検証 I/O スロットル (Snapshot verification I/O throttle)	このプロパティは、Exchange 2007 による[MS-Exchange-Server]バックアップポリシーだけに適用されます。このバージョンの Exchange のサポートは終了しました。
完全バックアップ中のログファイルのバックアップオプション (Backup option for log files during full backups)	メモ: このプロパティは、[MS-Exchange-Server]バックアップポリシーのみに適用されます。 スナップショットバックアップに含めるログを選択します。 ■ コミットされていないログファイルのみをバックアップ (Back up only uncommitted log files) ■ すべてのログファイルをバックアップ (コミットされたログファイルを含む) (Backup all log files (including committed log files)) p.25 の「スナップショットバックアップによるすべての Exchange トランザクションログファイルまたはコミットされていない Exchange トランザクションログファイルのみのバックアップについて」を参照してください。
インスタントリカバリが正常に完了した後でログを切り捨てる (Truncate log after successful Instant Recovery backup)	メモ: このプロパティは、[MS-Exchange-Server]バックアップポリシーのみに適用されます。 インスタントリカバリのバックアップが正常に完了した後でトランザクションログを削除するには、このオプションを有効にします。デフォルトでは、スナップショットのみである完全インスタントリカバリバックアップのトランザクションログは削除されません。 p.27 の「インスタントリカバリバックアップでの Exchange トランザクションログの切り捨てについて」を参照してください。

プロパティ	説明
Exchange 個別リストア用プロキシホスト (Exchange granular proxy host)	メモ: このプロパティは、個別リカバリテクノロジー (GRT) を使うバックアップを複製または参照するときに適用されます。 GRT を使用するバックアップ (bplist を使用して) を複製または参照する場合、別の Windows システムをソースクライアントのプロキシとして機能するように指定することもできます。ソースクライアントに影響を与えないようにする場合、またはソースクライアントが利用できない場合は、プロキシを使用します。 p.26 の「Exchange 個別のプロキシのホストの構成」を参照してください。 p.47 の「Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ」を参照してください。 p.49 の「Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ」を参照してください。
メッセージの添付ファイルに対する単一インスタンスのバックアップを有効にする (Enable single instance backup for message attachments)	メモ: このプロパティは、Exchange 2007 による[MS-Exchange-Server]バックアップポリシーだけに適用されます。このバージョンの Exchange のサポートは終了しました。
Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) を使用するバックアップの前に一貫性チェックを実行する (Perform consistency check before backup with Microsoft Volume Shadow Copy Service (VSS))	DAG バックアップの実行時に一貫性チェックを実行しない場合は、このオプションを無効にします。[一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する (Continue with backup if consistency check fails)] にチェックマークを付けると、一貫性チェックに失敗した場合も NetBackup はバックアップを続行します。 p.27 の「Exchange バックアップでの一貫性チェックオプションについて」を参照してください。
Exchange クレデンシアル (Exchange credentials)	このプロパティについて、次の点に注意してください。 ■ このプロパティは、Exchange のリカバリによる MS-Exchange-Server および VMware のバックアップポリシーに適用されます。 ■ Exchange 2013 以降の場合は、GRT の使用時にこのプロパティを設定する必要があります。 NetBackup Exchange 操作のアカウントのクレデンシアルを指定します。このアカウントには、Exchange のリストア操作の実行に必要な権限が必要です。必要なアクセス権はお使いの Exchange バージョンに依存します。アカウントには、「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限も必要です。 p.28 の「クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシアルについて」を参照してください。 p.30 の「NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について」を参照してください。 p.36 の「「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について」を参照してください。

スナップショットバックアップによるすべての Exchange トランザクションログファイルまたはコミットされていない Exchange トランザクションログファイルのみのバックアップについて

[完全バックアップ時のログファイルのバックアップオプション (Backup option for log files during full backups)]では、完全バックアップまたはユーザー主導のスナップショットバックアップ時にバックアップされるログファイルの数が決定されます。Exchange クライアントのホストプロパティでこの設定を調整できます。

[コミットされていないログファイルのみをバックアップ (Back up only uncommitted log files)]を選択すると、スナップショットをとった時点で Exchange データベースにコミットされなかったトランザクションログファイルだけのバックアップが行われ、カタログが作成されます。Exchange では、データベースの一貫性を保つために、Exchange データベースのリカバリ中にこのようなコミットされていないログファイルが必要です。[すべてのログファイルをバックアップ (コミットされたログファイルを含む)(Back up all log files (including committed log files))]]を選択すると、スナップショットボリュームにあるすべてのログファイルのバックアップが行われ、カタログが作成されます。

[コミットされていないログファイルのみをバックアップ (Back up only uncommitted log files)]はレプリケートされた環境では推奨されません。次の記事を参照してください。

<http://www.veritas.com/docs/TECH88101>

コミットされていないログファイルだけをバックアップする場合の利点は、ストレージユニットでトランザクションログに必要な領域が少なくすむことです。すべてのログファイルをバックアップする場合の利点は、連続したログファイルのセットが保持される点です。これらのログファイルは、前回の完全バックアップのロールフォワードに使用できます。これらのオプションは、現在の完全バックアップまたはユーザー主導バックアップをリカバリする機能には影響を与えません。これらのオプションは、前回の完全バックアップまたはユーザー主導バックアップからロールフォワードする機能に影響を与えます。

たとえば、完全バックアップが行われた後、2 回の差分バックアップが行われ、さらにもう一度完全バックアップが行われたとします。[すべてのログファイルをバックアップ (Back up all log files)]が指定されている場合は、すべてのログファイルがバックアップイメージに存在します。最初の完全バックアップ、2 回の差分バックアップのログファイルおよび 2 回目の完全バックアップのログファイルがリストアされます。ログファイルはすべて存在するため、ロールフォワードリカバリが可能です。[コミットされていないログファイルのみをバックアップ (Back up only uncommitted log files)]を選択した場合、バックアップイメージ内のトランザクションログは連続しません。完全バックアップから、2 回の差分バックアップの対象になった時間までのログファイルのみをリストアできます。

クライアントのホストプロパティを構成する方法について詳しくは、次の項を参照してください。

p.21 の「[Exchange クライアントのホストプロパティの構成](#)」を参照してください。

Exchange 個別のプロキシのホストの構成

個々の項目を個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用して参照またはリストアする場合、**NetBackup** は宛先クライアントを使用して、リストアするデータベースの仮想コピーを実行します。ただし、GRT を使う (bp`list` を使った) バックアップを複製または参照する場合、バックアップのソースクライアントを使ってデータベースをステージングします。または、別の **Windows** システムをソースクライアントのプロキシとして機能するように指定することもできます。

次の状況のいずれかが該当する場合、複製または参照操作のプロキシホストを指定します。

- ソースクライアントに影響を与えたくない場合。
- ソースクライアントが利用できない場合。
- ソースクライアントのホストプロパティで指定されたものとは異なるプロキシホストを使用する場合。

Exchange 個別のプロキシのホストには次の要件があります。

- **Exchange** ホストと同じバージョンの **NetBackup** がインストールされていること。
- **Exchange** ホストとして同一の **NetBackup** マスターサーバーを使用すること。
- **Exchange** ホストに含まれていること。
プロキシホストが **NetBackup** マスターサーバーまたはメディアサーバーでない場合は、**Exchange** ホストのリストにプロキシホストのみ追加する必要があります。

-granular_proxy オプションは、bp`duplicate` コマンドおよび bp`list` コマンドで指定できます。-granular_proxy オプションを使用すると、**Exchange** 個別のプロキシホストを強制変更することができます。これらのコマンドを使用した個別リストア用ホストの指定方法について、詳細情報を参照できます。

p.154 の「[コマンドラインを使用したExchange個別バックアップイメージの参照またはリストア](#)」を参照してください。

NetBackup では、個別リストア用プロキシホストは次の順序で決まります。

- コマンドラインの -granular_proxy オプションで指定したホスト
- ソースクライアントのホストプロパティで指定した個別リストア用プロキシホスト
- ソースクライアント

プロキシを指定するには、クライアントの **Exchange** プロパティで[**Exchange** 個別リストア用プロキシホスト (**Exchange granular proxy host**)]を構成します。クライアントホストプロパティの構成方法に関する詳細情報が利用可能です。

p.21 の「[Exchange クライアントのホストプロパティの構成](#)」を参照してください。

インスタントリカバリバックアップでの Exchange トランザクションログの切り捨てについて

デフォルトでは、Exchange トランザクションログは、ストレージユニットにバックアップしない完全インスタントリカバリバックアップでは切り捨てられません。ログを切り捨てるには、クライアントの [Exchange] プロパティの [インスタントリカバリが正常に完了した後でログを切り捨てる (Truncate log after successful Instant Recovery backup)] を有効にします。このオプションを選択する前に慎重に考慮してください。ディザスタリカバリでスナップショットを保持する個別の方式があることを確認してください。または、ストレージユニットに対して完全インスタントリカバリバックアップを実行できます。

p.27 の「[ストレージユニットに対するバックアップの実行による Exchange トランザクションログの切り捨て](#)」を参照してください。

クライアントのホストプロパティを構成する方法について詳しくは、次の項を参照してください。

p.21 の「[Exchange クライアントのホストプロパティの構成](#)」を参照してください。

ストレージユニットに対するバックアップの実行による Exchange トランザクションログの切り捨て

ストレージユニットに対してバックアップを実行することで Exchange トランザクションログを切り捨てる方法

- 1 新しいバックアップポリシーを作成します。
- 2 完全スケジュール形式または差分スケジュール形式を作成します。
- 3 スケジュールの属性で、[スナップショットを作成し、さらにスナップショットをストレージユニットへコピー (Snapshots and copy snapshots to a storage unit)] を選択します。
- 4 ポリシーのストレージユニットを選択します。
- 5 このポリシーでスナップショットバックアップを実行します。

Exchange バックアップで一貫性チェックオプションについて

デフォルトでは、NetBackup は Exchange バックアップで一貫性チェックを実行するように構成されています。スナップショットで実行する一貫性チェックでは、データが破損して

いる可能性を確認します。スタンドアロンサーバーでは、一貫性チェックを実行する必要があります。データベース可用性グループ (DAG) の場合には一貫性チェックを省略可能です。Exchange クライアントのホストプロパティでこのオプションを構成できます。

[Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) を使用する (Perform consistency check before backup with Microsoft Volume Shadow Copy Service (VSS))]を選択した場合、NetBackup は次のように Exchange オブジェクトをバックアップします。

- [一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する (Continue with backup if consistency check fails)]を選択しない場合、データベースバックアップは破損しているデータベースファイルまたはトランザクションログログファイルが含まれていると失敗します。選択した破損していない他のすべてのデータベースはバックアップされます。
- [一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する (Continue with backup if consistency check fails)]を選択した場合は、破損ファイルが検出されても、すべての Exchange データがバックアップされます。

ホストプロパティでクライアント設定を構成する方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

p.21 の「[Exchange クライアントのホストプロパティの構成](#)」を参照してください。

クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシャルについて

クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシャルは、Exchange リストアの実行に必要なアクセス権を持つアカウントを示します。必要なアクセス権はお使いの Exchange バージョンに依存します。

次の項を参照してください。

p.32 の「[EWS アクセス用の特権付き NetBackup ユーザーアカウントの作成](#)」を参照してください。

p.33 の「[Exchange 用の最小の NetBackup アカウントの作成](#)」を参照してください。

次の点に注意してください。

- Exchange クレデンシャル用に設定したアカウントには、「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限も必要です。
p.36 の「[「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について](#)」を参照してください。
- VMware のバックアップからデータベースをリストアするためには、提供する Exchange クレデンシャルに VM ファイルをリストアする権限がなければなりません。
- Replication Director で作成された VMware のスナップショットのコピーからリストアする場合、次の操作を行います。

- **Exchange** クレデンシャルを[ドメイン¥ユーザー名 (Domain¥User name)]および[パスワード (Password)]フィールドに入力します。
- **NetApp** ディスクアレイで作成される **CIFS** の共有にアクセスするアカウントと **NetBackup Client Service** を設定してください。
- クライアントホストプロパティで **Exchange** クレデンシャルの最小構成の **NetBackup** アカウントを指定する場合、**NetBackup** では **Exchange** データベースのアクティブコピーのバックアップのみを作成できます。ポリシーを作成するとき、[データベースバックアップソース (Database backup source)]フィールドで[パッシブコピーのみ (Passive copy only)]を選択すると、どのバックアップも失敗します。このエラーが発生するのは、**Microsoft Active Directory** サービスインターフェースでは最小構成のアカウントのデータベースコピーリストが提供されないからです。

Exchange 2013 以降向けの追加メモ

GRT を使うには、すべての個別クライアントに **Exchange** クレデンシャルを設定します。

また、リストアを実行する個別クライアントのみで **Exchange** クレデンシャルを設定できます。この場合、全体のドメインで、「表示専用の **Organization Management**」ロールグループに「**Exchange Server**」を追加します。**Exchange Administration Center (EAC)** または **Active Directory** でこの設定を実行します。詳しくは、次の **Microsoft** 社の記事を参照してください。

<http://technet.microsoft.com/en-us/library/jj657492>

Exchange 2010 向けの追加注記

これらの追加項目は、**Exchange 2010** に適用されます。

- **VMware** バックアップから個別リストアする場合、個別リストアを実行する **Exchange** クライアントのみが **Exchange** クレデンシャルの設定を必要とします。**Exchange** クレデンシャルは、バックアップまたは参照操作には必要ではありません。

NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について](#)
- [NetBackup および Microsoft Web サービスについて](#)
- [EWS アクセス用の特権付き NetBackup ユーザーアカウントの作成](#)
- [Exchange 用の最小の NetBackup アカウントの作成](#)
- [「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について](#)

NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について

NetBackup には、次を実行できるように、Exchange メールボックスおよびパブリックフォルダへの管理者アクセス権が必要です。

- ポリシーを定義する場合、メールボックスを列挙します。
- [個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)]を選択し、完全データベースバックアップから、メールボックスとパブリックフォルダをリストアします。

NetBackup は、固有の Exchange メールボックスに関連付けられている NetBackup Exchange 操作のアカウントである Active Directory ユーザーアカウントを通して、Exchange へのアクセスを取得します。このメールボックスには、バックアップおよびリストアを実行するために十分な役割またはグループメンバーシップがあります。NetBackup Exchange 操作には、Exchange クライアントホストプロパティの [Exchange クレデンシャル (Exchange credentials)] のアカウントを使用します。

表 4-1 NetBackup Exchange 操作のアカウント構成の手順

手順	処理	説明
手順 1	該当する Exchange 個別クライアントで、次の手順を実行します。	クラスター環境またはレプリケートされた環境の場合は、クラスター内のデータベースノードごとにこれらの手順を実行します。 GRT 処理を構成するクライアントを決定する方法については、次のトピックを参照してください。 p.47 の「Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ」を参照してください。 p.49 の「Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ」を参照してください。
手順 2	該当する Exchange 個別クライアントで、NetBackup の Exchange メールボックスを作成します (または NetBackup Exchange 操作のアカウント)。	次に示すように、アカウントを構成します。 ■ Veritas は一意の名前を持つメールボックスを作成することをお勧めします。このメールボックスが非表示ではないこと確認してください。 ■ 使用する Exchange のバージョンに固有の手順を参照します。 p.32 の「EWS アクセス用の特権付き NetBackup ユーザーアカウントの作成」を参照してください。 p.33 の「Exchange 用の最小の NetBackup アカウントの作成」を参照してください。
手順 3	アカウントに「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を設定します。	p.36 の「 「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について 」を参照してください。
手順 4	該当する Exchange 個別クライアントで、前の手順で作成したアカウントで Exchange クレデンシャルを設定します。	p.28 の「 クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシャルについて 」を参照してください。

NetBackup および Microsoft Web サービスについて

NetBackup は Microsoft Exchange Web サービス (EWS) を使用して個別リカバリテクノロジ (GRT) を使用するリストアをサポートします。EWS では、Exchange データベースバックアップからの個々のメールボックス、メールメッセージ、パブリックフォルダのリストアがサポートされます。

EWS を使用して個々の項目をリストアするには、リストアジョブに指定するリソースのクレデンシャル用に、クライアントのスロットルポリシーを変更する必要があります。クライアントのスロットルポリシーは宛先クライアントにあり、Exchange Server に対して接続の帯域幅と動作の制限を適用します。特権アカウントで NetBackup を実行すると、スロットルポ

リシーを自動的に作成し、アカウントに割り当てます。NetBackup は最小の権限を持つアカウントではこれらの処理を実行できません。その場合、アカウントの設定時にスロットルポリシーを作成して割り当てする必要があります。

ユーザーアカウントがドメイン管理者または Exchange 組織の管理者の場合、NetBackup では、偽装の役割と Exchange の偽装のための役割の割り当てでも作成されます。Exchange の偽装の役割の割り当てにより、偽装の役割が、リストアジョブに指定する NetBackup リソースクレデンシアルと関連付けられます。NetBackup では、次の役割が作成され、割り当てられます。

- SymantecEWSImpersonationRole
- SymantecEWSImpersonationRoleAssignment

最小限の NetBackup ユーザーアカウントには、これらの割り当てを行う権限がありません。指示に従ってこの種類のアカウントのを作成します。

EWS アクセス用の特権付き NetBackup ユーザーアカウントの作成

この手順では、EWS アクセスのための NetBackup Exchange 操作用の特権付きアカウントを作成する方法の例を示します。このアカウントは Exchange クライアントのホストプロパティの Exchange クレデンシアルで使われ、NetBackup での個別リカバリの技術 (GRT) による操作の実行を可能にします。

次の点に注意してください。

- 各 Exchange メールボックスサーバーを構成します。
- 個別の操作を実行する各クライアントを構成します。構成するクライアントを決定する方法については、次のトピックを参照してください。
p.47 の「[Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ](#)」を参照してください。
p.49 の「[Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ](#)」を参照してください。
- クラスタ環境の場合は、クラスタ内のデータベースノードごとにこれらの手順を実行します。Exchange DAG の場合は、DAG の各データベースノードでこれらの手順を実行します。

EWS アクセス用の特権付き NetBackup ユーザーアカウントを作成するには

- 1 Exchange 管理コンソールで、NetBackup のための Exchange メールボックスを作成します。

この処理は自動的にドメインユーザーになる新しいユーザーを作成します。

- 2 作成したユーザーアカウントをダブルクリックします。

- 3 [所属するグループ (Member Of)]タブを選択します。
- 4 [追加 (Add)]をクリックし、Organization Managementのグループにこのユーザーを追加します。

権限の問題が解決しない場合は、Domain Admin グループこのユーザーを追加してみてください。NetBackup クライアントサービスがこのアカウントにログオンした場合、このアカウントはまた管理者グループのメンバーになる必要もあります。

- 5 Exchange クライアントのホストプロパティで、このアカウントのクレデンシャルを指定します。

p.28 の「クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシャルについて」を参照してください。

Exchange クライアントのホストプロパティで Exchange クレデンシャルを設定することを Veritas がお勧めします。ただし、NetBackup の既存ユーザーは引き続き NetBackup クライアントサービスのためにログオンアカウントを構成できます。

- 6 このアカウントに「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を設定します。

p.36 の「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について」を参照してください。

NetBackup クライアントサービスをログオンアカウントで設定し、Exchange クレデンシャルを Exchange クライアントのホストプロパティで設定した場合、この両方のユーザーに「プロセスレベルトークンの置き換え」を設定する必要があります。

Exchange 用の最小の NetBackup アカウントの作成

このプロシージャは、NetBackup Exchange 操作のための最小のアカウントを作成する方法を記述します。このアカウントは Exchange クライアントのホストプロパティの Exchange クレデンシャルで使われ、NetBackup での個別リカバリの技術 (GRT) による操作の実行を可能にします。

次の点に注意してください。

- 各 Exchange メールボックスサーバーを構成します。
- 個別の操作を実行する各クライアントを構成します。構成するクライアントを決定する方法については、次のトピックを参照してください。

p.47 の「Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ」を参照してください。

p.49 の「Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ」を参照してください。
- クラスタ環境の場合は、クラスタ内のデータベースノードごとにこれらの手順を実行します。Exchange DAG の場合は、DAG の各データベースノードでこれらの手順を実行します。

メモ: クライアントホストプロパティで Exchange クレデンシャルの最小構成の NetBackup アカウントを指定する場合、NetBackup では Exchange データベースのアクティブコピーのバックアップのみを作成できます。ポリシーを作成するとき、[データベースバックアップソース (Database backup source)] フィールドで [パッシブコピーのみ (Passive copy only)] を選択すると、どのバックアップも失敗します。このエラーが発生するのは、Microsoft Active Directory サービスインターフェースでは最小構成のアカウントのデータベースコピーリストが提供されないからです。

ポリシーが、[データベースバックアップソース (Database backup source)] フィールドで [パッシブコピー。利用できない場合はアクティブコピー (Passive copy and if not available the active copy)] を指定する場合、NetBackup は各データベースのアクティブコピーのバックアップを作成します。

Exchange の操作のための最小構成の NetBackup アカウントを作成する方法

- 1 Exchange 管理コンソールで、NetBackup のための Exchange メールボックスを作成します。

この処理は自動的にドメインユーザーになる新しいユーザーを作成します。この手順は **NetBackupUser** としてそのユーザーを参照します。

- 2 作成したユーザーアカウントをダブルクリックします。
- 3 [所属するグループ (Member Of)] タブを選択します。
- 4 [追加 (Add)] をクリックし、このユーザーを [管理者 (Administrators)] グループに追加します。
- 5 新しいロールグループを作成し、アカウントをこのグループのメンバーとしてロールを割り当てます。Exchange 管理シェルの使って次のコマンドを実行します。

メモ: アカウントに必要な権限がなければ、管理者はこれらのタスクを実行する必要があります。

```
New-RoleGroup -Name NetBackupRoles -Roles @("Database Copies", "Databases",  
"Exchange Servers", "Monitoring", "Mail Recipient Creation", "Mail Recipients",  
"Recipient Policies")
```

```
Add-RoleGroupMember -Identity NetBackupRoles -Member NetBackupUser
```

ここで、**NetBackupUser** は 1 で作成した Active Directory アカウントの名前です。

- 6 個別リカバリテクノロジー (GRT) でリストアを実行するには、Exchange 管理シェルで次のコマンドも実行します。

Exchange 2010 の場合:

```
New-ManagementRole -Name SymantecEWSImpersonationRole -Parent ApplicationImpersonation

New-ManagementRoleAssignment -Role SymantecEWSImpersonationRole -User NetBackupUser
-Name "NetBackupUser-EWSImpersonation"

New-ThrottlingPolicy -Name "SymantecEWSRestoreThrottlingPolicy" -EWSPercentTimeInCAS
$null -EWSPercentTimeInAD $null -EWSMaxConcurrency $null -EWSPercentTimeInMailboxRPC
$null -PowerShellMaxConcurrency $null

Set-Mailbox -Identity NetBackupUser -ThrottlingPolicy
"SymantecEWSRestoreThrottlingPolicy"
```

Exchange 2013 と Exchange 2016 の場合:

```
New-ManagementRole -Name SymantecEWSImpersonationRole -Parent ApplicationImpersonation

New-ManagementRoleAssignment -Role SymantecEWSImpersonationRole -User NetBackupUser
-Name "NetBackupUser-EWSImpersonation"

New-ThrottlingPolicy -Name "SymantecEWSRestoreThrottlingPolicy" -EwsCutoffBalance
"Unlimited" -EwsMaxBurst "Unlimited" -EwsMaxConcurrency "Unlimited"
-ExchangeMaxCmdlets "Unlimited" -MessageRateLimit "Unlimited"
-PowerShellCutoffBalance "Unlimited" -PowerShellMaxBurst "Unlimited"
-PowerShellMaxCmdlets "Unlimited" -PowerShellMaxConcurrency "Unlimited"
-PowerShellMaxOperations "Unlimited" -RecipientRateLimit "Unlimited"
-ThrottlingPolicyScope "Regular"

Set-Mailbox -Identity NetBackupUser -ThrottlingPolicy
"SymantecEWSRestoreThrottlingPolicy"
```

- 7 Exchange クライアントのホストプロパティで、このアカウントのクレデンシャルを指定します。

p.28 の「クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシャルについて」を参照してください。

- 8 このアカウントに「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を設定します。

p.36 の「「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について」を参照してください。

「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について

Exchange の各メールボックスサーバーで、NetBackup Exchange 操作のためのアカウントに「プロセスレベルのトークンを置き換える」権限を割り当てる必要があります。この権限は Active Directory および PowerShell コマンドを実行する NetBackup プロセスの処理に権限借用トークンを渡すために必要です。

「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成(ローカルセキュリティポリシー)

この手順では、ローカルセキュリティポリシーを構成して、NetBackup Exchange 操作のアカウントに「プロセスレベルトークンの置き換え」権限を持たせる方法について説明します。

「プロセスレベルトークンの置き換え」権限を使用して NetBackup Exchange 操作のアカウントを構成する方法(ローカルセキュリティポリシー)

- 1 [ローカルセキュリティポリシー (Local Security Policy)]を開きます。
- 2 [ローカルポリシー]をクリックします。
- 3 [ユーザー権利の割り当て User Rights Assignment]では、Replace a process level token というポリシーに、NetBackup Exchange 操作のためのアカウントを追加します。
- 4 この変更を有効にするために、グループポリシーの更新コマンド(グループポリシーの更新)を実行します。

```
gpupdate /Force
```

「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成(ドメインコントローラ上)

この手順では、ドメインコントローラにポリシーを構成して、NetBackup Exchange 操作のアカウントに「プロセスレベルトークンの置き換え」権限を持たせる方法について説明します。

「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントを構成する方法(ドメインコントローラ上)

- 1 [グループポリシーの管理 (Group Policy Management)]を開きます。
- 2 ドメインの下で、[グループポリシーのオブジェクト]>[既定のドメイン コントローラのポリシー (Default Domain Controllers Policy)]を選択します。

- 3 [設定 (Settings)]タブをクリックします。
- 4 [セキュリティの設定 (Security Settings)]>[ローカルポリシー (Local Policies)]を展開します。
- 5 [ユーザー権利の割り当て (User Rights Assignment)]で右クリックし、[編集 (Edit)]をクリックします。
- 6 Group Policy Object Editor で、[コンピュータの構成 (Computer Configuration)]>[ポリシー (Policies)]>[Windows の設定 (Windows Settings)]> セキュリティの設定 (Security Settings)]>[ローカルポリシー (Local Policies)]を展開します。
- 7 [ユーザー権利の割り当て User Rights Assignment]では、Replace a process level token というポリシーに、NetBackup Exchange 操作のためのアカウントを追加します。
- 8 この変更を有効にするために、グループポリシーの更新コマンド (グループポリシーの更新) を実行します。

```
gpupdate /Force
```

Exchange ホストの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- 分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定
- ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認

分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定

この構成は、バックアップ処理に **NetBackup** が使うクライアントとソースクライアントが異なる環境でバックアップの参照またはリストアの実行を行う場合に必要になります。マスターサーバーの分散アプリケーションリストアマッピングホストプロパティのこのマッピングを設定します。または、サーバー主導リストアを行うことができます。リダイレクトリストアを許可する方法の詳しい手順については、『**NetBackup 管理者ガイド Vol. 1**』を参照してください。

この構成は次の状況に適用されます：

- 個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用するすべての操作。
Exchange の仮想ホスト名と物理ホスト名のリストを提供します。GRT のバックアップイメージにアクセスするすべてのクライアントはリストに含まれる必要があります。オフホストクライアントと個別プロキシホストも含める必要があります。
p.47 の「**Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ**」を参照してください。
p.49 の「**Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ**」を参照してください。
- Exchange DAG
- クラスタ化された Exchange サーバー
- Exchange 個別リストア用プロキシホスト
p.26 の「**Exchange 個別のプロキシのホストの構成**」を参照してください。

- オフホストバックアップ
- ソースクライアント以外の宛先クライアントを選択する場合

次の点に注意してください。

- ホストの短縮名または完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力します。両方の形式の名前を入力する必要はありません。
- **NetBackup** マスターサーバーまたはメディアサーバーでない場合のみ、リストにプロキシホストを追加する必要があります。
- (VMware ポリシー) スタンドアロンサーバーの場合、[VM ホスト名 (VM hostame)] 以外の[プライマリ VM 識別子 (Primary VM identifier)]を選択すると、バックアップは別のクライアント名の下でカタログ化されます。ホストのリストでは、**NetBackup** クライアント名と[VMware (VMware)]タブで選択した識別子を反映した名前を追加する必要があります。

分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングを設定するには

- 1 マスターサーバーで **NetBackup** 管理コンソールを開きます。
- 2 [NetBackup の管理 (NetBackup Management)]>[ホストプロパティ (Host Properties)]>[マスターサーバー (Master Server)]を選択します。
- 3 右ペインで、マスターサーバーをダブルクリックします。
- 4 [分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)]を選択します。
- 5 [追加 (Add)]をクリックします。
- 6 アプリケーションホスト名とコンポーネントホスト名を指定します。

アプリケーションホストはポリシーのクライアント名、または **VMware** バックアップで該当する場合は **DAG** の名前です。コンポーネントホストはバックアップイメージへのアクセスを必要とするクライアントです。[表 5-1](#)および[表 5-2](#)を参照してください。

非 VMware バックアップの Exchange ホストのエントリの例

表 5-1 非 VMware バックアップの Exchange ホストのエントリの例

環境	アプリケーションホスト	コンポーネントホスト
DAG	DAG の仮想名	<i>Node 1</i> の物理名
	DAG の仮想名	<i>Node 2</i> の物理名
	DAG の仮想名	<i>Node 3</i> の物理名
	DAG の仮想名	個別プロキシホスト名

環境	アプリケーションホスト	コンポーネントホスト
クラスタ	仮想クラスタ名	<i>Node 1</i> の物理名
	仮想クラスタ名	<i>Node 2</i> の物理名
	仮想クラスタ名	<i>Node 3</i> の物理名
	仮想クラスタ名	個別プロキシホスト名
スタンドアロン	ポリシーのクライアント名	個別プロキシホスト名
オフホスト	プライマリクライアント名	オフホストのコンピュータ名

VMware バックアップの Exchange ホストのエントリの例

表 5-2 VMware バックアップの Exchange ホストのエントリの例

環境	アプリケーションホスト	コンポーネントホスト
DAG	DAG の仮想名	<i>Node 1</i> の物理名
	DAG の仮想名	<i>Node 2</i> の物理名
	DAG の仮想名	<i>Node 3</i> の物理名
	<i>Node 1</i> の物理名	<i>Node 2</i> の物理名
	<i>Node 1</i> の物理名	<i>Node 3</i> の物理名
	<i>Node 2</i> の物理名	<i>Node 1</i> の物理名
	<i>Node 2</i> の物理名	<i>Node 3</i> の物理名
	<i>Node 3</i> の物理名	<i>Node 1</i> の物理名
	<i>Node 3</i> の物理名	<i>Node 2</i> の物理名
	DAG の仮想名	個別プロキシホスト名
クラスタ	仮想クラスタ名	<i>Node 1</i> の物理名
	仮想クラスタ名	<i>Node 2</i> の物理名
	仮想クラスタ名	<i>Node 3</i> の物理名
	<i>Node 1</i> の物理名	<i>Node 2</i> の物理名
	<i>Node 1</i> の物理名	<i>Node 3</i> の物理名

環境	アプリケーションホスト	コンポーネントホスト
	<i>Node 2</i> の物理名	<i>Node 1</i> の物理名
	<i>Node 2</i> の物理名	<i>Node 3</i> の物理名
	<i>Node 3</i> の物理名	<i>Node 1</i> の物理名
	<i>Node 3</i> の物理名	<i>Node 2</i> の物理名
	仮想クラスタ名	個別プロキシホスト名
スタンドアロンサーバー	NetBackup がバックアップをカタログ化したクライアントの名前	VM 表示名、VM BIOS UUID、VM DNS 名 ([VM ホスト名 (VM hostname)] 以外のプライマリ VM 識別子)
	ポリシーのクライアント名	個別プロキシホスト名

p.51 の「個別リカバリテクノロジー (GRT) を使う Exchange バックアップの構成 (非 VMware バックアップ)」を参照してください。

ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認

特定のシナリオでは、NetBackup ホストは他のホストと特定の名前を共有したり、クラスタに関連付けられた名前が付けられます。NetBackup for Exchange で正常にバックアップおよびリストアを実行するには、NetBackup によってお使いの環境から検出されたすべての有効な自動検出されたマッピングを承認しておく必要があります。これらのマッピングは、マスターサーバーのホスト管理プロパティに表示されます。マッピングを管理する nbhostmgmt コマンドも使うことができます。ホスト管理プロパティについて詳しくは、『セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

複数のホスト名がある構成の例は、次のとおりです。

- ホストが完全修飾ドメイン名 (FQDN) および短縮名または IP アドレスに関連付けられる
- Exchange サーバーがクラスタ化されている場合は、ホストはノード名とクラスタの仮想名に関連付けられます。
- Exchange データベース可用性グループ (DAG) の場合は、DAG の各ノードは DAG 名に関連付けられます。

クラスタの自動検出されたマップ

Exchange クラスタ環境で次が該当する場合にはノード名をクラスタの仮想名にマッピングする必要があります

- バックアップポリシーにクラスタ名 (または仮想名) が含まれている
- NetBackup クライアントがクラスタ内の複数のノードにインストールされている
NetBackup クライアントが 1 つのノードにのみインストールされている場合にはマッピングは必要ありません。

クラスタの自動検出されたマッピングを承認するには

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[セキュリティ管理 (Security Management)]、[ホスト管理 (Host Management)] の順に展開します。
- 2 [ホスト (Hosts)] ペインの下部にある [承認待ちのマッピング (Mappings for Approval)] タブをクリックします。

お客様の環境のホストが一覧表示されるほか、これらのホストに対して NetBackup によって検出されたマッピングまたは追加のホスト名が一覧表示されます。ホストには、マッピングごと、またはマッピングに関連付けられている名前ごとに 1 つのエントリがあります。

たとえば、ホスト client01.lab04.com と client02.lab04.com で構成されるクラスタの場合は、次のエントリが表示されます。

ホスト (Host)	自動検出されたマッピング (Auto-discovered Mapping)
client01.lab04.com	client01
client01.lab04.com	clustername
client01.lab04.com	clustername.lab04.com
client02.lab04.com	client02
client02.lab04.com	clustername
client02.lab04.com	clustername.lab04.com

- 3 マッピングが有効な場合は、ホストのエントリを右クリックし、[承認 (Approve)]をクリックします。
- たとえば、次のマッピングが `client01.lab04.com` で有効な場合は、それらのマッピングを承認します。

自動検出されたマッピング (Auto-discovered Mapping)	名前が有効なホスト
client01	クライアントの短縮名
clustername	クラスタの仮想名
clustername.lab04.com	クラスタの仮想名の FQDN

- 4 ホストの有効なマッピングの承認が完了したら、ホスト (Hosts)] ペインの下部にある [ホスト (Hosts)] タブをクリックします。
- ホスト `client01.lab04.com` と `client02.lab04.com` に対し、次のような [マッピング済みのホスト名/IP アドレス (Mapped Host Names / IP Addresses)] が表示されます。

ホスト (Host)	マッピング済みのホスト名/IP アドレス (Mapped Host Names / IP Addresses)
client01.lab04.com	client01.lab04.com、client01、clustername、clustername.lab04.com
client02.lab04.com	client02.lab04.com、client02、clustername、clustername.lab04.com

- 5 NetBackup によって自動的に検出されなかったマッピングは、手動で追加することができます。
- [ホスト (Hosts)] タブをクリックし、[ホスト (Hosts)] ペイン内を右クリックして、[共有マッピングとクラスタマッピングの追加 (Add Shared or Cluster Mappings)] をクリックします。たとえば、名前にはクラスタの仮想名を指定します。[ホストを選択 (Select Hosts)] をクリックして、その仮想名をマッピングするクラスタ内のノード名を選択します。

表 5-3 Exchange の構成用にマッピングされたホスト名の例

環境	ホスト	マッピング済みのホスト名
DAG	Node 1 の物理名	DAG の仮想名

環境	ホスト	マッピング済みのホスト名
	<i>Node 2</i> の物理名	DAG の仮想名
	<i>Node 3</i> の物理名	DAG の仮想名
クラスタ	<i>Node 1</i> の物理名	仮想クラスタ名
	<i>Node 2</i> の物理名	仮想クラスタ名
	<i>Node 3</i> の物理名	仮想クラスタ名

Exchange 個別リカバリの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [Exchange](#) のバックアップと個別リカバリテクノロジー (GRT) について
- 個別リカバリテクノロジー (GRT) を使う [Exchange](#) バックアップの構成 (非 [VMware](#) バックアップ)
- [Exchange](#) 個別リカバリテクノロジー用 [Network File System \(NFS\)](#) のインストールおよび構成
- [Exchange](#) 個別リカバリテクノロジー (GRT) でサポートされるディスクストレージユニット
- 個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用する [Exchange](#) バックアップの複製に対するカタログ化の無効化
- 個別リカバリテクノロジー (GRT) を使う [Exchange](#) バックアップまたは [VMware](#) バックアップのカタログ化
- [NetBackup Client Service](#) のログオンアカウントの構成

Exchange のバックアップと個別リカバリテクノロジー (GRT) について

バックアップで個別リカバリテクノロジー (GRT) が使用される場合、ユーザーはデータベースの完全バックアップから個々の項目を直接リストアできます。このバックアップ形式は、次の両方のリカバリ時に使用できます。同じバックアップイメージから、データベース全体をリストアできます。または、メールボックスまたは共有フォルダにある個々のフォルダまたはメッセージを選択できます。

GRT を使用して、次のようなバックアップ形式から個々の項目をリストアできます。

- 完全バックアップまたはユーザー主導バックアップ
NetBackup では、あらゆる種類のスケジュールを使用して、ディザスタリカバリ用の完全なポリシーを作成できます。ただし、増分バックアップから個々の項目をリストアすることはできません。
- Exchange を保護する VMware バックアップ
- ローカルスナップショットバックアップ
- オフホストスナップショットバックアップ
- インスタントリカバリバックアップ (スケジュールによりスナップショットがストレージユニットにコピーされる場合)
- レプリカスナップショットバックアップ
このバックアップの形式は、データベース可用性グループ (DAG) に適用されます。

メールボックスの検出と個別リカバリテクノロジー (GRT) について

個別リカバリテクノロジー (GRT) で Exchange のリストアを実行するために、NetBackup は Exchange メールボックスについての特定の情報を必要とします。Exchange 2010 では、NetBackup は Exchange データベースに問い合わせを実行することにより、メールボックスの情報を取得します。この問い合わせは Exchange 2013 では十分でないため、NetBackup には Exchange PowerShell を通して、Exchange 2013 メールボックスの情報が含まれます。GRT バックアップ中の処理時間を節約するために、NetBackup Discovery Service の Exchange プラグインが 24 時間ごとにローカルの検出を開始します。次に、マスターサーバーに検出したデータベースのリストを送信します。プラグインは、データベースの最近の Exchange バックアップソースのメールボックス情報のみを収集します。別のサーバーが最近のバックアップソースだった場合、サーバーから情報を収集しません。データベースにバックアップ履歴がない場合、このプラグインはデータベースの複製をホストする各サーバー上でそのデータベースの情報を収集します。検出サービスでデータベースのメールボックスの情報を収集しない場合、NetBackup がスナップショットジョブで情報を収集します。

バックアップステータスをリセットする場合は、次の項を参照してください。

p.194 の「[データベース可用性グループ \(DAG\) のバックアップ状態の表示およびリセット](#)」を参照してください。

NetBackup がログに記録する検出とその他の情報について詳しくは、次の項を参照してください。

p.182 の「[NetBackup for Exchange のバックアップ操作のデバッグログ](#)」を参照してください。

Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ

Exchange 個別リストア用クライアントは、バックアップのスナップショット (非 VMware バックアップ) により、個別リカバリテクノロジー (GRT) を使って、バックアップまたはリカバリ処理を実行するクライアントです。これらのクライアントには、データベースの完全バックアップから個々のメールボックスとパブリックフォルダをリストアするために満たす必要がある特定の要件があります。

Exchange 個別リストア用クライアント

Exchange 個別リストア用クライアントは以下を含んでいます。

- すべてのメールボックスサーバー
- Exchange DAG 上のメールボックスサーバー
- クラスタ化された Exchange サーバー上のメールボックスサーバー
- オフホストクライアント

メールボックスサーバーである Exchange 個別リストア用クライアントの必要条件

メールボックスサーバーである各 Exchange 個別リストア用クライアントには、次の設定が必要です。

- NFS クライアント。NFS クライアントをインストールする必要があります。NetBackup がバックアップイメージの NFS 表示をマウントするのに使う未割り当てのドライブ文字も必要です。
- NetBackup Exchange 操作用のアカウント (NetBackup 用の重複のないメールボックス)。このアカウントには「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限が必要です。
p.36 の「[プロセスレベルトークンの置き換え](#)」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について」を参照してください。
- Exchange クライアントホストプロパティの Exchange クレデンシヤル。NetBackup Exchange 操作のアカウントのクレデンシヤルを使用します。
Exchange 2013 および 2016 の場合は、「Exchange Server」を「表示限定の組織管理」ロールグループに追加することもできます。
p.28 の「[クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシヤルについて](#)」を参照してください。
- (Exchange 2010 の場合) NetBackup Client Service をログオンアカウントで設定し、Exchange クレデンシヤルを Exchange クライアントのホストプロパティで設定した場合は、この両方のユーザーに「プロセスレベルトークンの置き換え」を構成する必要があります。
- 分散アプリケーションのリストアのマッピング。
仮想環境の場合、Exchange 設定においてシステムの仮想名および物理名のマップを作成する必要があります。このマッピングは、バックアップイメージをマウントするか、

リストア操作を開始する NetBackup クライアントに適用されます。マスターサーバーの[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)]ホストプロパティで、これらのマッピングを設定します。

メディアサーバーまたはマスターサーバーではないプロキシサーバーを使用する場合は、そのプロキシサーバーもこのリストに追加する必要があります。

p.38 の「[分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定](#)」を参照してください。

- 環境内のホストの自動検出マッピング。
NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの[ホスト管理 (Host Management)]プロパティで、この設定を実行します。
p.41 の「[ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認](#)」を参照してください。
- クライアントには、バックアップの作成元となるクライアントと同じバージョンの Windows が必要です。
- Exchange 個別リストア用のプロキシサーバーを使っている場合には、メールボックスサーバーとプロキシホストは次の必要条件を満たす必要があります。
 - NetBackup の同じバージョンがインストールされていること
 - 同一の NetBackup マスターサーバーを使っていること
 - どちらも、Exchange の該当バージョンをサポートする Windows バージョンを使っていること
たとえば、Exchange 2010 では、個別のプロキシのホストを Windows 2008 SP2 または R2、あるいは Windows 2012 にインストールする必要があります。詳しくは、[アプリケーション/データベースエージェント互換性リスト](#)を参照してください。

オフホストクライアントである個別リストア用クライアントの必要条件

オフホストクライアントは、次の構成を必要とします。

- オフホストクライアントには、NFS クライアントがインストールされている必要があります。NetBackup がバックアップイメージの NFS 表示をマウントするのに使う未割り当てのドライブ文字も必要です。
- プライマリクライアント名とオフホストコンピュータ名のマップ。
マスターサーバーホストプロパティの分散アプリケーションリストアマッピングのこの設定を実行します。
p.38 の「[分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定](#)」を参照してください。
- リストアを実行する NetBackup クライアントには、バックアップ元のオフホストクライアントと同じバージョンの Windows がインストールされている必要があります。

Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ

Exchange 個別リストア用クライアントは個別リカバリテクノロジー (GRT) によりバックアップまたはリストア操作を実行するクライアントです。すべての Exchange クライアントが VMware 参照およびリストア操作によって GRT 操作を行うわけではないため、この違いは重要です。したがって、クライアントによって構成要件は異なります。

個別リストア用クライアントと Exchange を保護する VMware のバックアップ

Exchange を保護する VMware バックアップでは、個別リストア用クライアントは次を含みます。

- バックアップを参照するクライアント
- リストアする項目を選択するメールボックスの参照に使用するメールボックスサーバー
- Exchange 個別リストア用プロキシホスト
p.26 の「[Exchange 個別のプロキシのホストの構成](#)」を参照してください。

Exchange 個別リストア用クライアントの要件

各 Exchange 個別リストア用クライアントは、次の構成を必要とします。

- すべてのメールボックスサーバーを構成します。
- 個別の参照またはリストアに使用されるすべてのメールボックスサーバーには、NFS クライアントがインストール済みである必要があります。NetBackup がバックアップイメージの NFS 表示をマウントするのに使う未割り当てのドライブ文字も必要です。NFS は VMware バックアップで必要ないことに注意してください。
- NetBackup Exchange 操作用のアカウント (NetBackup 用の一意のメールボックス) このアカウントには「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限が必要です。
p.36 の「[「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限を使用した NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について](#)」を参照してください。
- Exchange クライアントホストプロパティでは、Exchange クレデンシャルに NetBackup Exchange 操作に対するアカウントのクレデンシャルを追加します。

次のクライアントに Exchange クレデンシャルを設定します。バックアップまたは参照操作のみを実行するメールボックスサーバーでは、Exchange クレデンシャルを設定する必要がないことに注意してください。

- Exchange 2013 と Exchange 2016 の場合は、すべての個別クライアントにクレデンシャルを設定します。また、「表示専用の Organization Management」ロールグループに「Exchange Server」を追加します。次に、リストアを実行する宛先クライアントのみに Exchange クレデンシャルを設定します。
- Exchange 2010 の場合、個別リストアを実行する宛先クライアントでクレデンシャルを設定します。

- (Exchange 2010 の場合) NetBackup Client Service をログオンアカウントで設定し、Exchange クレデンシヤルを Exchange クライアントのホストプロパティで設定した場合は、この両方のユーザーに「プロセスレベルトークンの置き換え」を構成する必要があります。
- 分散アプリケーションのリストアのマッピング。
仮想環境の場合、Exchange 設定においてシステムの仮想名および物理名のマップを作成する必要があります。このマッピングは、バックアップイメージをマウントするか、リストア操作を開始する NetBackup クライアントに適用されます。マスターサーバーの[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)]ホストプロパティで、これらのマッピングを設定します。
メディアサーバーまたはマスターサーバーでないプロキシサーバーを使用している場合は、このリストにもプロキシサーバーを追加する必要があります。
[p.38 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定」](#)を参照してください。
- 環境内のホストの自動検出マッピング。
NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの[ホスト管理 (Host Management)]プロパティで、この設定を実行します。
[p.41 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」](#)を参照してください。
- リストアを実行するクライアントには、バックアップ元のクライアントと同じバージョンの Windows がインストールされている必要があります。
- Exchange 個別リストア用のプロキシサーバーを使っている場合には、メールボックスサーバーとプロキシホストは次の必要条件を満たす必要があります。
 - NetBackup の同じバージョンがインストールされていること
 - 同一の NetBackup マスターサーバーを使っていること
 - どちらも、Exchange の該当バージョンをサポートする Windows バージョンを使っていること
たとえば、個別プロキシホストは Windows 2008 SP2 または R2、Windows 2012 または R2 のいずれかにインストールする必要があります。詳しくは、[アプリケーション/データベースエージェント互換性リスト](#)を参照してください。

Replication Director の設定

VMware スナップショットとスナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使う場合には、次のことに注意してください。

- Replication Director では、イメージのスナップショットのコピーから参照、リストアができます。NetBackup が GRT 操作でディスクストレージユニットではなくスナップショットを使う場合には、NFS や新しいドライブ文字を使いません。

- NetApp ディスクアレイで作成される CIFS の共有にアクセスするログオンアカウントと NetBackup Client Service を設定します。
p.173 の「[NetApp ディスクアレイ上の共有 CIFS へのアクセスを使用した NetBackup の構成](#)」を参照してください。

Exchange の個別操作および NetBackup メディアサーバー

個別リカバリテクノロジー (GRT) で操作を行う場合、メディアサーバーには、ある特定の条件が必要とされます。

メディアサーバーは次の設定を必要とします：

- ネットワークファイルシステム (NFS)
プライマリコピーを使用するため、イメージのスナップショットのコピー操作は NFS を必要としないことに注意してください。
- クライアントには、バックアップの作成元となるクライアントと同じバージョンの Windows が必要です。
- Exchange 個別リストア用のプロキシサーバーを使っている場合には、メールボックスサーバーとプロキシホストは次の必要条件を満たす必要があります。
 - マスターサーバーまたはメディアサーバーをプロキシサーバーとして使用する場合、分散アプリケーションリストアマッピングにそのプロキシサーバーを追加する必要があります。(この設定はマスターサーバーホストのプロパティにあります。)このリストにはバックアップイメージをマウントするか、またはリストア操作を開始する NetBackup クライアントも含んでいます。
 - NetBackup の同じバージョンがインストールされていること
 - 同一の NetBackup マスターサーバーを使っていること

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使う Exchange バックアップの構成 (非 VMware バックアップ)

メモ: これらの手順は非仮想環境のバックアップに適用されます。VMware バックアップで GRT を使うには、次の項を参照してください。

p.163 の「[Exchange を保護する VMware バックアップを使用した個別リカバリテクノロジー \(GRT\) の構成](#)」を参照してください。

表 6-1 非仮想環境のバックアップで個別リカバリテクノロジー (GRT) を使う Exchange バックアップの構成

手順	処理	説明
手順 1	サポート対象の Exchange Server 構成があり、GRT をサポートするメディアサーバープラットフォームがあることを確認します。	アプリケーションとデータベースエージェントの互換性リストを参照してください。 ソフトウェア互換性リスト (SCL) を参照してください。
手順 2	NetBackup サーバーと Exchange サーバーのソフトウェアの必要条件が満たされていることを確認します。	p.16 の「NetBackup for Exchange 用 NetBackup サーバーの要件」を参照してください。 p.18 の「NetBackup for Exchange の Exchange サーバーソフトウェア要件」を参照してください。
手順 3	どのクライアントが設定を必要とするかを判断し、NetBackup クライアントの必要条件が満たされていることを確認してください。	p.47 の「Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ」を参照してください。 p.17 の「NetBackup for Exchange 用 NetBackup クライアントの要件」を参照してください。 クラスター環境またはレプリケートされた環境の場合は、クラスター内のデータベースノードごとにこれらの手順を実行します。Exchange データベース可用性グループ (DAG) の場合は、DAG の各データベースノードで手順を実行します。
手順 4	すべての個別リストア用クライアント上で、バックアップイメージのマウント先となるドライブ文字が各ノードに割り当てられていないことを確認します。	
手順 5	次の環境では NFS を有効化または構成します。 ■ すべての個別リストア用クライアント ■ NetBackup メディアサーバー	p.54 の「Windows 2012、2012 R2、2016 でのネットワークファイルシステム (NFS) 用サービスの構成について」を参照してください。 p.62 の「2008 および Windows 2008 R2 での NFS 用サービスの構成について」を参照してください。 p.71 の「個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用するバックアップおよびリストアのための UNIX メディアサーバーおよび Windows クライアントの構成」を参照してください。
手順 6	すべての Exchange メールボックスサーバーで、NetBackup 用の Exchange 操作アカウント (独自のメールボックス) を作成します。	p.30 の「NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 7	すべての Exchange メールボックスサーバーで、Exchange クレデンシヤルを構成します。	NetBackup Exchange 操作のアカウントのクレデンシヤルを使います。 p.28 の「クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシヤルについて」を参照してください。 Exchange 2013 および 2016 の場合は、「Exchange Server」を「表示限定の組織管理」ロールグループに追加することもできます。Exchange Administration Center (EAC) または Active Directory でこの設定を実行します。詳しくは、次の Microsoft 社の記事を参照してください。 http://technet.microsoft.com/en-us/library/jj657492
手順 8	MS-Exchange-Server ポリシーを次のように作成します。 ■ サポートされるディスクストレージユニットを選択します。 ■ [属性 (Attributes)] タブで、[個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)] を選択します。	NetBackup ハードウェア互換性リストを参照してください。 GRT を使ったポリシーの作成方法について詳しくは、次を参照してください。 p.95 の「Exchange Server のスナップショットバックアップの構成」を参照してください。
手順 9	NetBackup サーバーで、分散アプリケーションのリストアのマッピングを設定します。	DAG やクラスタのバックアップの場合、またはプロキシホストやオフホストクライアントを使用する場合は、環境内のアプリケーションホストとコンポーネントホストをマッピングする必要があります。たとえば、各 DAG ノードは、DAG 名を使ってバックアップイメージにアクセスする必要があります。マスターサーバーの [分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)] ホストプロパティで、これらのマッピングを設定します。 p.38 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定」を参照してください。
手順 10	NetBackup サーバーで、環境内のホストの自動検出マッピングを確認します。	場合によっては、NetBackup ホストに追加のホスト名があるか、他のホストと特定の名前を共有しています。たとえば、各 DAG ノードは DAG 名にマッピングする必要があります。NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの [ホスト管理 (Host Management)] プロパティで、この設定を実行します。 p.41 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

Exchange 個別リカバリ技術用 Network File System (NFS) のインストールおよび構成

NetBackup Granular Recovery では、Network File System、つまり NFS を利用して、データベースのバックアップイメージから個々のオブジェクトを読み込みます。具体的には、NetBackup クライアントは、NFS を使用して NetBackup メディアサーバーのバックアップイメージからデータを抽出します。NetBackup クライアントは、NetBackup メディアサーバーに接続されるマッピングされたドライブのマウントおよびそのドライブへのアクセスに「Client for NFS」を使用します。クライアントからの I/O 要求は、NBFS を介して NetBackup メディアサーバーで処理されます。

NBFS は、メディアサーバーで実行する NetBackup File System (NBFS) サービスです。NBFS は、セキュリティ保護された接続を介して NetBackup クライアントに NetBackup バックアップイメージがファイルシステムフォルダとして表示されるようにします。

Network File System、つまり NFS は、クライアントおよびサーバーがネットワーク上でファイルにアクセスするためのオープンスタンダードとして広く認識されています。NFS により、クライアントは共有の TCP/IP ネットワークを介して異なるサーバー上のファイルにアクセスできます。通常、NFS はホストオペレーティングシステムに含まれています。NetBackup では、個別リカバリ技術 (GRT) および NFS を使用して、データベースのバックアップイメージに存在する次のような個々のオブジェクトをリカバリします。

- Active Directory データベースバックアップのユーザーアカウント
- Exchange データベースバックアップの電子メールメッセージまたは電子メールフォルダ
- SharePoint データベースバックアップの文書

GRT をサポートする複数の NetBackup エージェント (Exchange、SharePoint、Active Directory など) は、同じメディアサーバーを使用できます。

Windows 2012、2012 R2、2016 でのネットワークファイルシステム (NFS) 用サービスの構成について

データベースバックアップから個々の項目をリストアするには、NetBackup メディアサーバーと Exchange 個別リストア用クライアントに NFS (Network File System) 用サービスを構成する必要があります。

表 6-2 Windows 2012、2012 R2、2016 での NFS の構成

手順	処理	説明
手順 1	メディアサーバーで NFS を構成します。	NFS を構成する前に、メディアサーバーの要件を確認してください。 p.51 の「Exchange の個別操作および NetBackup メディアサーバー」を参照してください。 メディアサーバーで次の操作を実行します。 ■ ONC/RPC Portmapper サービスが存在する場合は停止して無効にします。 ■ NFS を有効にします。 p.56 の「Windows 2012、2012 R2、2016 メディアサーバーでのネットワークファイルシステム (NFS) 用サービスの有効化」を参照してください。 ■ Server for NFS サービスを停止します。 p.67 の「Server for NFS の無効化」を参照してください。 ■ Client for NFS サービスを停止します。 p.69 の「メディアサーバーでの Client for NFS の無効化」を参照してください。 注意: Exchange 個別リストア用クライアントがメディアサーバーに存在する場合、Client for NFS を無効にしないでください。 ■ サーバーの再起動時にポートマップサービスが自動的に起動するように構成します。 コマンドプロンプトから次のコマンドを実行します。 <pre>sc config portmap start= auto</pre> このコマンドは [SC] ChangeServiceConfig SUCCESS という状態を返します。
手順 2	Exchange 個別リストア用クライアントの NFS を設定します。	構成するクライアントを特定します。 p.47 の「Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ」を参照してください。 p.49 の「Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ」を参照してください。 Exchange 個別リストア用クライアントで次を実行します。 ■ クライアントで NFS を有効にします。 p.59 の「Windows 2012、2012 R2、2016 クライアントでのネットワークファイルシステム (NFS) 用サービスの有効化」を参照してください。 ■ Server for NFS サービスを停止します。 p.67 の「Server for NFS の無効化」を参照してください。

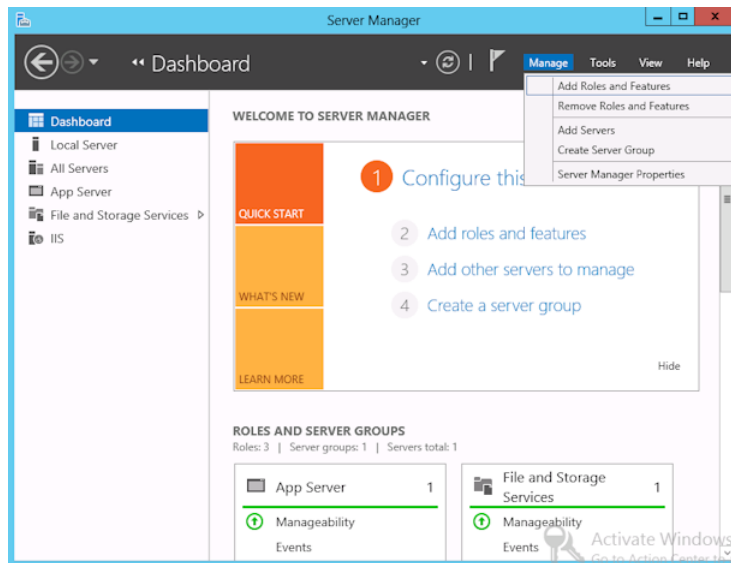
Windows 2012、2012 R2、2016 メディアサーバーでのネットワークファイルシステム (NFS) 用サービスの有効化

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使ったバックアップから個々の項目をリストアするには、NFS 用サービスを有効にする必要があります。メディアサーバーおよびリストアホストでこの構成を完了すると、不要な NFS サービスを無効にすることができます。詳しくは NetBackup メディアサーバーの必要条件を参照してください。

p.47 の「Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ」を参照してください。

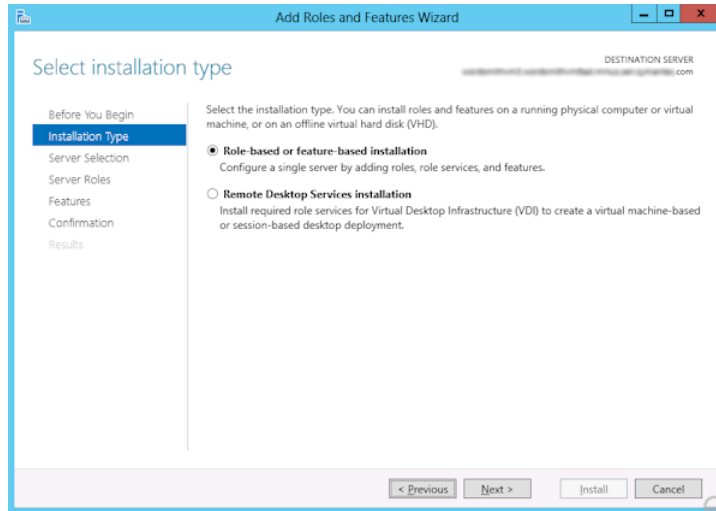
Windows 2012、2012 R2、2016 メディアサーバーでネットワークファイルシステム (NFS) 用サービスを有効にするには

- 1 サーバーマネージャを開きます。
- 2 [管理 (Manage)]メニューから、[役割と機能の追加 (Add Roles and Features)]をクリックします。

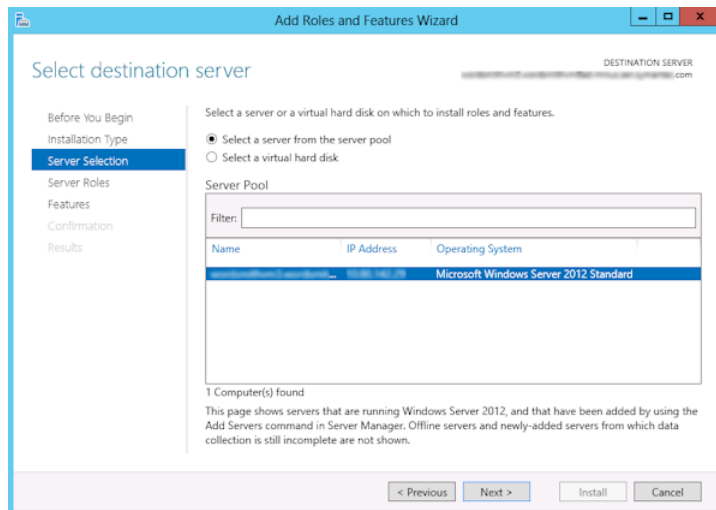


- 3 [役割と機能の追加ウィザード (Add Roles and Features Wizard)]の[開始する前に (Before You Begin)]ページの[次へ (Next)]をクリックします。

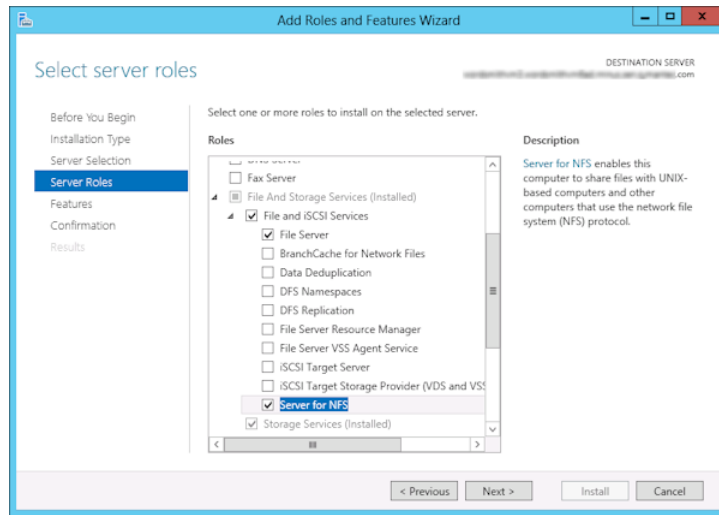
- 4 [インストールの種類を選択 (Select installation type)] ページで、[役割ベースまたは機能ベースのインストール (Role-based or feature-based installation)] を選択します。



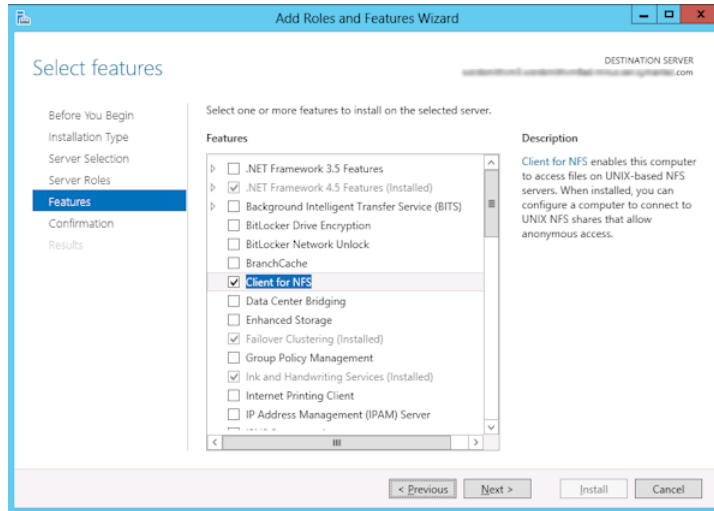
- 5 [次へ (Next)] をクリックします。
- 6 [サーバーの選択 (Sever Selection)] ページで、[サーバープールからサーバーを選択 (Select a server from the server pool)] をクリックし、サーバーを選択します。
[次へ (Next)] をクリックします。



- 7 [サーバーの役割 (Server Roles)] ページで、[ファイルとストレージサービス (File and Storage Services)] および [ファイルと iSCSI サービス (File and iSCSI Services)] を展開します。
- 8 [ファイルサーバー (File Server)] および [NFS のサーバー (Server for NFS)] をクリックします。メッセージが表示された場合、[機能の追加 (Add Features)] をクリックします。[次へ (Next)] をクリックします。



- 9 メディアサーバーが Exchange クライアントでもある場合、[機能 (Features)] のページで、[NFS クライアント (Client for NFS)] をクリックします。[次へ (Next)] をクリックします。



- 10 [確認 (Confirmation)] ページで、[インストール (Install)] をクリックします。

- 11 次のように、不要なサービスを無効にします。

- メディアサーバーおよび Exchange 個別リストア用クライアントとして機能する 1 つのホストを使用している場合は、Server for NFS サービスを無効にすることができます。
p.67 の「[Server for NFS の無効化](#)」を参照してください。
- NetBackup メディアサーバーとしてのみ機能するホストについては、Server for NFS および Client for NFS サービスを無効にすることができます。
p.67 の「[Server for NFS の無効化](#)」を参照してください。
p.69 の「[メディアサーバーでの Client for NFS の無効化](#)」を参照してください。

Windows 2012、2012 R2、2016 クライアントでのネットワークファイルシステム (NFS) 用サービスの有効化

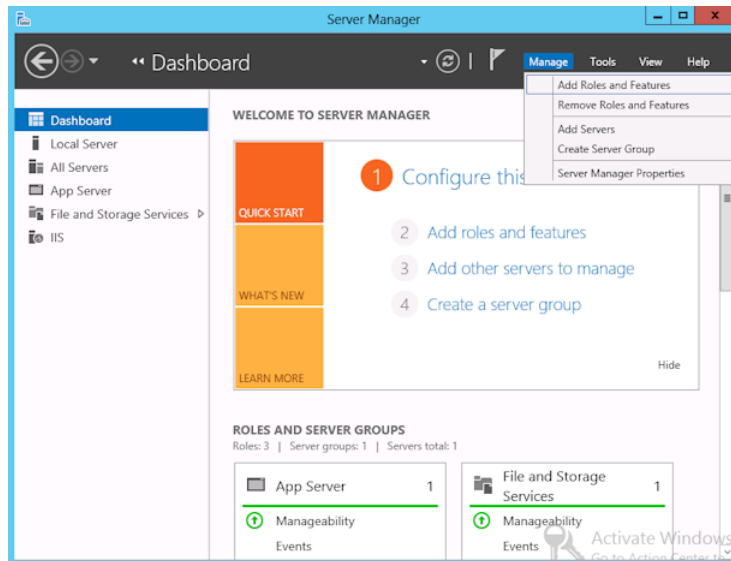
個別リカバリテクノロジー (GRT) を使ったバックアップから個々の項目をリストアするには、NFS 用サービスを有効にする必要があります。この構成を Exchange 個別クライアントで完了すると、不要な NFS サービスを無効にすることができます。この構成を必要とするクライアントについて、詳細情報を参照できます。

p.47 の「[Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ](#)」を参照してください。

p.49 の「Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ」を参照してください。

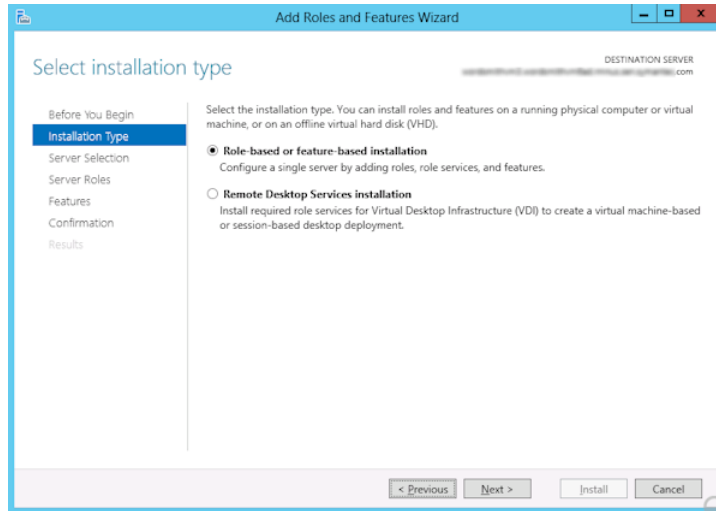
Windows Server 2012、2012 R2、2016 クライアントでネットワークファイルシステム (NFS) 用サービスを有効にするには

- 1 サーバーマネージャを開きます。
- 2 [管理 (Manage)]メニューから、[役割と機能の追加 (Add Roles and Features)]をクリックします。

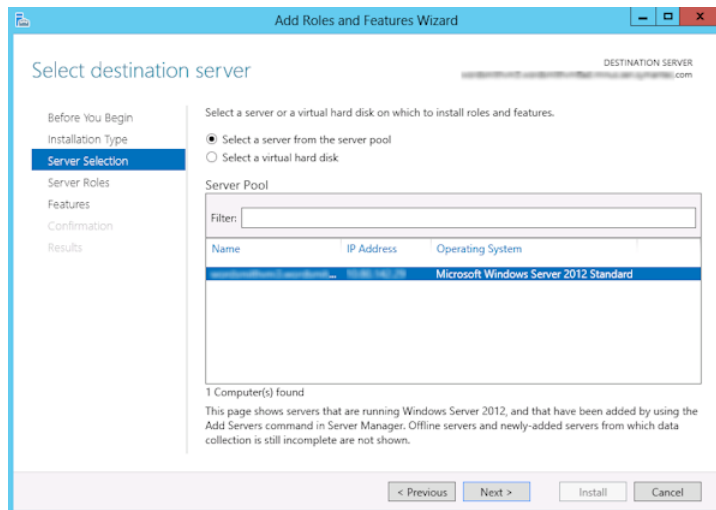


- 3 [役割と機能の追加ウィザード (Add Roles and Features Wizard)]の[開始する前に (Before You Begin)]ページの[次へ (Next)]をクリックします。

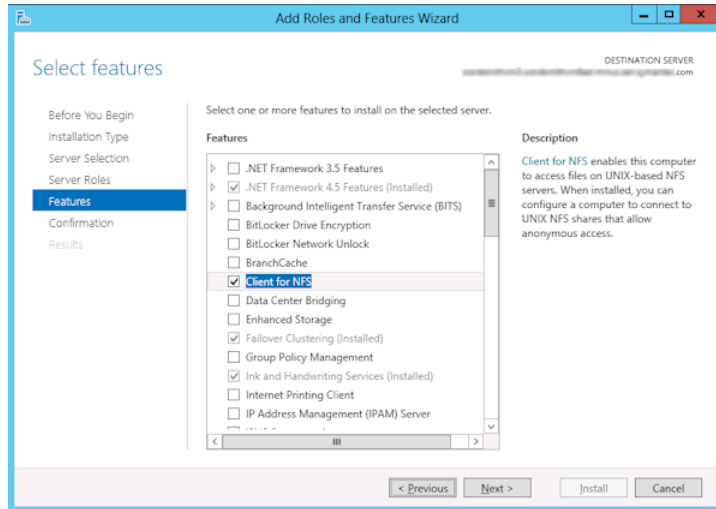
- 4 [インストールの種類を選択 (Select installation type)] ページで、[役割ベースまたは機能ベースのインストール (Role-based or feature-based installation)] を選択します。



- 5 [次へ (Next)] をクリックします。
- 6 [サーバーの選択 (Sever Selection)] ページで、[サーバープールからサーバーを選択 (Select a server from the server pool)] をクリックし、サーバーを選択します。[次へ (Next)] をクリックします。



- 7 [サーバーの役割 (Server Roles)] ページで、[次へ (Next)] をクリックします。
- 8 [機能 (Features)] ページで、[NFS のクライアント (Client for NFS)] をクリックします。[次へ (Next)] をクリックします。



- 9 [確認 (Confirmation)] ページで、[インストール (Install)] をクリックします。

2008 および Windows 2008 R2 での NFS 用サービスの構成について

データベースバックアップから個々の項目をリストアするには、NetBackup メディアサーバーと Exchange 個別リストア用クライアントに NFS (Network File System) 用サービスを構成する必要があります。

表 6-3 Windows 2008 または Windows 2008 R2 環境での NFS の構成

手順	処理	説明
手順 1	メディアサーバーで NFS を構成します。	NFS を構成する前に、メディアサーバーの要件を確認してください。 p.51 の「Exchange の個別操作および NetBackup メディアサーバー」を参照してください。 メディアサーバーで次の操作を実行します。 ■ ONC/RPC Portmapper サービスが存在する場合は停止して無効にします。 ■ NFS を有効にします。 p.64 の「Server 2008 または Windows Server 2008 R2 での NFS 用サービスの有効化」を参照してください。 ■ Server for NFS サービスを停止します。 p.67 の「Server for NFS の無効化」を参照してください。 ■ Client for NFS サービスを停止します。 p.69 の「メディアサーバーでの Client for NFS の無効化」を参照してください。 注意: Exchange 個別リストア用クライアントがメディアサーバーに存在する場合、Client for NFS を無効にしないでください。 ■ サーバーの再起動時にポートマップサービスが自動的に起動するように構成します。 コマンドプロンプトから次のコマンドを実行します。 <pre>sc config portmap start= auto</pre> このコマンドは [SC] ChangeServiceConfig SUCCESS という状態を返します。
手順 2	Exchange 個別リストア用クライアントの NFS を設定します。	構成するクライアントを特定します。 p.47 の「Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ」を参照してください。 p.49 の「Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ」を参照してください。 Exchange 個別リストア用クライアントで次を実行します。 ■ NFS を有効にします。 p.64 の「Server 2008 または Windows Server 2008 R2 での NFS 用サービスの有効化」を参照してください。 ■ Server for NFS サービスを停止します。 p.67 の「Server for NFS の無効化」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 3	Exchange 個別リストア用クライアントで、NFS のクライアントの Hotfix をインストールします。	Exchange 個別リストア用クライアントに NFS クライアントのホットフィックスをインストールします。この Hotfix は次の場所から入手できます。 http://support.microsoft.com/kb/955012 メモ: Windows Vista および Windows Server 2008 の重要な Hotfix は同じパッケージに含まれています。ただし、Hotfix 要求ページには Windows Vista のみリストされています。1 つまたは両方のオペレーティングシステムに適用される Hotfix パッケージを要求する場合は、そのページで Windows Vista の下にリストされている Hotfix を選択します。各 Hotfix の実際のオペレーティングシステムを判断するには、記事の適用先を参照してください。

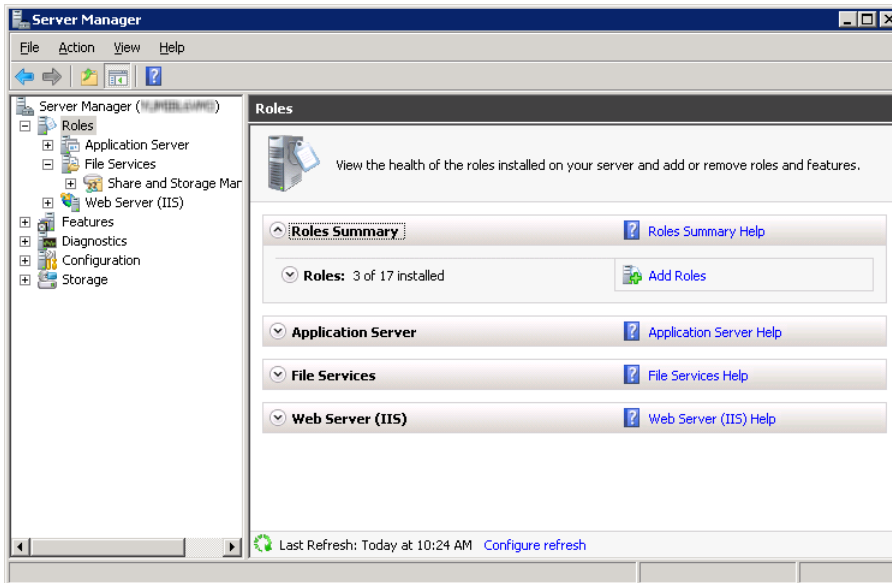
Server 2008 または Windows Server 2008 R2 での NFS 用サービスの有効化

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使ったバックアップから個々の項目をリストアするには、NFS 用サービスを有効にする必要があります。メディアサーバーおよび Exchange 個別リストア用クライアントでこの構成を完了すると、不要な NFS サービスを無効にすることができます。この構成を必要とするクライアントについて、詳細情報を参照できます。

- p.47 の「[Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ](#)」を参照してください。
- p.49 の「[Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ](#)」を参照してください。

Server 2008 または Windows Server 2008 R2 で NFS 用サービスを有効にするには

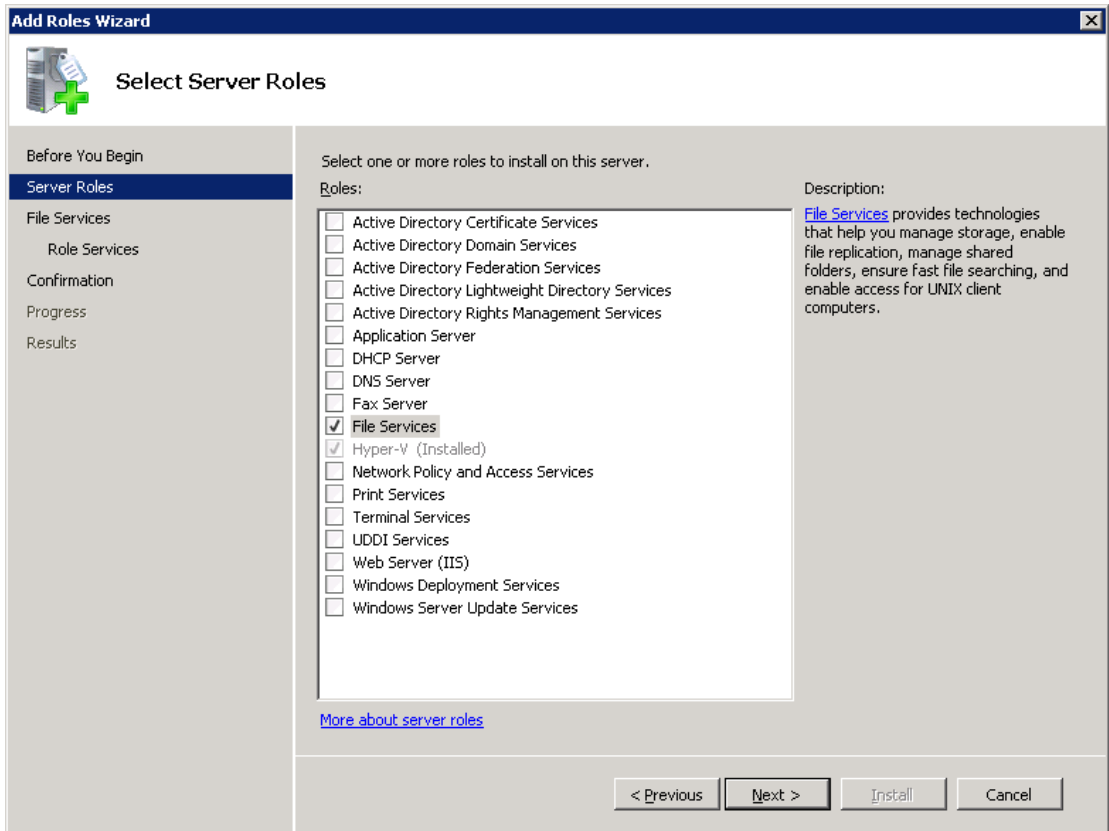
- 1 サーバーマネージャを開きます。
- 2 左ペインで[役割]をクリックして、右ペインで[役割の追加]をクリックします。



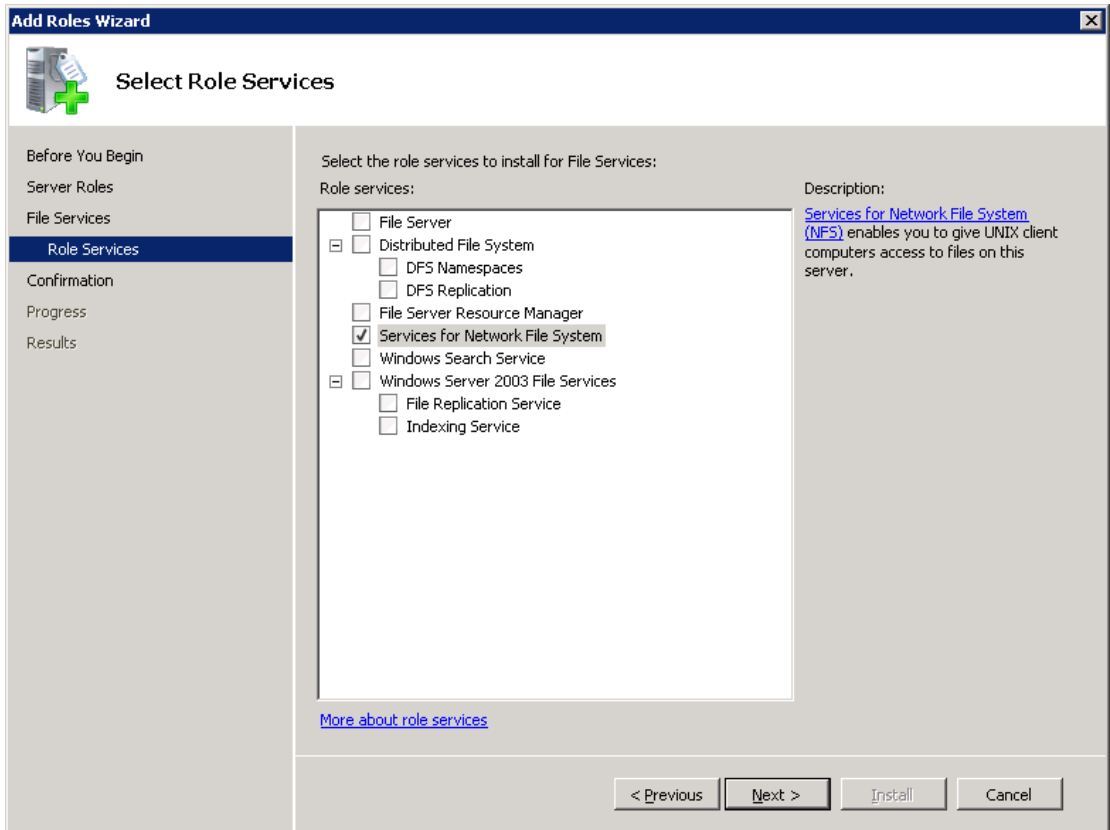
- 3 [役割の追加ウィザード]で、[開始する前に]ページの[次へ]をクリックします。

- 4 [サーバーの役割の選択] ページで、[役割] の下の [ファイルサービス] チェックボックスにチェックマークを付けます。[次へ (Next)] をクリックします。

メモ: ファイルサービスの役割の役割サービスがすでにインストールされていれば、役割のホームページで他の役割サービスを追加できます。[ファイルサービス] ペインで [役割サービスの追加] をクリックします。



- 5 [ファイルサービス] ページで、[次へ] をクリックします。
- 6 [役割サービスの選択] ページで、次の操作を実行します。
 - [ファイルサーバー] のチェックマークをはずします。
 - [NFS (Network File System) 用サービス] にチェックマークを付けます。
 - [次へ] をクリックして、ウィザードを終了します。



7 構成の各ホストに対して、次のいずれかを選択します。

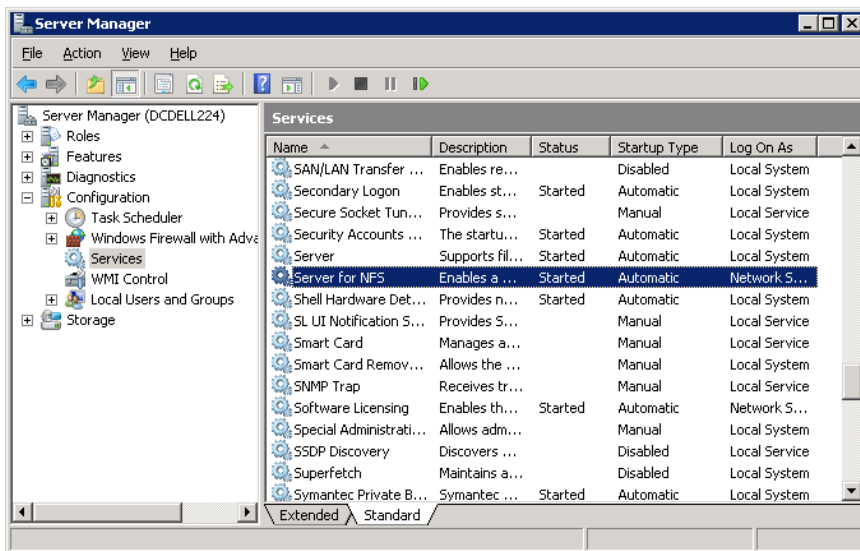
- メディアサーバーおよび Exchange 個別リストア用クライアントとして機能する 1 つのホストを使用している場合は、Server for NFS を無効にすることができます。
- NetBackup メディアサーバーとしてのみ機能するホストについては、Server for NFS および Client for NFS を無効にすることができます。
- Exchange 個別リストア用クライアントとしてのみ機能するホストについては、Server for NFS を無効にすることができます。

Server for NFS の無効化

メディアサーバーおよび Exchange 個別リストア用クライアントの NFS 用サービスを有効にすると、Server for NFS を無効にすることができます。

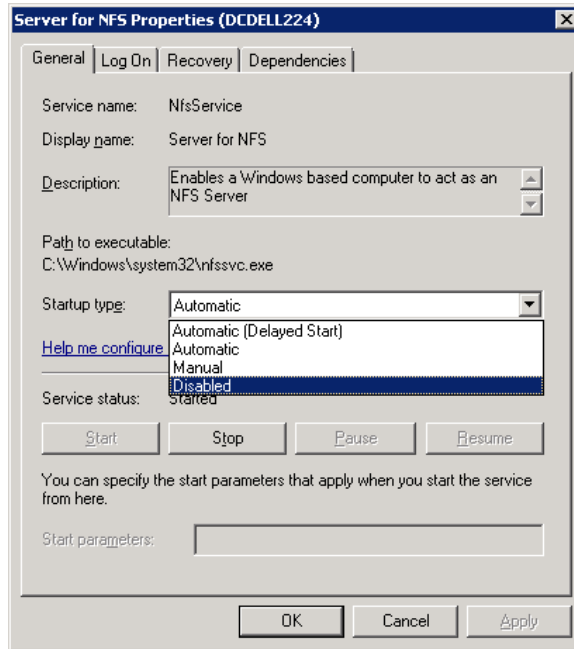
Server for NFS を無効にする方法

- 1 サーバーマネージャを開きます。
- 2 左ペインで、[構成]を展開します。
- 3 [サービス]をクリックします。



- 4 右ペインで、[Server for NFS]を右クリックして、[停止]をクリックします。
- 5 右ペインで、[Server for NFS]を右クリックして、[プロパティ]をクリックします。

- 6 [Server for NFS のプロパティ] ダイアログボックスの[スタートアップの種類]リストで[無効]をクリックします。



- 7 [OK]をクリックします。
- 8 メディアサーバーおよびそれぞれの Exchange 個別リストア用クライアントごとにこの手順を繰り返します。

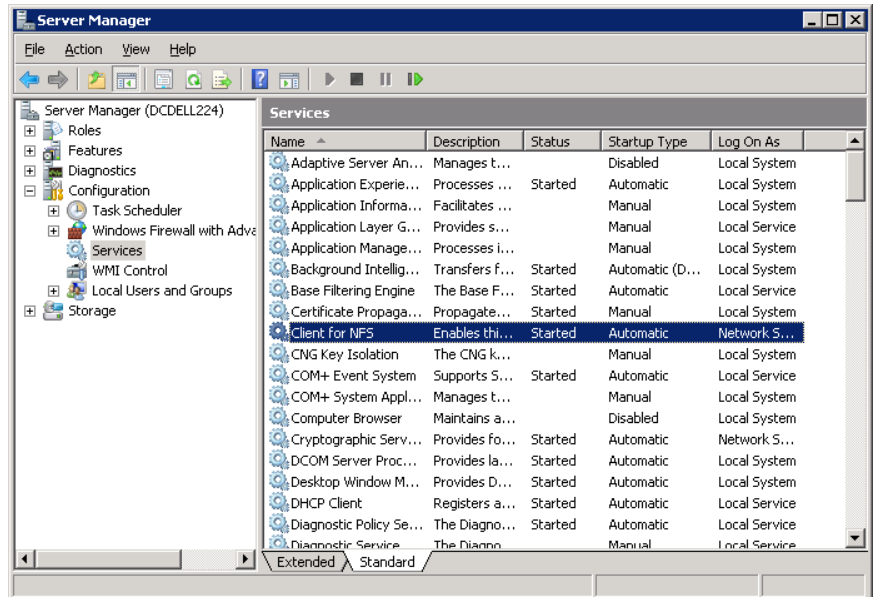
メディアサーバーでの Client for NFS の無効化

NetBackup メディアサーバーとしてのみ機能するホストで NFS 用サービスを有効にした後、Client for NFS を無効にできます。

NetBackup メディアサーバーで Client for NFS を無効にする方法

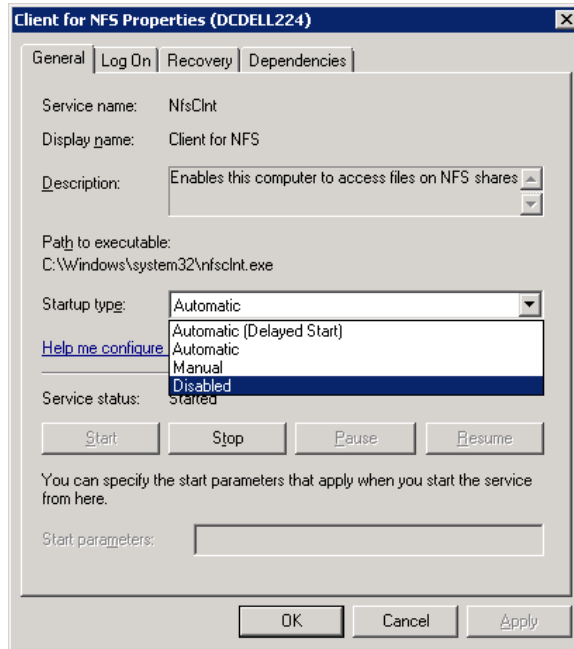
- 1 サーバーマネージャを開きます。
- 2 左ペインで、[構成]を展開します。

- 3 [サービス]をクリックします。



- 4 右ペインで、[Client for NFS]を右クリックして、[停止]をクリックします。
- 5 右ペインで、[Client for NFS]を右クリックして、[プロパティ]をクリックします。

- 6 [Client for NFS のプロパティ] ダイアログボックスの[スタートアップの種類]リストで[無効]をクリックします。



- 7 [OK]をクリックします。

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用するバックアップおよびリストアのための UNIX メディアサーバーおよび Windows クライアントの構成

UNIX メディアサーバーと Windows クライアントを使う場合に個別リカバリテクノロジー (GRT) を使うバックアップとリストアを実行するには、次の構成を実行します。

- メディアサーバーが個別リカバリをサポートするプラットフォームにインストールされていることを確認します。
[ソフトウェアの互換性リスト](#)を参照してください。
- UNIX メディアサーバーには、他の構成は必要ありません。
- Exchange 個別リストア用クライアントで NFS を有効にするか、またはインストールします。
p.56 の「[Windows 2012、2012 R2、2016 メディアサーバーでのネットワークファイルシステム \(NFS\) 用サービスの有効化](#)」を参照してください。
p.59 の「[Windows 2012、2012 R2、2016 クライアントでのネットワークファイルシステム \(NFS\) 用サービスの有効化](#)」を参照してください。

p.64 の「[Server 2008 または Windows Server 2008 R2 での NFS 用サービスの有効化](#)」を参照してください。

- NBFSD 用に個別のネットワークポートを構成することができます。
p.72 の「[NBFSD 用の個別のネットワークポートの構成](#)」を参照してください。

NBFSD 用の個別のネットワークポートの構成

NBFSD がポート **7394** で実行します。社内で別のサービスが標準 NBFSD ポートを使用している場合は、別のポートにサービスを構成できます。次の手順では、デフォルト以外のネットワークポートを使用するように NetBackup サーバーを構成する方法について説明します。

NBFSD 用の個別のネットワークポートを構成する方法 (Windows サーバー)

- 1 NetBackup サーバーがインストールされているコンピュータに管理者 (Administrator) としてログオンします。
- 2 レジストリエディタを開きます。
- 3 次のキーを開きます。:

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\VERITAS\NetBackup\CurrentVersion\Config
```

- 4 FSE_PORT という名前で DWORD 値を新規作成します。
- 5 新しい値を右クリックして、[修正]をクリックします。
- 6 [値のデータ]ボックスに、1 から 65535 のポート番号を入力します。
- 7 [OK]をクリックします。

NBFSD 用の個別のネットワークポートを構成する方法 (UNIX サーバー)

- 1 NetBackup サーバーがインストールされているコンピュータに root ユーザーとしてログオンします。
- 2 bp.conf ファイルを開きます。
- 3 次のエントリを追加します。XXXX には、1 から 65535 のポート番号を整数で指定します。

```
FSE_PORT = XXXX
```

Exchange 個別リカバリテクノロジー (GRT) でサポートされるディスクストレージユニット

個別のバックアップはサポート対象のディスクデバイス作成する必要があります。バックアップ処理の間に、メールボックス名が最上位のパブリックフォルダがカタログ登録されま

す。バックアップを複製すると(-bc_only)、NetBackup はバックアップイメージの内容全体をカタログ登録し、どんなメディアでも複製のターゲットにすることができます。リストアを実行するとき、プライマリバックアップイメージはサポート対象のディスクメディアにある必要があります。バックアップをディスクにコピーするため、複製操作をもう一度実行する必要があります。

GRT でサポートされるディスクストレージユニットについて詳しくは、

[NetBackup ハードウェア互換性リスト](#)を参照してください。

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用する Exchange バックアップの複製に対するカタログ化の無効化

メモ: このオプションは、Exchange を保護する VMware バックアップの複製には適用されません。この種類のバックアップを複製するのに管理コンソールは使用できません。コマンドラインオプション bpduplicate を使う必要があります。

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使うバックアップの複製には余分な時間がかかります。NetBackup では、個別の Exchange 情報をカタログ化するため、さらにこのような余分の時間が必要になります。複製がより迅速に実行されるように、個別の情報をカタログ化しないことを選択できます。ただし、このときにディスクコピーの期限が切れている場合には複製されたイメージで個々の項目を参照できません。

複製処理中に、NetBackup はジョブの進捗状況を表示するログエントリを定期的に書き込みます。

個別リカバリテクノロジーを使用する Exchange バックアップのカタログ化を無効にする方法

- 1 マスターサーバーで NetBackup 管理コンソールを開きます。
- 2 左ペインで、[ホストプロパティ (Host Properties)]を展開します。
- 3 [マスターサーバー (Master Servers)]をクリックします。
- 4 右ペインで、マスターサーバーを右クリックし、[プロパティ (Properties)]をクリックします。
- 5 [一般的なサーバー (General Server)]をクリックします。
- 6 [個別リカバリテクノロジーを使用する Exchange イメージを複製するときにメッセージレベルのカタログを有効にする (Enable message-level cataloging when duplicating Exchange images that use Granular Recovery Technology)]のチェックマークを外します。
- 7 [OK]をクリックします。

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使う Exchange バックアップまたは VMware バックアップのカタログ化

バックアップイメージを複製する代わりに、コピーを作成せずにバックアップのメールボックスとパブリックフォルダのコンテンツのインデックス処理やカタログ化を行います。これにより、バックアップの参照とリストアの実行が迅速化します。次のコマンドを使って、イメージの個別情報を含む完全な Exchange カタログを生成します。

```
bpduplicate -bc_only
```

適用される可能性があるオプションについては、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。たとえば、オプションを指定しなければ、このコマンドはデフォルトの日付範囲内のすべてのイメージを処理します。このコマンドは、Exchange イメージまたは VMware イメージの Exchange ビューのプライマリコピーでのみ動作します。

Exchange を保護する VMware バックアップに対しては、VMware のバックアップ時にメールボックスのユーザー名がカタログ化されないことに注意してください。

bpduplicate コマンドを使って個別プロキシホストを指定する場合は、マスターサーバーホストのプロパティで Exchange のホストを構成します。

p.38 の「[分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定](#)」を参照してください。

NetBackup Client Service のログオンアカウントの構成

メモ: NetBackup の旧バージョンでは、GRT (Granular Recovery Technology) 操作を実行するために、別のログオンアカウントを使用して個別の各クライアントに対して NetBackup Client Service を構成していました。今回からそのような構成が必要ではなくなり、Exchange クレデンシアルをクライアントホストプロパティに構成します。

p.28 の「[クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシアルについて](#)」を参照してください。

Veritas は新しい構成方法の使用を推奨しますが、Exchange 2010 で GRT を使っている既存の NetBackup ユーザーの場合には、従来の NetBackup Client Service のログオンアカウントも引き続き使用できます。

メモ: (Exchange 2013 以降) 個別リカバリの技術 (GRT) による操作を実行するには、クライアントホストプロパティで Exchange クレデンシアルを設定する必要があります。

デフォルトの NetBackup Client Service では、「ローカルシステム」のアカウントを使用してログオンします。GRT 操作には、NetBackup Exchange 操作用アカウントと呼ばれる別のアカウントが必要です。このアカウントは、NetBackup に Exchange のバックアップおよびリストアを実行する権限を与えます。このアカウントの作成方法に関する情報は、次のトピックを参照してください。

p.32 の「[EWS アクセス用の特権付き NetBackup ユーザーアカウントの作成](#)」を参照してください。

p.33 の「[Exchange 用の最小の NetBackup アカウントの作成](#)」を参照してください。

NetBackup Client Service のログオンアカウントを構成するときは次の点に注意してください。

- NetBackup Exchange 操作のためのアカウントのクレデンシャルを使用して NetBackup Client Service を構成します。
p.30 の「[NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について](#)」を参照してください。
- 個別の操作を実行する各クライアントを構成します。構成するクライアントを決定するには、次のトピックを参照してください。
p.47 の「[Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ](#)」を参照してください。
p.49 の「[Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ](#)」を参照してください。
- Replication Director を使用して VMware スナップショットおよびスナップショットレプリケーションを管理する場合は、異なる構成が必要になります。NetBackup Exchange 操作のためのアカウントのクレデンシャルを使用して、NetBackup Client Service を構成することはできません。
p.168 の「[レプリケーションディレクタを使用して Exchange サーバーを保護する VMware バックアップを構成し、スナップショットレプリケーションを管理する](#)」を参照してください。
- SAN クライアントに対し NetBackup for Exchange を使用する場合、NetBackup Client Service と SAN Client Fibre Transport Service に同じアカウントを使用します。また、アカウントはローカル管理者である必要があります。別の方法としては、クライアントのホストプロパティに Exchange クレデンシャルを提供することができます。その場合、SAN Client Fibre Transport Service に同じクレデンシャルを使う必要はありません。

NetBackup Client Service のログオンアカウントを構成する方法

- 1 Windows のサービスアプリケーションを開始します。
- 2 [NetBackup Client Service] エントリをダブルクリックします。
- 3 [ログオン (Log On)] タブをクリックします。

- 4 NetBackup Exchange 操作のアカウントの名前を指定します。[ログオン (Log on as)]アカウントを変更するには、管理者グループの権限が必要です。

アカウントは、ユーザーアカウントが後ろに続くドメイン名 *domain_name¥account* を含む必要があります。たとえば、*recovery¥netbackup* です。

- 5 パスワードを入力します。
- 6 [OK]をクリックします。
- 7 NetBackup Client Service を停止して、再起動します。
- 8 サービスアプリケーションを終了します。

Exchange のバックアップポリシーの構成 (非 VMware)

この章では以下の項目について説明しています。

- [Exchange 自動、ユーザー主導型、および手動バックアップについて](#)
- [Exchange Server のバックアップポリシーの構成について](#)
- [Exchange Server のスナップショットバックアップの構成](#)
- [Exchange Server のインスタントリカバリバックアップの構成](#)
- [手動バックアップの実行](#)

Exchange 自動、ユーザー主導型、および手動バックアップについて

NetBackup には、次のバックアップ方法があります。

- 自動
- 手動
- ユーザー主導

これらのバックアップ方式やその他の管理者主導の作業について詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』を参照してください。

自動バックアップを使用すると、NetBackup 管理者は、自動的な無人の完全バックアップおよび増分バックアップをスケジュールすることができます。(増分バックアップには、差分増分バックアップまたは累積増分バックアップを使用できます。)自動バックアップは、ほとんどのバックアップ要件を満たします。

自動コピーバックアップは実行できません。コピーバックアップを実行するには、ユーザー主導バックアップを実行します。

手動バックアップを使用すると、管理者は、ポリシー、クライアントまたはスケジュールに関連付けられたファイルの即時バックアップを行うことができます。

手動バックアップオプションは、次のような場合に有効です。

- 構成をテストするとき
- ワークステーションで通常のバックアップを行うことができなかったとき
- 新しいソフトウェアをインストールする前 (古い構成を保存しておくため)
- 会社の合併や分社化といった重大事の前に、記録を残すとき

ユーザーは、バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを使用して、Exchange Server、メールボックスおよびパブリックフォルダのバックアップを実行できます。ユーザー主導バックアップでは Exchange のコピーバックアップが作成されます。これはトランザクションログが切り捨てられない完全バックアップです。

Exchange Server のバックアップポリシーの構成について

メモ: Exchange Server を保護する完全 VMware バックアップのバックアップポリシーを構成するには、別の手順を実行します。増分バックアップは MS-Exchange-Server ポリシーで実行する必要があります。

p.155 の「[VMware バックアップによる Exchange Server データの保護について](#)」を参照してください。

データベースのバックアップポリシーでは、1 台以上のクライアントで構成される特定のグループに対するバックアップの条件を定義します。

この条件には、次のものが含まれます。

- 使用するストレージユニットおよびストレージメディア
- ポリシー属性
- バックアップスケジュール
- バックアップするクライアント
- バックアップ対象の項目 (データベースオブジェクト)

データベース環境をバックアップするには、適切にスケジュールされた 1 つ以上の MS-Exchange-Server ポリシーを定義します。すべてのクライアントが含まれる 1 つのポ

リシーまたは複数のポリシーを構成することができます。複数のポリシーの中には、1 つのクライアントだけを含むポリシーもあります。

データベースポリシーの要件は、ファイルシステムのバックアップの場合とほぼ同じです。このデータベースエージェントのポリシー属性に加え、利用可能なその他の属性も考慮する必要があります。

『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』を参照してください。

Exchange Server のポリシーに関する推奨事項

Exchange データベース可用性グループ (DAG) のポリシーを作成する場合には次の推奨事項を参照してください。

- DAG 全体をバックアップ、または DAG の 1 つ以上のデータベースをバックアップするポリシーを作成します。このポリシーでは、全体バックアップ、増分バックアップ、およびユーザー主導バックアップがサポートされます。
- 個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用してバックアップを実行するには、[個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)] オプションを選択します。
このオプションにより、データベースと個々のメールボックスおよびパブリックフォルダの項目をリストアできます。増分バックアップから個々のメールボックスおよびパブリックフォルダの項目をリストアすることはできません。
- MS Exchange Server のポリシーはデフォルトではデータベースのパッシブコピーをバックアップします。この動作は、デフォルトでアクティブコピーの実をバックアップする VMware ポリシーに対する長所を提供します。
- ポリシーの例には、Exchange バックアップの基本的なポリシー設定が含まれます。スナップショットバックアップポリシーを作成する方法については、次を参照してください。
p.95 の「[Exchange Server のスナップショットバックアップの構成](#)」を参照してください。

表 7-1 Exchange DAG のすべてのデータベースをバックアップするポリシーの例

ポリシー項目	構成
ポリシー形式	MS-Exchange-Server
バックアップ対象	Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥
自動バックアップの間隔	毎週 (完全バックアップ) 毎日 (増分バックアップ)

ポリシー項目	構成
個別リカバリを有効化する	任意。データベースのバックアップから個々のメールボックスおよび共有フォルダオブジェクトをリストアする場合、このオプションを有効にします。
その他の構成	[スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)] が有効である必要があります。 [クライアント (Clients)] タブには、複数のクライアントを含めることができます。クライアント名は DAG の名前です。

表 7-2 Exchange DAG の 1 つのデータベースをバックアップするポリシーの例

ポリシー項目	構成
ポリシー形式	MS-Exchange-Server
バックアップ対象	Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥Mailbox Database Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥forest or domain name¥Microsoft Information Store¥Mailbox Database
自動バックアップの間隔	毎週 (完全バックアップ) 毎日 (増分バックアップ)
個別リカバリを有効化する	任意。データベースのバックアップから個々のメールボックスおよび共有フォルダオブジェクトをリストアする場合、このオプションを有効にします。
その他の構成	[スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)] が有効である必要があります。 [クライアント (Clients)] タブには、1 つのクライアントのみを含めることができます。DAG はポリシーのクライアントです。

Exchange スタンドアロンサーバーのポリシーを作成する場合には次の推奨事項を参照してください。

- インフォメーションストアまたは個々のデータベースをバックアップするポリシーを作成します。このポリシーでは、全体バックアップ、増分バックアップ、およびユーザー主導バックアップがサポートされます。
- 個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用してバックアップを実行するには、[個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)] オプションを選択します。

データベースと個々のメールボックスおよびパブリックフォルダの項目をリストアできます。GRT を使用した増分バックアップから個々のメールボックスまたはパブリックフォルダの項目をリストアすることはできません。

- ポリシーの例には、Exchange バックアップの基本的なポリシー設定が含まれます。スナップショットバックアップポリシーを作成する方法については、次を参照してください。
p.95 の「Exchange Server のスナップショットバックアップの構成」を参照してください。

表 7-3 Exchange スタンドアロンサーバーのすべてのデータベースをバックアップするポリシーの例

ポリシー項目	構成
ポリシー形式	MS-Exchange-Server
バックアップ対象	Microsoft Information Store:¥
自動バックアップの間隔	毎週 (完全バックアップ) 毎日 (増分バックアップ)
個別リカバリを有効化する	任意。データベースのバックアップから個々のメールボックスおよび共有フォルダオブジェクトをリストアする場合、このオプションを有効にします。
その他の構成	[スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)] が有効である必要があります。

表 7-4 Exchange スタンドアロンサーバーの 1 つのデータベースをバックアップするポリシーの例

ポリシー項目	構成
ポリシー形式	MS-Exchange-Server
バックアップ対象	Microsoft Information Store:¥Mailbox Database
自動バックアップの間隔	毎週 (完全バックアップ) 毎日 (増分バックアップ)
個別リカバリを有効化する	推奨。データベースのバックアップから個々のメールボックスおよび共有フォルダオブジェクトをリストアする場合、このオプションを有効にします。
その他の構成	[スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)] が有効である必要があります。

ポリシー属性

いくつかの例外を除き、NetBackup では、データベースのバックアップに対して設定されたポリシー属性をファイルシステムのバックアップと同じように管理します。その他のポリシー属性は、ユーザー固有のバックアップ戦略やシステム構成によって異なります。

表 7-5 では、NetBackup for Exchange ポリシーに利用可能なポリシーの属性のいくつかを説明します。ポリシー属性について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

表 7-5 NetBackup for Exchange ポリシーのポリシー属性の説明

属性	説明
ポリシー形式 (Policy type)	ポリシーを使用してバックアップできるクライアントの種類を指定します。Exchange データベースの場合、ポリシーの種類 MS-Exchange-Server を選択します。
ポリシーストレージ (Policy storage)	Exchange Server がクライアントであり、メディアサーバーでもあるデータベース可用性グループ (DAG) 環境では、[ポリシーストレージ (Policy storage)] の扱いが異なるので注意してください。メディアサーバーでもあるローカル Exchange クライアントにバックアップする場合、ストレージユニットグループを指定します。NetBackup では、バックアップ処理中に、ストレージユニットグループからローカルストレージユニットを自動的に選択します。1 つのストレージユニットを指定した場合、すべてのバックアップでこのストレージユニットが使用されます。
複数のデータストリームの許可 (Allow multiple data streams)	各クライアントの自動バックアップが複数のジョブに分割されるように指定します。各ジョブで [バックアップ対象 (Backup Selections)] リストの一部が、それぞれバックアップされます。ジョブは個別のデータストリームに存在するため、同時に実行できます。利用可能なストレージユニットの数、多重化の設定および最大ジョブパラメータによって、ストリームの総数および並列実行が可能なストリームの数が決まります。バックアップ対象リストのすべての指示句を複数のデータベースストリームに対して実行できるわけではありません。 データベースレベルで複数のデータストリームを作成できます。
個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)	個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用した個々の項目のリストアを可能にします。ユーザーは、完全バックアップからのみ個々の項目をリストアできます。(増分バックアップは GRT を使用して実行できますが、バックアップにより個別の情報は保存されず、増分バックアップから個々の項目をリストアすることはできません。) バックアップイメージがディスクストレージユニットに存在する場合にのみ、個々の項目をリストアすることができます。個別バックアップをテープに保持する場合、イメージを複製する必要があります。テープに複製された個別バックアップからリストアする場合、イメージをディスクストレージユニットにインポートする必要があります。 p.72 の「Exchange 個別リカバリテクノロジー (GRT) でサポートされるディスクストレージユニット」を参照してください。 Exchange の GRT を有効にしたバックアップは暗号化や圧縮をサポートしません。
キーワード句 (Keyword phrase)	バックアップの説明文です。バックアップおよびリストアの参照時に有効です。

属性	説明
Snapshot Client と Replication Director (Snapshot Client and Replication Director)	Exchange バックアップの場合、すべてのバックアップポリシーに対して[スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)]オプションを有効にする必要があります。VMware バックアップの場合、このオプションは自動的に有効になります。 p.96 の「Exchange Server でのスナップショットバックアップについて」を参照してください。 p.159 の「Exchange Server を保護する VMware バックアップの構成について」を参照してください。 p.171 の「スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用して Exchange Server をバックアップするための VMware ポリシーの構成」を参照してください。
Microsoft Exchange の属性 (Microsoft Exchange Attributes)	DAG に使用するデータベースバックアップのソースを示します。優先サーバーリストを示すこともできます。 p.103 の「データベース可用性 (DAG) バックアップのバックアップソース」を参照してください。 p.103 の「データベース可用性グループ (DAG) の優先サーバーリストの構成」を参照してください。

NetBackup for Exchange ポリシーへのスケジュールの追加

それぞれのポリシーには、独自のスケジュールセットがあります。このスケジュールによって、自動バックアップの開始を制御することや、ユーザーによる操作の開始時期を指定することができます。

スケジュールを NetBackup for Exchange ポリシーに追加する方法

- 1 [ポリシーの変更 (Change Policy)]ダイアログボックスで、[スケジュール (Schedules)]タブをクリックします。
[ポリシーの変更 (Change Policy)]ダイアログボックスにアクセスするには、NetBackup 管理コンソールのポリシーリスト内のポリシー名をダブルクリックします。
- 2 [新規 (New)]をクリックします。
- 3 一意のスケジュール名を指定します。
- 4 [バックアップ形式 (Type of backup)]を選択します。
p.83 の「[NetBackup for Exchange のバックアップ形式](#)」を参照してください。
- 5 スケジュールに対する他のプロパティを指定します。
p.85 の「[スケジュールプロパティについて](#)」を参照してください。
- 6 [OK]をクリックします。

NetBackup for Exchange のバックアップ形式

このトピックは Exchange Server のバックアップに対してスケジュールできるバックアップ形式を記述します。

表 7-6 NetBackup for Exchange のバックアップ形式

バックアップ形式	説明
完全バックアップ (Full Backup)	このスケジュール形式では、Exchange Server データベースと、それに関連付けられたトランザクションログがバックアップされます。バックアップに成功したことが NetBackup によって通知されると、Exchange はすべてのコミットされたトランザクションログを切り捨てます。レプリケートされた環境では、切り捨てはスケジュールされ、すぐには行われません。 デフォルトでは、トランザクションログはインスタントリカバリバックアップの場合に切り捨てられます。この形式のバックアップでログの切り捨てを有効にするか、ストレージユニットに対してバックアップを実行できます。 p.27 の「インスタントリカバリバックアップでの Exchange トランザクションログの切り捨てについて」を参照してください。 p.27 の「ストレージユニットに対するバックアップの実行による Exchange トランザクションログの切り捨て」を参照してください。
差分増分バックアップ (Differential Incremental Backup)	最後の完全または差分増分バックアップ以後の変更が含まれます。バックアップに成功したことが NetBackup によって通知されると、Exchange はすべてのコミットされたトランザクションログを切り捨てます。トランザクションログの切り捨てによって、次のバックアップのコンテキストが設定されます。 データベースまたはインフォメーションストア全体のバックアップでは、バックアップにトランザクションログのみが含まれます。[個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)] が有効になっている場合、この形式のバックアップでは個々の項目をリストアできません。 完全リストアを実行する場合は、複数の NetBackup イメージが必要です。完全バックアップのイメージと、差分増分バックアップを実行したイメージです。
累積増分バックアップ (Cumulative Incremental Backup)	最後の完全バックアップまたは差分増分バックアップ以後の変更が含まれます。(ただし、ほとんどの構成では完全バックアップと完全バックアップの間に累積増分バックアップと差分増分バックアップは併用されません。) Exchange はバックアップが完了したときにログを切り捨てません。一連の累積増分バックアップが完全バックアップの後に行われると、最後の完全バックアップ以降のトランザクションログは、完全な状態で維持されます。 データベースまたはインフォメーションストア全体のバックアップでは、バックアップにトランザクションログのみが含まれます。[個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)] が有効になっている場合、この形式のバックアップでは個々の項目をリストアできません。 トランザクションログが完全な状態である場合は、Exchange Server のデータリカバリを検討します。最後の完全バックアップと最後の累積増分バックアップからのデータベースのリストアだけが必要です。リカバリ中、Exchange Server によって、ログフォルダ内のすべてのログが再生されます。

バックアップ形式	説明
ユーザーバックアップ (User Backup)	ユーザーバックアップは自動的にスケジュールされないため、ターゲットクライアントコンピュータから開始する必要があります。特定の時点でのデータベースのスナップショット (またはコピーバックアップ) と同様です。このバックアップは進行中の完全バックアップと増分バックアップの内容に影響しません。 ユーザーバックアップ用に個別のポリシーを作成することもできます。これにより、ファイルのリストアを行うときに、そのファイルがユーザー主導バックアップによるものか、またはスケジュールバックアップによるものかを簡単に区別できます。ユーザーバックアップのスケジュール形式ごとに異なるポリシーを作成する際に考慮することは、自動バックアップの場合と同様です。リストアするファイルはユーザーが選択するため、バックアップ対象のリストは不要です。

スケジュールプロパティについて

この項では、データベースバックアップとファイルシステムのバックアップで意味が異なるスケジュールプロパティについて説明します。その他のスケジュールプロパティは、ユーザー固有のバックアップ方針やシステム構成によって異なります。他のスケジュールプロパティについての詳しい情報を参照できます。『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』を参照してください。

表 7-7 スケジュールプロパティの説明

プロパティ	説明
バックアップ形式 (Type of backup)	このスケジュールで制御できるバックアップ形式を指定します。バックアップ対象のリストには、構成するポリシーに適用されるバックアップ形式だけが表示されます。 p.83 の「NetBackup for Exchange のバックアップ形式」を参照してください。
スケジュール形式 (Schedule Type)	次のいずれかの方法で自動バックアップをスケジュールできます。 ■ 間隔 (Frequency) 間隔 (Frequency) は、このスケジュールで次のバックアップ操作が開始するまでの期間を指定します。たとえば、バックアップ間隔を 7 日に設定して、正常なバックアップが水曜日に行われるように設定したとします。次の完全バックアップは、次の水曜日まで行われません。通常、増分バックアップは、完全バックアップより短い間隔で行います。 ■ カレンダー (Calendar) 特定の日付、週の特定の曜日または月の特定の日に基づいてバックアップ操作をスケジュールすることができます。 スケジュール形式とインスタントリカバリバックアップについて、詳細な情報が使用できます。 p.114 の「Exchange インスタントリカバリのスケジュールの追加」を参照してください。 p.115 の「Exchange インスタントリカバリポリシーのスケジュール設定」を参照してください。

プロパティ	説明
保持 (Retention)	ファイルのバックアップコピーを削除するまでの保持期間を指定します。保持レベルは、ポリシー内のスケジュールの優先度も示します。レベルが高くなると、優先度も高くなります。データベースの 2 つ以上の完全バックアップが保持されるように期間を設定します。このようにすると、1 つの完全バックアップが失われた場合に、リストアする完全バックアップがもう 1 つあります。たとえば、データベースが毎週日曜日の朝に一度バックアップされる場合、少なくとも 2 週の保持期間を選択する必要があります。

Exchange ポリシーのクライアントを NetBackup へ追加

クライアントリストには、自動バックアップの対象になるクライアントが表示されます。

NetBackup クライアントは、1 つ以上のポリシー内に存在している必要があり、複数のポリシー内に存在することも可能です。

Exchange ポリシーの **NetBackup** には、追加したいクライアントが次のソフトウェアをインストールしている必要があります。

- Exchange Server
- NetBackup クライアントまたはサーバー

個別リカバリテクノロジーを使うすべてのクライアントには追加の必要条件があります。

p.47 の「[Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ](#)」を参照してください。

クライアントを NetBackup for Exchange ポリシーに追加する方法

- 1 [ポリシーの変更 (Change Policy)] ダイアログボックスで、[クライアント (Clients)] タブをクリックします。

[ポリシーの変更 (Change Policy)] ダイアログボックスにアクセスするには、**NetBackup** 管理コンソールのポリシーリスト内のポリシー名をダブルクリックします。

- 2 [新規 (New)] をクリックします。
- 3 クライアントの名前を入力し、[追加 (Add)] をクリックします。

次の点に注意してください。

- **Exchange** がクラスタ化されているか、またはデータベース可用性グループ (DAG) にある場合、そのクラスタまたは DAG を表す仮想 **Exchange** 名を指定します。
- オフホストバックアップの場合、クライアント名はプライマリクライアントの名前である必要があります。

- 4 さらにクライアントを追加するには、手順 2 を繰り返します。

- 5 他に追加するクライアントがない場合は、[OK]をクリックします。
- 6 [ポリシー (Policy)]ダイアログボックスで、[閉じる (Close)]をクリックします。

クライアントリストの物理ノード名の使用

クラスタまたは DAG のメールボックスサーバーをバックアップする確実な方法は仮想 Exchange 名を使うことです。ただし必要に応じて、仮想名ではなくポリシーのノード名 (物理サーバーの名前) を使うことができます。個別リカバリ技術 (GRT) がサポートされます。

物理ノード名を使用する場合、次の制限および条件があります。

- データベースのバックアップはそれらをホストするサーバーにリダイレクトされ、ホスト名の下でカタログ化されます。(注意: データベースは DAG の仮想名の下ではなくホスト名の下でカタログ化されます。)
- NetBackup サーバーがコンタクトできるノード名を使ってください。
- ポリシーのバックアップ対象項目は Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥**データベース名**を含む必要があります。リストはエン트리より多くを含む場合がありますが、各データベースは明示的に指定されている必要があります。Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥ または Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥* の使用は許可されません。
- リストアは DAG の仮想名または物理ノード名にリダイレクトすることがあります。

Exchange ポリシーへのバックアップ対象の追加

[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストでは、バックアップを行う Exchange オブジェクト、および複数データストリーム用にグループ化した Exchange オブジェクトが定義されます。Exchange オブジェクトは指示句によって定義されます。指示句に個々のオブジェクト名を追加して、データベースを指定できます。ワイルドカードを使用して、そのようなオブジェクトのグループを指定できます。

メモ: バックアップポリシーには、1 つの指示句セットのみからの指示句を含めます。たとえば、Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥(**DAG 指示句**) と Microsoft Information Store:¥(**スタンドアロンデータベース指示句**) を同じポリシーに追加しないでください。

次の指示句はデータベースのバックアップ用です。

表 7-8 NetBackup for Exchange Server 指示句セットと指示句

指示句セット	指示句	注意事項
MS_Exchange_Database	NEW_STREAM Microsoft Information Store:¥	この指示句セットは、Exchange スタンドアロンサーバーに適用されます。 p.92 の「バックアップからの Exchange 項目の除外について」を参照してください。
MS_Exchange_Database_Availability_Groups	NEW_STREAM Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥	

バックアップ対象を追加するには次のトピックを参照してください。

- p.88 の「参照による[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストへのエントリの追加」を参照してください。
- p.89 の「[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストへのエントリの手動での追加」を参照してください。
- p.89 の「複数データストリームを使用する Exchange バックアップの実行」を参照してください。
- p.92 の「バックアップからの Exchange 項目の除外について」を参照してください。

参照による[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストへのエントリの追加

Exchange オブジェクトを参照して、オブジェクトを[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストに追加できます。また、オブジェクトを手動で追加することもできます。

p.89 の「[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストへのエントリの手動での追加」を参照してください。

参照によってエントリを[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストに追加する方法

- 1 [ポリシーの変更 (Change Policy)]ダイアログボックスで、[バックアップ対象 (Backup Selections)]タブをクリックします。
- 2 [新規 (New)]をクリックします。
- 3 [参照 (Browse)]をクリックします。
- 4 バックアップを行う Exchange オブジェクトを検索してクリックし、[OK]をクリックします。
- 5 必要に応じて、エントリを編集します。
 - 新しいエントリにオブジェクト名を追加します。

- ワイルドカードを使用しないメールボックスの指定が円記号で終了していない場合、それを追加します。
- オブジェクトのグループを定義したり、複数データストリームを使用する場合は、ワイルドカード文字を追加します。
p.89 の「[複数データストリームを使用する Exchange バックアップの実行](#)」を参照してください。
p.91 の「[Exchange の\[バックアップ対象 \(Backup Selections\)\]リストでのワイルドカードの使用](#)」を参照してください。

6 [OK]をクリックします。

[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストへのエントリの手動での追加

このトピックでは、[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストにデータベースオブジェクトを手動で追加する方法について説明します。または、オブジェクトを参照することもできます。

p.88 の「[参照による\[バックアップ対象 \(Backup Selections\)\]リストへのエントリの追加](#)」を参照してください。

[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストにエントリを手動で追加する方法

- 1 [ポリシーの変更 (Change Policy)]ダイアログボックスで、[バックアップ対象 (Backup Selections)]タブをクリックします。
- 2 [新規 (New)]をクリックします。
- 3 [指示句セット (Directive set)]リストから、該当する指示句セットを選択します。
- 4 [パス名または指示句 (Pathname or directive)]リストから指示句を選択して[追加 (Add)]をクリックします。
- 5 オブジェクトのグループを定義したり、複数データストリームを使用する場合は、新しいエントリを編集します。
p.89 の「[複数データストリームを使用する Exchange バックアップの実行](#)」を参照してください。
- 6 さらに指示句を追加するには、手順 2 から手順 4 を繰り返します。
- 7 バックアップ対象リストの作成を完了したら、[OK]をクリックします。
- 8 [OK]をクリックします。

複数データストリームを使用する Exchange バックアップの実行

複数データストリームを有効にする場合、バックアップは複数のジョブに分けられます。各ジョブで[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストの一部が、それぞれバックアップ

されます。複数のデータストリームを使用するには、[属性 (Attributes)] タブで「複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)」を有効にします。

NetBackup では、指示句の後にアスタリスク (*) を追加することにより、新しいストリームの開始位置が自動的に決定されるように設定することができます。または、[バックアップ対象 (Backup Selections)] リストの特定の部分 (1 カ所以上) に NEW_STREAM 指示句を挿入して各ストリームの開始位置を制御することもできます。[バックアップ対象 (Backup Selections)] リストでワイルドカード文字を使用して Exchange オブジェクトを定義した場合、それらのオブジェクトは複数ストリームでバックアップされます。

複数の Exchange データベースをバックアップする場合、NetBackup では選択されたサーバーごとにバックアップジョブをグループ化します。1 つのスナップショットが、指定されたサーバーのレプリケートされたすべてのデータベースに対して実行されます。もう 1 つのスナップショットは、そのサーバーのすべてのアクティブなデータベースに対して実行されます。複数ストリームは、それから、各スナップショットで実行されたデータベースバックアップに適用されます。

複数のデータストリーム機能について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

Exchange データベース可用性グループ (DAG) での複数データストリームの使用

データベース可用性グループ (DAG) のデータベースをバックアップする場合、NetBackup では、データソースおよび優先サーバーリストの設定に従って、各データベースをバックアップするためのサーバーを選択します。バックアップジョブは、サーバーごとにグループ化されます。バックアップ対象リストから、指定されたサーバーにパッシブコピーがあるすべてのデータベースが、1 つのスナップショットジョブの下でグループ化されます。それから、1 つ以上の子のバックアップジョブによってバックアップされます。そのサーバーにアクティブコピーがあるすべてのデータベースは、別のスナップショットジョブの下でグループ化され、その後 1 つ以上のバックアップジョブが続きます。

メモ: どのサーバーがどのデータベースをバックアップするかを確信している場合のみ、DAG で明示的な NEW_STREAM 指示句を使用します。

バックアップジョブは次のように分割されます。

- 複数バックアップストリームを有効にしない場合、スナップショットジョブのすべてのデータベースは、1 つのバックアップジョブでバックアップされます。
- 複数バックアップストリームを有効にし、NEW_STREAM 指示句を指定しない場合、各データベースは自身のバックアップジョブでバックアップされます。
- ポリシーで複数バックアップストリームを有効にし、NEW_STREAM 指示句を指定する場合、NetBackup ではバックアップ対象リストでの NEW_STREAM 指示句の配置に従って、データベースバックアップをジョブにグループ化しようとします。この結果は、デー

データベースバックアップのスナップショットジョブへのグループ化によって影響されます。
NetBackup は、ポリシーで NEW_STREAM 指示句が後に続くすべてのデータベース
の後でバックアップジョブを分割します。

p.92 の「バックアップからの Exchange 項目の除外について」を参照してください。

p.89 の「複数データストリームを使用する Exchange バックアップの実行」を参照してく
ださい。

Exchange の[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストで のワイルドカードの使用

ワイルドカード文字を使用して、データベースのグループを定義することができます。この
方法では、[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストでオブジェクトを個別に指定し
なくても、複数のオブジェクトのバックアップが可能です。複数のデータストリームも有効
にする必要があります。このオプションが有効になっていない場合、バックアップが失敗
します。

p.89 の「複数データストリームを使用する Exchange バックアップの実行」を参照してく
ださい。

表 7-9 サポートされているワイルドカード文字

ワイルドカード文字	処理
アスタリスク (*)	0 (ゼロ) を含めて任意の数の文字の代わりに使用します。文 字列の最後の文字としてアスタリスクを指定します。 例: a で始まるすべてのオブジェクトを指定するには、a* を 使用します。
疑問符 (?)	名前に含まれる 1 つ以上の文字の代わりに使用します。 例 1: 文字列 s?z は、最初の文字が s、2 番目が任意の文 字、3 番目の文字が z であるすべてのオブジェクトを処理し ます。 例 2: 文字列 Data??se は、最初の 4 文字が Data、5 番 目と 6 番目が任意の文字、7 番目と 8 番目の文字が se で あるすべてのオブジェクトを処理します。
左右の角カッコ ([...])	これらのワイルドカード文字は Microsoft Information Store:¥ 指示句または Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥ 指示句ではサ ポートされません。

[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストでワイルドカード文字を使用する場合、次
の規則が適用されます。

- 使用できるワイルドカードパターンの数は、1 つの[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストのエントリにつき 1 つだけです。
- ワイルドカードが認識されない場合は、通常の文字として処理されます。
- ワイルドカードパターンが有効なのは、パス名の最後のセグメントだけです。例:
 Microsoft Information Store:¥*
 Microsoft Information Store:¥Database*
 Microsoft Information Store:¥Data??se
 Microsoft Exchange Database Availability Group:¥*
 Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥Database*
 Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥Data??se

バックアップからの Exchange 項目の除外について

ある特定のデータベースのバックアップを作成しない場合には、エクスクルードリストを作成できます。NetBackup が NetBackup for Exchange のバックアップポリシーを実行するとき、NetBackup はエクスクルードリストで指定されている項目を無視します。

NetBackup 管理コンソールを使用して除外リストを作成する方法について詳しくは次のいずれかを参照してください。

- p.93 の「[Exchange クライアントのエクスクルードリストの構成](#)」を参照してください。
- 『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』

NetBackup はある特定のファイルとディレクトリをデフォルトで除外します。これらのデフォルトの除外は、管理コンソールのエクスクルードリストに常時表示されています。デフォルトの除外は次の通りです。

- C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackup¥bin¥bprd.d¥*.lock
- C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackup¥bin¥bpsched.d¥*.lock
- C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackupDB¥data¥*
- C:¥Program Files¥Veritas¥Volmgr¥misc¥*

DAG またはスタンドアロンの Exchange Server に存在するデータベースの両方で、バックアップから特定のデータベースを除外できます。[すべてのポリシー (All Policies)]または特定のポリシーカスケジュールでエクスクルードリストエントリを指定できます。

表 7-10 に、エクスクルードリストに追加できる Exchange のエントリの例を示します。

表 7-10 エクスクルードリストの Exchange のエントリの例

エントリ	エクスクルードの対象
Microsoft Information Store:¥Database2	<i>Database2</i> という名前のデータベース。 DAG とスタンドアロンデータベースの両方で、同じ Microsoft information Store:¥ 指示句を使うことができます。 Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥Database 2 は無効なエクスクルードエントリであることに注意してください。

Exchange クライアントのエクスクルードリストの構成

このトピックでは、Exchange バックアップから項目をエクスクルードする方法について説明します。このトピックについて詳しくは、次を参照してください。

p.92 の「[バックアップからの Exchange 項目の除外について](#)」を参照してください。

次の図は 2 つのデータベースが指定されたエクスクルードリストを示します。

メモ: クラスタ化またはレプリケートされた環境でのバックアップの場合は、各ノードを選択し、各ノードで構成手順を実行します。各ノードで同じ設定を構成する必要があります。仮想サーバー名の属性を変更すると、NetBackup は DAG ホストサーバーのみを更新します。

Exchange クライアントのエクスクルードリストを設定する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールまたはリモート管理コンソールを開きます。
- 2 左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Administration)]>[ホストプロパティ (Host Properties)]>[クライアント (Clients)]を展開します。
- 3 右ペインで、構成する Exchange クライアントを選択します。
- 4 [処理 (Actions)]の[プロパティ (Properties)]をクリックします。
- 5 [Windows クライアント (Windows Client)]を展開して、[エクスクルードリスト (Exclude Lists)]をクリックします。
- 6 [追加 (Add)]をクリックします。
- 7 次のいずれかの方法で除外するオブジェクトを指定します。
 - [ポリシー (Policy)]フィールドで、[<<すべてのポリシー >> (<<All Policies >>)]を選択するか、特定のポリシーの名前を入力します。
 - [スケジュール (Schedules)]フィールドで、[<<すべてのスケジュール>> (<<All Schedules >>)]を選択するか、特定のスケジュールの名前を入力します。

- [ファイル/ディレクトリ (Files/Directories)] フィールドに次の形式でデータベースの名前を入力します。

Microsoft Information Store:¥name

name には、Exchange データベースの名前を次の通りに指定します。

- DAG バックアップも含め、Exchange バックアップから特定のデータベースを除外するには、除外するデータベースの名前を入力します。
エクスクルードする Exchange データベースを指定するときには、ワイルドカード文字を含めないでください。

8 環境内の他のノードで、手順 3 から手順 7 を繰り返します (該当する場合のみ)。

NetBackup 環境がクラスタ化またはレプリケートされている場合にこの手順を実行します。

仮想クライアントの名前を指定すると、DAG ホストサーバーのみが更新されます。クラスタ全体で変更を有効にするには、各ノードの構成手順を繰り返します。

Exchange のバックアップとトランザクションログについて

Exchange データベースでは、パフォーマンスおよびリカバリ能力を向上させるために、トランザクションログを使用してデータの受け入れ、トラッキングおよび管理が行われます。すべてのトランザクションは、最初にトランザクションログとメモリに書き込まれ、その後、対応するデータベースにコミットされます。トランザクションログは、障害が発生し、データベースが破損した場合にインフォメーションストアデータベースのリカバリするために使用できます。のインフォメーションストアには複数の個別のデータベースが存在する場合があります、そのそれぞれに独自のトランザクションログセットがあります。

トランザクションは、最初にログファイルに書き込まれ、後でデータベースに書き込まれます。有効なデータベースは、トランザクションログファイル内のコミットされていないトランザクションと実際のデータベースファイルを組み合わせたものです。トランザクションデータがログファイルの最大容量に達すると、そのファイルの名前は変更され、新しいログファイルが作成されます。ログファイルの名前が変更されると、名前が変更された他のログファイルは同じサブディレクトリに格納されます。名前が変更されたログファイルには、16 進数の連続番号を含む名前が付けられます。

インフォメーションストアのデータベーストランザクションログの名前は EXYYYYYYYY.log になります。XX は、データベース番号 (16 進数) です。YYYYYYYY はログファイル番号 (16 進数) です。トランザクションログのサイズは 1 MB です。

1 MB のトランザクションログデータが書き込まれるたびに、新しいログが作成されます。このログは、トランザクションデータがデータベースにコミットされない場合でも作成されます。これにより、コミットされていないデータを含むトランザクションログが存在する場合があります。したがって、このようなログはページできません。

トランザクションログは、一定時間にわたって、またはサービスが停止されたときにデータベースにコミットされます。ログファイル内に存在し、データベースファイルには存在しないすべてのトランザクションがデータベースにコミットされます。

ログファイルは手動でページしないください。代わりに、ログはバックアップ処理によってページしてください。レプリケートされたコピー (DAG) のバックアップの場合、ログの切り捨てがスケジュールされます。Exchange に切り捨てを開始するリソースがある場合、アクティブコピーから開始されます。レプリケートされていないコピーと同様に、バックアップ後すぐには実行されません。

トランザクションログの切り捨て方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

p.83 の「[NetBackup for Exchange のバックアップ形式](#)」を参照してください。

p.114 の「[Exchange インスタントリカバリのスケジュールの追加](#)」を参照してください。

Exchange Server のスナップショットバックアップの構成

次の手順を使用して、Exchange Server のスナップショットバックアップを設定します。

表 7-11 Exchange Server のスナップショットバックアップの構成

手順	処理	説明
手順 1	スナップショットバックアップの構成とライセンス要件を確認します。	p.18 の「 Exchange スナップショットバックアップの Snapshot Client 構成とライセンス要件 」を参照してください。
手順 2	個別リカバリテクノロジー (GRT) を使ってデータベースバックアップからメールボックスアイテムをリストアする場合は、追加構成が必要になります。	p.51 の「 個別リカバリテクノロジー (GRT) を使う Exchange バックアップの構成 (非 VMware バックアップ) 」を参照してください。
手順 3	オフホストバックアップを実行する場合、そのバックアップ形式のインストール要件を確認します。	p.19 の「 Exchange オフホストバックアップの要件 」を参照してください。
手順 4	スナップショット操作の一般的な構成要件を確認します。	p.97 の「 スナップショット操作を実行する場合の Exchange Server の構成に関する要件と推奨事項 」を参照してください。 p.97 の「 Exchange スナップショット操作の制限事項 」を参照してください。
手順 5	Exchange Server の構成要件を確認します。	p.97 の「 スナップショット操作を実行する場合の Exchange Server の構成に関する要件と推奨事項 」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 6	バックアップの対象となるトランザクションログを選択します。	p.25 の「スナップショットバックアップによるすべての Exchange トランザクションログファイルまたはコミットされていない Exchange トランザクションログファイルのみのバックアップについて」を参照してください。
手順 7	一貫性チェックを構成します。	p.98 の「Exchange スナップショットバックアップの一貫性チェック」を参照してください。 p.27 の「Exchange バックアップでの一貫性チェックオプションについて」を参照してください。
手順 8	適切なスナップショット属性が選択された MS-Exchange-Server ポリシーを構成します。	p.99 の「Exchange Server のスナップショットポリシーの構成」を参照してください。
手順 9	データベース可用性グループ (DAG) の場合は、パッシブコピーまたはアクティブコピーのどちらをバックアップするかを選択します。パッシブコピーをバックアップする優先サーバーリストを定義することもできます。	p.103 の「データベース可用性 (DAG) バックアップのバックアップソース」を参照してください。 p.103 の「データベース可用性グループ (DAG) の優先サーバーリストの構成」を参照してください。
手順 10	バックアップ処理中に使用するスナップショットボリュームを構成します。	
手順 11	すべてのデータベースの循環ログ記録を無効にします。	

Exchange Server でのスナップショットバックアップについて

NetBackup for Exchange Server には、スナップショットバックアップのサポートが含まれます。NetBackup for Exchange Server では、コンポーネントファイルのスナップショットをとることによって、Exchange オブジェクトのバックアップおよびリストアを実行できます。特定の時点のデータが取得されます。取得されたスナップショットのバックアップを行っても、データベースの可用性に影響を与えることはありません。これらのスナップショットは、テープやストレージユニットにバックアップされます。

別の Snapshot Client ライセンスによって、スナップショットバックアップの追加機能が提供されます。インスタントリカバリ用のスナップショットイメージを構成し、代替クライアントを構成してスナップショットバックアップを実行できます。

NetBackup for Exchange では、スナップショットイメージの作成方式として、Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) がサポートされています。使用される実際の VSS プロバイダは、ハードウェア環境およびソフトウェア環境によって異なります。NetBackup for Exchange Server で使用できる VSS プロバイダのリストを参照できます。

[Snapshot Client 互換リスト](#)を参照してください。

NetBackup for Exchange Server では、次の Snapshot Client 機能を使用できます。

スナップショットバックアップ	スナップショットとは、クライアントのデータのディスクイメージです。NetBackup では、クライアントの元のボリュームから直接データをバックアップするのではなく、スナップショットボリュームからデータのバックアップが行われます。バックアップ中も、クライアント操作およびユーザーアクセスは中断することなく続行できます。
インスタントリカバリ	NetBackup は、クラスタ化されていない環境とレプリケートされていない環境に対するインスタントリカバリバックアップをサポートします。インスタントリカバリには、別の Snapshot Client のライセンスが必要です。 バックアップをローカルディスクからのリカバリのために使用できるようにします。スナップショットは、テープまたは他のストレージに追加のバックアップコピーを行うためのソースにすることもできます。 インスタントリカバリを実行するには、次のいずれかの方法を使用します。 ■ スナップショットボリュームから元のボリュームにファイルのコピーを戻す ■ ボリュームをロールバックする
オフホストバックアップ	バックアップ処理の負荷が別のバックアップエージェントに移行されます。その結果、バックアップがクライアントのコンピュータリソースに与える影響が減少します。バックアップエージェントによって、クライアントのデータがストレージデバイスに送信されます。 NetBackup では、非クラスタで、レプリケートされていない環境で、代替クライアントを使った Exchange のオフホストバックアップがサポートされています。オフホストバックアップには、別の Snapshot Client のライセンスが必要です。 NetBackup はオフホストのインスタントリカバリバックアップもサポートします。

Exchange スナップショット操作の制限事項

NetBackup for Exchange を使用してスナップショット操作を実行する場合、次の制限事項があります。

- オフホストバックアップでは、データムーバーがサポートされません。代替クライアントだけがサポートされます。

スナップショット操作を実行する場合の Exchange Server の構成に関する要件と推奨事項

スナップショットバックアップを実行する前に、次の構成要件と推奨事項を確認してください。

- スナップショットバックアップに必要なインストールおよび構成を完了します。

p.18 の「Exchange スナップショットバックアップの Snapshot Client 構成とライセンス要件」を参照してください。

- バックアップを実行する前にデータベースをマウントします。
- Exchange データベースが格納されているボリュームは、Exchange 専用ボリュームにする必要があります。それ以外の形式のデータベース (SQL Server など) は、他のボリュームに格納します。スナップショットバックアップには、Exchange オブジェクトだけが含まれます。
- トランザクションログまたは Exchange システムファイルは Exchange データベースファイル (edb および stm) と別のボリュームに置く必要があります。
- Storage Foundation for Windows (SFW) を使用するオフホストバックアップの場合、SFW はディスクレベルでデポートし、インポートします。バックアップするボリュームがディスク全体を構成する必要があります。

Exchange スナップショットバックアップの一貫性チェック

Exchange スナップショットバックアップでは、一貫性チェックを実行するように NetBackup を構成します。一貫性チェックは、スタンドアロンの Exchange サーバーの場合に必要です。一貫性チェックは、レプリケーション中にチェックが実行されるため、Exchange データベース可用性グループ (DAG) の場合は必要ありません。

一貫性チェックは、適切なオプションを指定して、スナップショット内に存在するファイルに対して実行します。いずれかのファイルで一貫性チェックが失敗した場合は、バックアップも失敗し、バックアップイメージは廃棄されます。Exchange VSS Writer に失敗が通知されます。この種のバックアップが失敗した場合、Exchange ではログファイルは切り捨てられません。一貫性チェックが失敗する場合は、データベースが破損しているか、またはスナップショットに問題がある可能性があります。

ローカルスナップショットバックアップの場合、NetBackup では Microsoft 一貫性チェック API が使用されます。この API を使用して、アプリケーションイベントログの問題または情報を参照することもできます。

オフホストバックアップでは、一貫性チェックは、プライマリクライアント上ではなくオフホストクライアント上で実行されます。Veritas は代替クライアントに Exchange システム管理ツールをインストールすることを推奨します。NetBackup では、この構成を使用してバックアップをより速く実行します。Exchange システム管理ツールが代替クライアントにインストールされていない場合、次の処理が実行されます。

- Exchange システム管理ツールをインストールしないことを選択すると、バックアップは失敗することがあります。代替クライアントに VC9 ランタイム DLL をインストールしてください。これらの DLL は Microsoft 社の x64 VC9 のダウンロードのページからダウンロードできます。

<http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?familyid=BD2A6171-E2D6-4230-B809-9A8D7548C1B6&displaylang=en>

- bpfis により、メッセージがログに記録されます。メッセージは DLL をロードできないことと、eseutil が一貫性チェックに使用されることを示します。
- NetBackup により、スナップショットのインポート手順の間に一貫性チェックが実行されます。

一貫性チェックの構成に関する詳細情報が利用可能です。

p.27 の「[Exchange バックアップでの一貫性チェックオプションについて](#)」を参照してください。

Exchange Server のスナップショットポリシーの構成

インスタントリカバリを設定したスナップショットポリシーを構成するには、次の手順を実行します。

p.106 の「[Exchange Server のインスタントリカバリバックアップの構成](#)」を参照してください。

スナップショットポリシーを使用して、必要に応じて、オフホストバックアップを実行できます。ポリシーの推奨事項については、次のトピックも参照してください。

p.79 の「[Exchange Server のポリシーに関する推奨事項](#)」を参照してください。

Exchange Server のスナップショットポリシーを構成する方法

- 1 新しいポリシーを作成するか、構成するポリシーを開きます。
- 2 [ポリシーの変更 (Change Policy)] ダイアログボックスで、[属性 (Attributes)] タブをクリックします。
- 3 [ポリシー形式 (Policy type)] リストで、[MS-Exchange-Server] をクリックします。
- 4 [ポリシーストレージ (Policy storage)] を選択します。
- 5 [スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)] をクリックします。
- 6 [Snapshot Client] グループで、[オプション (Options)] をクリックします。
- 7 [Snapshot Client オプション (Snapshot Client Options)] ダイアログボックスで、[スナップショット方式 (Snapshot method)] リストから、[VSS] をクリックします。
- 8 構成パラメータを調整します。

p.102 の「[Exchange Server のバックアップのスナップショットオプション](#)」を参照してください。

- 9 (任意) Exchange スタンドアロンサーバーでオフホストバックアップを実行するには、次を行います。
 - [オフホストバックアップを実行する (Perform off-host backup)] をクリックします。
 - [使用 (Use)] ボックスで、[代替クライアント (Alternate Client)] を選択します。

- [マシン (Machine)] フィールドに、代替クライアントの名前を入力します。

SFW VSS プロバイダを使用する場合は、既存の追加のインストール要件と構成を確認します。

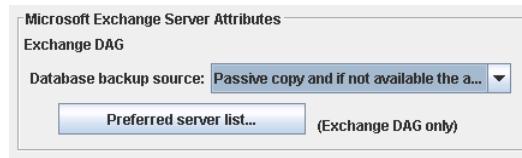
p.19 の「Exchange オフホストバックアップの要件」を参照してください。

- 10 (任意) バックアップを複数のジョブに分割するには、[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)] をクリックします。

- 11 データベースバックアップからの個々の項目のリストアを有効にするには、[個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)]をクリックします。

p.51 の「個別リカバリテクノロジー (GRT) を使う Exchange バックアップの構成 (非 VMware バックアップ)」を参照してください。

- 12 Exchange DAG のバックアップでは、[Microsoft Exchange 属性 (Microsoft Exchange Attributes)]グループで[データベースバックアップソース (Database backup source)]を選択します。



p.103 の「データベース可用性 (DAG) バックアップのバックアップソース」を参照してください。

p.103 の「データベース可用性グループ (DAG) の優先サーバーリストの構成」を参照してください。

- 13 スケジュールを構成する場合、[スケジュール (Schedules)]タブをクリックします。

p.83 の「NetBackup for Exchange ポリシーへのスケジュールの追加」を参照してください。

- 14 [クライアント (Clients)]タブを使用して、このポリシーでバックアップするクライアントを指定します。

p.86 の「Exchange ポリシーのクライアントを NetBackup へ追加」を参照してください。

DAG ポリシーの場合、クライアント名は DAG 名であり、バックアップが実行されるクライアントではありません。特定の Exchange Server を使用する場合は、優先サーバーリストに追加します。

p.103 の「データベース可用性グループ (DAG) の優先サーバーリストの構成」を参照してください。

オフホストバックアップの場合、クライアント名はプライマリクライアントの名前である必要があります。代替クライアントは、ディスクアレイを共有するクライアントである必要があります。この構成を行うには、追加構成が必要となる場合があります。

『NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド』を参照してください。

- 15** [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブを使用して、指示句を入力するか、Exchange オブジェクトを参照します。
- SFW VSS プロバイダを使用してオフホストバックアップを行うには、同じ SFW ディスクグループ上に存在するオブジェクトのみをバックアップする必要があります。
- 16** [OK]をクリックして、このダイアログボックスを閉じます。

Exchange Server のバックアップのスナップショットオプション

表 7-12 に、スナップショットバックアップで利用可能なオプションを示します。

表 7-12 **スナップショットのオプション**

パラメータ	値	説明
プロバイダ形式 (Provider Type)	0-自動 (0-auto)	VSS プロバイダは、スナップショットボリュームで利用できるプロバイダに基づいて自動的に選択されます。
	1-システム (1-system)	デフォルトの Microsoft VSS プロバイダだけが使用されます。
	2-ソフトウェア (2-software)	現在サポートされているソフトウェア VSS プロバイダは SFW だけです。このプロバイダによって、バックアップに必要ないずれかのボリュームが管理されていない場合、バックアップは失敗します。
	3-ハードウェア (3-hardware)	利用可能なハードウェア VSS プロバイダがボリュームに使用されます。ハードウェアプロバイダが、バックアップに必要ないずれかのボリュームで利用できない場合、バックアップは失敗します。
スナップショット属性 (Snapshot Attribute)	0-指定なし (0-unspecified)	このオプションの設定は、スナップショットボリュームの構成によって異なります。
	1-差分 (1-differential)	
	2-プレックス (2-plex)	
最大スナップショット数 (インスタントリカバリのみ) (Maximum Snapshots (Instant Recovery only))		このオプションによってインスタントリカバリで保持されるスナップショットの数が定義されます。このしきい値に達すると、別のスナップショットバックアップが実行される前に、VSS プロバイダとその構成に応じて、自動的にスナップショットのスナップバック操作または削除が行われます。 バックアップ用のスナップショットボリュームにすることのできるボリュームの適切な数を選択します。Microsoft VSS プロバイダを使用する場合は、作成される仮想スナップショットに利用できるディスク容量を考慮してください。

データベース可用性 (DAG) バックアップのバックアップソース

データベース可用性グループ (DAG) のバックアップでは、データベースのアクティブコピーとパッシブコピーのどちらをバックアップするかを選択できます。クライアントでは、ローカルのスナップショットバックアップであるかのように、選択したデータベースのバックアップとカタログへの記録を実行できます。

p.103 の「データベース可用性グループ (DAG) の優先サーバーリストの構成」を参照してください。

ポリシーの[属性 (Attributes)]タブで、バックアップソースについて次のいずれかを選択します。

パッシブコピーのみ (または優先サーバーリストからパッシブコピー) (Passive copy only (or passive copy from preferred server list)) このオプションでは、データベースがバックアップ対象リストにマウントされ、含まれ、正常であれば、データベースのパッシブコピーまたはパッシブサーバーをバックアップします。DAG の場合は、優先サーバーリストも構成する必要があります。その場合、NetBackup はデータベースが他の基準を満たせば、優先サーバーリストのサーバーのパッシブコピーをバックアップします。

データベースにパッシブコピーがない場合、アクティブサーバーで (アクティブサーバーでのみ) バックアップされます。たとえば、パブリックフォルダデータベースにはアクティブコピーのみがあります。データベースにアクティブコピーしかない場合は優先サーバーリストは必要ありません。

アクティブコピーのみ (Active copy only) このオプションでは、データベースのアクティブコピーまたはアクティブサーバーをバックアップします。優先サーバーリストは無視されます。

パッシブコピー。利用できない場合はアクティブコピー (Passive copy and if not available the active copy) このオプションでは、データベースがバックアップ対象リストにマウントされ、含まれ、正常であれば、データベースのパッシブコピーまたはパッシブサーバーをバックアップします。DAG の場合は、優先サーバーリストも構成できます。その場合、NetBackup はデータベースが他の基準を満たせば、優先サーバーリストのサーバーのパッシブコピーをバックアップします。パッシブコピーが利用できず、健全でない場合、NetBackup はアクティブコピーをバックアップします。

このオプションはデフォルトです。

データベース可用性グループ (DAG) の優先サーバーリストの構成

Exchange データベース可用性グループ (DAG) の優先サーバー構成を作成できます。優先サーバーリストは優先バックアップソースとして選択する 1 台以上の DAG 内のサーバーの集合です。優先サーバー構成はデータベースのコピーが複数のサーバー間でレプリケートされるインスタンスでバックアップソースとして優先されます。優先サーバーリストは、[パッシブコピーのみ (Passive copy only)]の場合は必須です (データベースにアクティブコピーしかない場合は除く)。優先サーバーリストは[アクティブコピーのみ (Active

copy only])では無視され、[パッシブコピー。利用できない場合はアクティブコピー (Passive copy and if not available the active copy)]ではオプションとなります。

NetBackup では、レプリケートされたデータベースコピーをバックアップするのに最適なサーバーを選択できます。または、優先サーバーリストを指定できます。優先サーバーリストを指定することにより、バックアップジョブをより詳細に管理できます。たとえば、WAN 経由のレプリケーションデータをバックアップしないようにローカルにある優先サーバーのリストを構成できます。優先設定の順にサーバーを配列できます。または、すべてあるいはほとんどのデータベースのパッシブコピーが含まれ、しかも高速メディアサーバーである DAG のノードを 1 つ存在させることができます。バックアップの効率を高めるため、優先リストにこのサーバーのみを追加します。

バックアップ用に選択するレプリケート済みのデータベースごとに、NetBackup は次のようにサーバーを選択します。

- サーバーは NetBackup が直近にデータベースのバックアップを試みたサーバーです。
- このサーバーでのバックアップ試行は成功しました。
NetBackup は、バックアップ試行の成功または失敗を追跡して、パッシブコピーデータベースバックアップを行うための Exchange ノードを決定します。
p.105 の「[Exchange データベース可用性グループ \(DAG\) のバックアップ状態と優先サーバーリスト](#)」を参照してください。
- サーバーは優先サーバーリストに含まれています。

このアルゴリズムでサーバーが選択されない場合、データベースはバックアップされません。メッセージが進捗ログに表示され、このような理由でスキップされた各データベースが識別されます。

優先サーバーリストを構成する方法

- 1 [ポリシーの変更 (Change Policy)]ダイアログボックスで、[属性 (Attributes)]タブをクリックします。
- 2 [Microsoft Exchange 属性 (Microsoft Exchange Attributes)]グループで、[データベースバックアップソース (Database backup source)]リストから、[パッシブコピーのみ (Passive copy only)]を選択します。
p.103 の「[データベース可用性 \(DAG\) バックアップのバックアップソース](#)」を参照してください。
- 3 [優先サーバーリスト (Preferred server list)]をクリックします。
- 4 [名前 (Name)]ボックスに、リストに追加する DAG ノードの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力します。
- 5 [追加 (Add)]をクリックします。
- 6 他の DAG ノードを追加します。

- 7 上向きおよび下向きのボタンを使用して、NetBackup でサーバーを選択する順序を指定します。
- 8 [OK]をクリックします。

Exchange データベース可用性グループ (DAG) のバックアップ状態と優先サーバーリスト

Exchange データベース可用性グループ (DAG) 環境では、NetBackup によってそれぞれのパッシブコピーデータベースバックアップのバックアップ試行の成功または失敗が追跡されます。この情報は、NetBackup マスターサーバー上のバックアップ状態データベースに格納されます。この状態は DAG における各データベースの後続のバックアップ試行に使用されます。パッシブコピーデータベースバックアップを行うための Exchange ノードの決定に役立ちます。

NetBackup は、後続のパッシブコピーデータベースバックアップの試行で、優先サーバーリストから次のようにサーバーを選択します。

前回のバックアップが正常に終了し、前回のバックアップサーバーが優先サーバーリストにある場合

NetBackup は同じサーバーを使用します。

前回のバックアップが正常に終了したが、前回のバックアップサーバーが優先サーバーリストにない場合

NetBackup はリストに表示されている順序に基づいてリストからサーバーを選択します。

前回のバックアップの試行が失敗した場合

NetBackup はリストに表示されている順序に基づいてリストからサーバーを選択します。前回失敗したサーバーは、効果的にリストの最後に移動されます。

データベースのバックアップ状態がない場合

NetBackup はリストに表示されている順序に基づいてリストからサーバーを選択します。

データベースのバックアップ状態がない場合と

NetBackup は、データベースのパッシブコピーの健全性をランク付けしてサーバーを決定します。

優先サーバーリストが構成されていないか、または優先サーバーリストのどのサーバーも Exchange データベースと関連していない場合

NetBackup で後続のパッシブコピーデータベースバックアップの試行に強制的に特定のサーバーを使用するには、データベースのバックアップ状態を変更します。次のコマンドで、前回の正常なバックアップが目的のサーバーから行われたことを指定します。

```
bpclient -client DAG_Name -update -exdb
database_name:server_name:0:0:0
```

Exchange Server のインスタントリカバリバックアップの構成

表 7-13 Exchange Server のインスタントリカバリバックアップの構成

手順	処理	説明
手順 1	すべてのデータベースの循環ログ記録を無効にします。	
手順 2	スナップショットバックアップの構成とライセンス要件を確認します。	p.18 の「 Exchange スナップショットバックアップの Snapshot Client 構成とライセンス要件 」を参照してください。
手順 3	インスタントリカバリバックアップのインストール要件を確認します。	p.19 の「 Exchange インスタントリカバリバックアップの要件 」を参照してください。
手順 4	スナップショット操作の一般的な構成要件を確認します。	p.97 の「スナップショット操作を実行する場合の Exchange Server の構成に関する要件と推奨事項」を参照してください。 p.109 の「Storage Foundations for Windows (SFW) と Exchange インスタントリカバリについて」を参照してください。 p.110 の「Microsoft VSS プロバイダによる Exchange インスタントリカバリ」を参照してください。
手順 5	Exchange Server のインスタントリカバリ操作の構成要件を確認します。	p.109 の「 インスタントリカバリを使用する場合の Exchange Server の構成要件 」を参照してください。
手順 6	バックアップの対象となるトランザクションログを選択します。	p.25 の「 スナップショットバックアップによるすべての Exchange トランザクションログファイルまたはコミットされていない Exchange トランザクションログファイルのみのバックアップについて 」を参照してください。
手順 7	インスタントリカバリバックアップのためのバックアップポリシーの推奨事項を確認します。	p.108 の「 Exchange インスタントリカバリに関するポリシーの推奨事項 」を参照してください。
手順 8	インスタントリカバリ属性が選択された MS-Exchange-Server ポリシーおよび必要な Snapshot Client のオプションを構成します。	p.110 の「 インスタントリカバリが設定された Exchange スナップショットポリシーの構成 」を参照してください。
手順 9	ディスクに残す必要のあるバックアップイメージごとに 1 つのスナップショットボリュームを構成します。	

Exchange インスタントリカバリ方式について

インスタントリカリオプションを設定してスナップショットを保持する場合、NetBackup では必要に応じてスナップショットボリュームのロールバックを使用してデータベースをリストアします。通常、Exchange ファイルを含むスナップショットボリュームのロールバックが最も高速な方法です。ただし、ロールバックが適切かどうかは、Exchange データベースファイルの構成、ボリュームの内容、ディスクアレイの構成など、いくつかの要因によって異なります。ボリュームロールバックを実行できない場合、リストアに必要なファイルはスナップショットボリュームから宛先ボリュームにコピーされます。Exchange のインスタントリカバリは、ファイルシステムのインスタントリカバリとは異なります。Exchange の場合、NetBackup により使用するリカバリ方式が決定されます。ファイルシステムのリストアの場合、ユーザーがインスタントリカバリ方式を選択します。

物理ファイルをリストアする場合、Exchange データベースのリストアでは、NetBackup は次の方式を使用します。

ボリュームロールバック	スナップショットを使用して、ボリューム全体をロールバックまたは再同期化します。この方式により、ボリューム全体がスナップショットがとられたボリュームで上書きされます。
ファイルコピーバック	個々のファイルのコピーが、スナップショットがとられたボリュームから現在のボリュームに戻されます。

ボリュームをロールバックできるかどうかを確認するために、次の場所に同じファイルのリストが存在するかどうかチェックされます。

- スナップショットボリュームは、リストアするファイルのカatalog化されたリストと比較されます。これらのリストは、完全に一致する必要があります。一致しない例として、ファイルがスナップショットに含まれていても、Exchange ファイルではないためにカatalog化されなかった場合があります。スナップショットはロールバックされません。これは、その処理によって非 Exchange ファイルが上書きされるためです。ボリューム上の一部のデータベースがバックアップに含まれなかった場合も、Exchange ファイルはスナップショットに存在しても、カatalogに存在しません。
- スナップショットボリュームは、現在のボリュームと比較されます。現在のボリュームのすべてのファイルは、スナップショットにも存在する必要があります。ロールバックは、スナップショットに存在しないファイルがある場合、そのファイルをリストアしないため、実行されません。

両方の比較で、NetBackup は特定のファイルを比較の対象からエクスクルードします。たとえば、不要な Exchange トランザクションログ、Exchange により再生成されるファイル、または NetBackup プロセスの結果であるファイルです。bpf fi ログには、いつそのようなファイルの相違が検出され、比較の対象からエクスクルードされたかが示されます。コピーバックリストア方式は、次の状況で使用されます。

- システムプロバイダを使用し、リストア対象のスナップショットが最新のスナップショットではない場合。
- ボリューム上の他のファイルが失われた可能性がある場合。
- スナップショットの一部のファイルはリストアの対象でない場合。
- [ロールフォワードリカバリ (Roll-Forward Recovery)]を選択する場合。コピーバック方式は、ログファイルを含むボリュームで使用する必要があります。ロールフォワードリカバリには、バックアップ以降に作成されたログファイルが必要です。ロールバックは、これらのログファイルを削除するため、実行できません。データベースファイル (.edb) が異なるボリュームにある場合、そのボリュームは他の条件で評価され、ロールバックに使用できるかどうかが判断されます。

リストアセットに複数のボリュームが含まれる場合、ロールバックに使用できるかどうかを確認するために各ボリュームが別々に評価されます。(リストアセットは、リストア対象となる Exchange データベース、トランザクションログおよびシステムファイルの場所に基づきます。)たとえば、データベースファイルを含むボリュームがロールバックの対象になっているが、ログファイルを含むボリュームには Exchange 以外の余分なファイルが存在するとします。リストア時には、データベースファイルを含むボリュームだけがロールバックされます。ログファイルのコピーはすべてスナップショットから現在のボリュームに戻されます。

Exchange インスタントリカバリに関するポリシーの推奨事項

インスタントリカバリを使用する場合は、次のスケジュールのポリシーを作成します。

- インスタントリカバリを有効にし、オプション[スナップショットを作成し、さらにスナップショットをストレージユニットへコピー (Snapshots and copy snapshots to a storage unit)]を選択したスナップショットポリシーを作成します。(表 7-14 のスケジュール 1 と 2 を参照。)
個別リカバリテクノロジー (GRT) は、ストレージユニットへのバックアップも構成する場合には、インスタントリカバリでのみサポートされます。
- 高速な一時バックアップのため、[完全バックアップ (Full Backup)]スケジュールを使用する個別のポリシーを作成します (任意)。[インスタントリカバリ用または SLP 管理用にスナップショットを保持する (Retain snapshots for Instant Recovery or SLP management)]と、インスタントリカバリオプションの[スナップショットのみ作成 (Snapshots only)]を有効にします。(表 7-14 のスケジュール 3 を参照。)

選択したバックアップ形式に関連するトランザクションログの切り捨て方法についての情報を参照できます。

p.83 の「NetBackup for Exchange のバックアップ形式」を参照してください。

表 7-14 Exchange Server でのインスタントリカバリポリシーの例

ポリシー形式	自動バックアップの 間隔	ストレージ ユニットへの コピー	説明とその他の構成
MS-Exchange-Server	スケジュール 1: 毎週 (完全バックアップ)	はい	このスケジュールはディザスタリカバリ用です。
	スケジュール 2: 毎日 (増分または差分バックアップ)	はい	このスケジュールはディザスタリカバリ用です。 メモ: 同じポリシーに累積バックアップと差分バックアップを混在させないでください。 メモ: 差分バックアップを選択する場合は、[スナップショットを作成し、さらにスナップショットをストレージユニットへコピー (Snapshots and copy snapshots to a storage unit)]を選択する必要があります。
	スケジュール 3: 4 時間ごと	なし	このスケジュールでは、スナップショットがストレージユニットにコピーされないため、高速な一時バックアップを実現します。[Snapshot Client] グループで、[オプション (Options)]をクリックし、[最大スナップショット数 (Maximum Snapshots)]に小さい数値を設定します。

Storage Foundations for Windows (SFW) と Exchange インスタントリカバリについて

SFW VSS プロバイダを使用して Exchange IR スナップショットを作成する場合、VShadow または Vssadmin ではなく、Veritas Enterprise Administrator (VEA) を使用してスナップショットを参照および管理します。SFW はロールバックリストア後にボリュームのスナップショットを再度作成しますが、Microsoft ユーティリティはこの新しいスナップショットを認識しません。スナップショットが存在しないという誤った報告をします。

インスタントリカバリを使用する場合の Exchange Server の構成要件

Exchange Server でインスタントリカバリを使用する場合、次の構成が必要です。

- Exchange データベースが格納されているボリュームは、Exchange 専用ボリュームにする必要があります。それ以外の形式のデータベース (SQL Server など) は、他のボリュームに格納します。スナップショットバックアップには、Exchange オブジェクトだけが含まれます。
- リストアの実行中にボリュームロールバックを可能にするには、ボリュームに 1 つのデータベースのデータベースファイルだけが格納されるようにします。

- トランザクションログまたは Exchange システムファイルは Exchange データベースファイル (.edb) とは別のボリュームに置く必要があります。

Microsoft VSS プロバイダによる Exchange インスタントリカバリ

Microsoft VSS プロバイダでインスタントリカバリを使用する場合は、特別な要件があります。Veritas は Exchange スタンドアロンサーバーのポリシーの作成時に、共通のボリュームに存在するデータベースのみを含めることをお勧めします。

IR ポリシーによって複数ボリューム上にあるデータベースをバックアップした場合、これらのボリュームのサブセットをリストアすると、NetBackup によって他のスナップショットが削除されます。そうでない場合、バックアップイメージには不完全なスナップショットセットが含まれます。Microsoft VSS プロバイダを使用するロールバックでは、そのスナップショットが使用されますが、これはボリュームのスナップショットが再度作成されないためです。

Microsoft VSS プロバイダでインスタントリカバリを使用する場合、複数ボリュームにわたる項目を選択すると、次の処理が実行されます。

- NetBackup は、ボリュームごとに 1 つのスナップショットを使用してバックアップセットを作成します。
- リストア中にいずれかのスナップショットがロールバックされると、そのセットのすべてのスナップショットが削除されます。(SFW VSS プロバイダまたはハードウェアシステムプロバイダを使用すると、ロールバックされたスナップショットが再度作成されて、スナップショットセットは完全な状態を維持します。)

この状況は、Microsoft VSS プロバイダの制限事項です。これは、通常、別々のボリュームにあるデータベースおよびログフォルダのロールフォワードリストアを実行した際に発生します。データベースボリュームは正常にロールバックされますが、ログボリュームのコピーは戻されます。この処理によってバックアップ以降に作成されたログが保持されます。次に、NetBackup はログスナップショットを削除し、カタログからバックアップイメージの IR コピーを削除します。バックアップのストレージユニットコピーが存在する場合、このコピーはそのまま保持されます。

インスタントリカバリが設定された Exchange スナップショットポリシーの構成

このトピックでは、インスタントリカバリが設定されたスナップショットポリシーを構成する方法について説明します。このトピックでは、Exchange Server のインスタントリカバリスナップショットバックアップを構成するために必要な手順についてのみ説明します。他のポリシー情報を構成する方法は別のトピックで説明します。(これには、他のポリシー属性の説明、スケジュールの作成方法、クライアントの追加方法、バックアップ対象の追加方法も含まれます。)

p.114 の「[Exchange インスタントリカバリのスケジュールの追加](#)」を参照してください。

p.86 の「[Exchange ポリシーのクライアントを NetBackup へ追加](#)」を参照してください。

p.117 の「[インスタントリカバリを設定した Exchange ポリシーへのバックアップ対象の追加](#)」を参照してください。

必要に応じて、オフホストのインスタントリカバリバックアップを実行できます。

Exchange Server のインスタントリカバリが設定されたスナップショットポリシーを構成する方法

- 1 新しいポリシーを作成します。
- 2 [属性 (Attributes)] タブをクリックします。
- 3 [ポリシー形式 (Policy type)] ドロップダウンリストで、[MS-Exchange-Server] をクリックします。
- 4 [ポリシーストレージ (Policy storage)] を選択します。
- 5 [スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)] をクリックします。

6 [インスタントリカバリ用または SLP 管理用にスナップショットを保持する (Retain snapshots for Instant Recovery or SLP management)]をクリックします。

これによって、スナップショットからインスタントリカバリを実行できるようにディスク上にスナップショットが保持されます。バックアップスケジュールで[スナップショットとストレージユニットへのコピー (Snapshot and copy to storage unit)]が指定された場合、ストレージへの通常のバックアップも実行されます。

p.114 の「[Exchange インスタントリカバリのスケジュールの追加](#)」を参照してください。

p.115 の「[Exchange インスタントリカバリポリシーのスケジュール設定](#)」を参照してください。

- 7 [Snapshot Client]グループで、[オプション (Options)]をクリックします。
- 8 [Snapshot Client オプション (Snapshot Client Options)]ダイアログボックスで、[スナップショット方式 (Snapshot method)]リストから、[VSS]をクリックします。
- 9 構成パラメータを調整します。

p.102 の「Exchange Server のバックアップのスナップショットオプション」を参照してください。

- 10 (任意) バックアップを複数のジョブに分割することを選択し、[スナップショットとストレージユニットへのコピー (Snapshot and copy to storage unit)]を選択した場合は、[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)]をクリックします。

p.89 の「[複数データストリームを使用する Exchange バックアップの実行](#)」を参照してください。

- 11 (任意) オフホストのインスタントリカバリバックアップを実行するには、次を行います。

- [オフホストバックアップを実行する (Perform off-host backup)]をクリックします。
- [使用 (Use)]ボックスで、[代替クライアント (Alternate Client)]を選択します。
- [マシン (Machine)]フィールドに、代替クライアントの名前を入力します。

SFW VSS プロバイダを使用する場合は、既存の追加のインストール要件と構成を確認します。

p.19 の「[Exchange オフホストバックアップの要件](#)」を参照してください。

- 12 その他のポリシー情報を次のように追加します。

- ポリシーにクライアントを追加します。
p.86 の「[Exchange ポリシーのクライアントを NetBackup へ追加](#)」を参照してください。
- ポリシーにバックアップ対象を追加します。
p.117 の「[インスタントリカバリを設定した Exchange ポリシーへのバックアップ対象の追加](#)」を参照してください。

- 13 必要なすべてのクライアント、スケジュールおよびバックアップ対象を追加したら、[OK]をクリックします。

Exchange インスタントリカバリのスケジュールの追加

インスタントリカバリポリシーのスケジュールを構成するには、次の手順を実行します。

インスタントリカバリのスケジュールを追加する方法

- 1 [ポリシーの変更 (Change Policy)]ダイアログボックスで、[スケジュール (Schedules)]タブをクリックします。
- 2 [新規 (New)]をクリックします。
- 3 [スケジュール (Schedules)]ダイアログボックスで、1 つ以上の完全バックアップ形式のスケジュールを作成します。
- 4 [インスタントリカバリ (Instant Recovery)]グループから、次のオプションの 1 つを選択します。

スナップショットを作成し、さらにスナップショットをストレージユニットへコピー (Snapshots and copy snapshots to a storage unit)

スナップショットのみ作成 (Snapshots only)

このオプションは、次の場合に必要です。

- 差分バックアップ
- プライマリボリュームとスナップショットボリュームの両方が損傷した場合のディザスタリカバリ
- [個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)]が有効なインスタントリカバリのバックアップ

高速な一時バックアップの場合。

- 5 [OK]をクリックします。
- 6 このダイアログボックスを閉じるには、[OK]をクリックします。

Exchange インスタントリカバリポリシーのスケジュール設定

インスタントリカバリを設定したポリシーにスケジュールを追加する際は、[スケジュール (Schedules)]タブの次の設定に注意してください。

表 7-15 インスタントリカバリポリシーのスケジュールの設定

設定	オプション	説明
バックアップ形式 (Type of Backup)	[完全 (Full)]または [ユーザー (User)]	Exchange データベース、システムおよびログファイルが格納されているボリュームのスナップショットがとられます。
	[差分 (Differential)]または [累積増分 (Cumulative Incremental)]	Exchange システムおよびログファイルが格納されているボリュームのスナップショットがとられます。差分バックアップでは、トランザクションログをストレージユニットにバックアップして、インスタントリカバリのスナップショットボリュームに保持する必要があります。([スナップショットを作成し、さらにスナップショットをストレージユニットへコピー (Snapshots and copy snapshots to a storage unit)]オプションを選択します。) データベースを完全にリストアするには最後の完全バックアップ後のすべての差分バックアップが必要になるため、この構成が必要となります。差分バックアップではトランザクションログが切り捨てられるため、すべてのログファイルが存在することを保証する方法はありません。また、スナップショットのローテーションにより、1 つ以上のスナップショットイメージがスナップバックされているか、または削除されていることがあります。それらはストレージユニットにバックアップする必要があります。

設定	オプション	説明
保持 (Retention)	[1 週間 (1 week)] - [無制限 (infinity)]	保持レベルは、インスタントリカバリスナップショットを保持する最大時間を示します。完全バックアップの場合、リストア時に常に完全バックアップを利用できる保持レベルを選択してください。別のバックアップ用にスナップショットボリュームが必要な場合は、その時点より前のスナップショットが削除されることがあります。 p.116 の「Exchange インスタントリカバリボリュームのローテーション」を参照してください。
インスタントリカバリ (Instant Recovery)	スナップショットを作成し、さらにスナップショットをストレージユニットへコピー (Snapshots and copy snapshots to a storage unit)	メモ: [インスタントリカバリ (Instant Recovery)] オプションは、ポリシーの [属性 (Attributes)] タブで [インスタントリカバリ用または SLP 管理用にスナップショットを保持する (Retain snapshots for Instant Recovery or SLP management)] を選択した場合に使用できます。 NetBackup によって、ディスクスナップショットが作成され、ポリシーに指定したストレージユニットにクライアントのデータがバックアップされます。このオプションは、個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用してインスタントリカバリバックアップを実行する場合に必要です。 トランザクションログは、ストレージユニットへのバックアップ (完全または差分) が完了すると削除されます。
	スナップショットのみ作成 (Snapshots only)	イメージは、テープなどの他のストレージにバックアップされません。NetBackup によって、永続的なスナップショットだけが作成されます。この永続的なスナップショットは、従来のバックアップの代替とは見なされないことに注意してください。 このスケジュールオプションでは、トランザクションログは削除されません。トランザクションログを削除するには、ストレージユニットに対してバックアップを実行する必要があります。または、スナップショットのみである完全インスタントリカバリバックアップのログを削除するように、NetBackup を構成できます。 p.27 の「インスタントリカバリバックアップでの Exchange トランザクションログの切り捨てについて」を参照してください。

Exchange インスタントリカバリボリュームのローテーション

バックアップの開始時に、Snapshot Client に対して問い合わせが行われ、現在各ボリュームに存在するインスタントリカバリスナップショット数が確認されます。この情報は、バックアップ用に選択される Exchange データベースに必要です。構成したスナップショットの最大レベルと現在のスナップショット数が同じ場合、1 つのスナップショットが再同期化されます (またはスナップバックが削除が行われます)。これで、スナップショットをその後のバックアップに使用できます。

再同期化するスナップショットボリュームを決定するアルゴリズムでは、スナップショットが完全バックアップまたは増分バックアップのどちらで作成されたかが考慮されます。このアルゴリズムは、新しい増分バックアップを再同期化する必要がある場合でも、できるだけ多くの完全バックアップを保持しようとします。

インスタントリカバリを設定した Exchange ポリシーへのバックアップ対象の追加

各 Exchange データベースを 1 つのバックアップポリシーに含めることができます。または、1 つのデータベースを複数のポリシーに含めることもできます。後者の場合、データベースを含む各ポリシーの[最大スナップショット数 (Maximum Snapshots)]の値を満たすスナップショットボリュームを確保する必要があります。

Exchange スナップショットバックアップポリシーの構成では、Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥ または Microsoft Information Store:¥ だけが有効な指示句です (データベースは追加できます)。

手動バックアップの実行

環境のサーバーおよびクライアントを設定した後、手動バックアップで構成設定のテストを行うことができます。作成した自動バックアップスケジュールを手動バックアップで実行します。状態コードおよびその他のトラブルシューティング情報の説明が参照できます。

『[NetBackup 状態コードリファレンスガイド](#)』を参照してください。

『[NetBackup ログリファレンスガイド](#)』を参照してください。

メモ: 手動バックアップでは実際にバックアップが作成されます。Exchange ログは、必要に応じて切り捨てられます。

手動バックアップを実行する方法

- 1 マスターサーバーに管理者 (Windows) または root ユーザー (UNIX) としてログオンします。
- 2 NetBackup 管理コンソールを起動します。
- 3 左ペインで、[ポリシー (Policies)]をクリックします。
- 4 [すべてのポリシー (All Policies)]ペインで、テストするポリシーを選択します。
- 5 [処理 (Actions)]>[手動バックアップ (Manual Backup)]を選択します。
- 6 手動バックアップに使うスケジュールを選択します。
- 7 手動バックアップに含めるクライアントを選択します。
- 8 バックアップの状態を確認するには、NetBackup 管理コンソールで[アクティビティモニター (Activity Monitor)]をクリックします。

Exchange Server、メールボックス、パブリックフォルダのバックアップの実行

この章では以下の項目について説明しています。

- [Exchange サーバーデータのユーザー主導バックアップについて](#)
- [Exchange Server バックアップ操作のソースクライアントの選択について](#)
- [ユーザー主導 Exchange バックアップのオプション](#)
- [Exchange Server のユーザー主導スナップショットバックアップの実行](#)

Exchange サーバーデータのユーザー主導バックアップについて

NetBackup for Exchange を使用すると、ユーザー主導でスナップショットバックアップを実行できます。

p.120 の「[Exchange Server のユーザー主導スナップショットバックアップの実行](#)」を参照してください。

NetBackup for Exchange を使用してユーザー主導のメールボックスおよびパブリックフォルダのバックアップを実行することもできます。

Exchange Server バックアップ操作のソースクライアントの選択について

スタンドアロンサーバーまたは非仮想環境からバックアップまたはリストアする場合、特定のソースクライアントを選択または追加する必要はありません。ただし、Exchange クラスターまたは DAG 環境のバックアップを完了するには、仮想クライアントの名前を指定する必要があります。NetBackup 管理コンソールまたは Java ベースのバックアップ、アーカイブ、リストアクライアントを使う場合は、仮想クライアントの名前でログオンします。または、Windows ベースクライアントを使う場合は、[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)] ダイアログボックスで仮想クライアントの名前を選択します。

NetBackup、アーカイブ、リストアインターフェースで Exchange Server バックアップ操作のソースクライアントを選択するには (Windows)

- 1 NetBackup のバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを開きます。
- 2 [ファイル (File)]>[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]を選択します。
- 3 表 8-1 の記述に従って、ソースクライアントを選択してください。

表 8-1 Exchange Server バックアップ操作のソースクライアントの選択

バックアップを実行するには	[リストアのソースクライアント (またはバックアップに使用する仮想クライアント)(Source client for restores (or virtual client for backups))]での選択
Exchange DAG	DAG の名前。必要に応じて、リストに仮想名を追加し、選択します。

仮想クライアント名を使って NetBackup にログオンするには (Java)

- 1 NetBackup 管理コンソールまたはバックアップ、アーカイブ、リストアクライアントを開きます。
- 2 仮想クライアント名または仮想 DAG 名で NetBackup にログオンします。

表 8-2 の記述に従って、仮想名を選択してください。

表 8-2 NetBackup へのログオン時に使う仮想クライアント名

バックアップを実行するには	使用するログオン名
Exchange DAG	DAG の名前。

ユーザー主導 Exchange バックアップのオプション

表 8-3 バックアップオプション

オプション	説明
NetBackup サーバー (NetBackup server)	ドロップダウンメニューから別のサーバーを選択して、バックアップ操作を実行する NetBackup サーバーを変更できます。
バックアップ対象としてマークされた項目 (Items marked to be backed up)	バックアップの対象となるオブジェクトのリストが表示されます。
このバックアップまたはアーカイブと関連付けるキーワード句 (Keyword phrase to associate with the backup or archive)	このバックアップ操作で作成されるイメージと関連付けるキーワード句を、128 文字以内で指定します。後で、そのキーワード句を[バックアップの検索 (Search Backups)]ダイアログボックスで指定して、イメージのリストアを行うことができます。 空白 ([]) およびピリオド ([.]) を含むすべての印字可能な文字列を指定できます。デフォルトのキーワード句は、空 (null) 文字列です。
バックアップの開始 (Start Backup)	バックアップ操作を開始します。

Exchange Server のユーザー主導スナップショットバックアップの実行

ユーザー主導のスナップショットバックアップを実行するには、スナップショットバックアップ用に構成されたポリシーがサーバー内に存在する必要があります。また、このポリシーにはユーザースケジュールが含まれている必要があります。Exchange ユーザーは、データベース可用性グループ (DAG)、Information Store、またはデータベースのバックアップを作成できます。

バックアップポリシーで[個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)]が有効になっている場合は、個々のメールボックスおよびパブリックフォルダの項目をバックアップから後でリストアすることができます。

Exchange Server オブジェクトのユーザー主導のスナップショットバックアップを実行する方法

- バックアップ対象のすべてのデータベースをマウントします。
- バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを開きます。

DAG では、DAG の仮想名がアクティブ (オンライン) であるノードからユーザーバックアップ操作を開始する必要があります。

- 3 [処理 (Actions)]>[ポリシーおよびスケジュールの指定 (Specify Policy and Schedule)]をクリックします。
- 4 [バックアップポリシーおよびスケジュール (Backup Policy and Schedule)]ボックスに、Snapshot Client ポリシーの名前を入力します。
- 5 [ファイル (File)]>[バックアップするファイルおよびフォルダの選択 (Select Files and Folders to Back Up)]をクリックします。
- 6 [ファイル (File)]>[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]を選択します。
- 7 [NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]ダイアログボックスで、次の情報を入力します。
 - バックアップを実行するサーバー。
 - クラスタ環境では、仮想 Exchange Server 名または DAG 仮想名を指定します。

p.119 の「[Exchange Server バックアップ操作のソースクライアントの選択について](#)」を参照してください。

- 8 [すべてのフォルダ (All Folders)] ペインで、バックアップを行うオブジェクトを選択します。

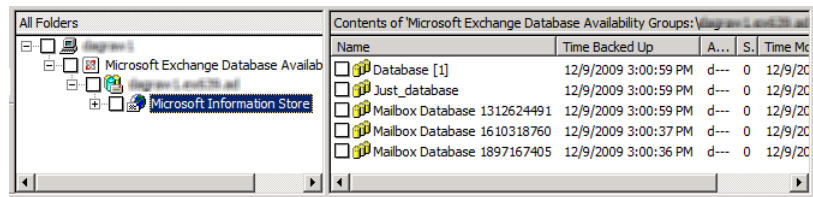
p.123 の 表 8-4 を参照してください。

DAG の場合、バックアップを実行するバックアップ、アーカイブおよびリストインターフェースで特定のサーバーを選択することはできません。特定のサーバーを使用する場合は、[優先サーバーリスト (Preferred server list)] で指定します。

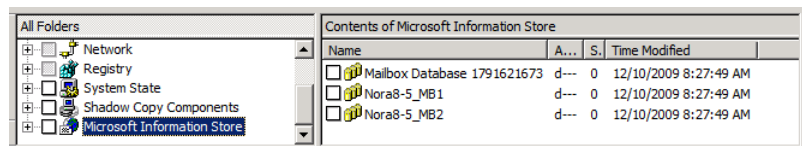
p.103 の「データベース可用性 (DAG) バックアップのバックアップソース」を参照してください。

DAG 内のすべてのデータベースは、それらが存在するサーバーに関係なく表示されます。

次の画像は、Exchange 2010 DAG のバックアップを示しています。



次の画像は、Exchange 2010 スタンドアロンサーバーのバックアップを示しています。



- 9 [処理 (Actions)] > [バックアップ (Backup)] をクリックします。
- 10 [バックアップ (Backup Files)] ダイアログボックスで、[バックアップの開始 (Start Backup)] を選択します。
- 11 バックアップの進捗状況を表示するには、[はい (Yes)] をクリックします。
バックアップの進捗状況を表示しない場合、[いいえ (No)] をクリックします。

表 8-4

ユーザー主導バックアップ用 Exchange データベースオブジェクトの
選択

Exchange のバージョン	ノード	バックアップを行うオブジェクト
Exchange DAG	Microsoft Exchange Database Availability Group	DAG DAG 内のすべてのデータベース
Exchange スタンドアロンサーバー	Microsoft Information Store	Microsoft Information Store すべてのデータベース

Exchange Server、メールボックス、パブリックフォルダのリストアの実行

この章では以下の項目について説明しています。

- [Exchange](#) サーバー主導リストアとリダイレクトリストアについて
- [Exchange](#) リストア操作の宛先クライアントの選択について
- [Exchange](#) データベースデータのリストアについて
- 既存の [Exchange Server](#) トランザクションログ
- [Exchange](#) スナップショットバックアップのリストアについて
- 個々の [Exchange](#) メールボックスおよび共有フォルダの項目のリストアについて

Exchange サーバー主導リストアとリダイレクトリストアについて

管理者は、バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを使用して、[Exchange Server](#) のバックアップを参照したり、リストアを行うバックアップを選択することができます。このインターフェースを使うと、バックアップ元のクライアントのバックアップイメージを表示する権限のあるすべての [NetBackup](#) サーバーまたは [NetBackup](#) クライアントからリストアを実行できます。次の形式のリストアが利用可能です。

- サーバー主導
- 代替クライアントへのリダイレクトリストア
- 異なるターゲットまたはデータベースの場所へのリダイレクトリストア

サーバー主導リストアを使うと、管理者は Exchange Server データベースを参照して、リストアするファイルを選択することができます。NetBackup は、ファイルのリストア元の NetBackup サーバーの選択、バックアップ履歴の表示、リストアする項目の選択を可能にします。特定のクライアントや、選択した NetBackup サーバーによってバックアップされた他のクライアントを選択できます。

代替クライアントにリダイレクトするときは、元々バックアップされたもの以外の Exchange クライアントにリストアできます。Exchange データベース、ディレクトリ、またはメールボックスのオブジェクトをリダイレクトできます。管理者は、(どのクライアントがバックアップしたかにかかわらず) 任意の NetBackup for Exchange クライアントにリダイレクトリストアを行うことができます。リダイレクトリストアを実行するために、管理者はマスターサーバー上の NetBackup 管理コンソールまたはリモート管理コンソールを使用できます。

この形式のリダイレクトリストアに必要な構成については、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

異なるターゲットまたはデータベースの場所へのリダイレクトリストアは、ユーザーが、メールボックスオブジェクトまたはパブリックフォルダオブジェクトを、オブジェクトのバックアップ元とは異なるターゲットまたはデータベースの場所にリストアすることを可能にします。Exchange のバージョンとバックアップの形式に応じて、データベースオブジェクトは次へリダイレクトできます。

- Exchange リカバリデータベース (RDB)
- 別のデータベース

Exchange リストア操作の宛先クライアントの選択について

Exchange バックアップのリストアを実行するとき、バックアップをリストアするための他の宛先クライアントを選択できます。(この操作は代替クライアントへのリダイレクトリストアと呼ばれます。) バックアップされたほぼすべての Exchange オブジェクトは、代替クライアントにリダイレクトリストアを行うことができます。Exchange インフォメーションストアデータベースは、別の Exchange Server にリストアできます。

Exchange オブジェクトをリダイレクトするときの必要条件

データベースのリダイレクトリストアを行うには、次の要件を満たしている必要があります。

- NetBackup サーバーの権限を持っているか、または NetBackup 管理コンソールまたは NetBackup リモート管理コンソールを使用してサーバーにログインする必要があります。
- データベースがターゲットサーバー上に存在している必要があります。
- リダイレクトされたリストアを NetBackup クライアントから開始する場合は、宛先クライアントが、リストア元クライアントからリストアを実行するための権限を持っている必要があります。

あります。リダイレクトリストアに必要な設定については、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』を参照してください。

- 次の状況では、クライアントに同じバージョンの **Windows** があることが要求されます。
 - 代替クライアントへのリダイレクトリストアを行う場合
 - バックアップイメージを参照する際にソースクライアント以外の宛先クライアントを選択する場合

宛先クライアントの選択

代替クライアントの名前を指定するには、[ファイル (File)]>[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]を選択します。必要なクライアントが宛先クライアントのリストに表示されない場合は、リストにクライアントを追加できます。

非クラスタ環境で、バックアップを実行した元のクライアントにリストアを実行する場合には、宛先クライアントを変更する必要はありません。クラスタ環境では、宛先クライアントが仮想サーバーの名前であることを確認する必要があります。クラスタに **NetBackup** クライアントのみがインストールされている場合は、宛先クライアントの値を変更できないことがあります。この場合は、**NetBackup** サーバーでバックアップ、アーカイブ、リストアの各インターフェースを使って、宛先クライアントの値を仮想サーバー名に変更します。

[表 9-1](#) の記述に従って、宛先クライアントを選択してください。

表 9-1 Exchange Server リストア操作の宛先クライアント

リストア対象	宛先クライアントに選択する項目
同じ DAG の別のデータベース	ソースクライアントと同じ宛先クライアント。 NetBackup はデータベースのアクティブなコピーを提供するサーバーにリストアをリダイレクトします。
異なる DAG の別のデータベース	ターゲットデータベースが存在する DAG の名前。 NetBackup はデータベースのアクティブなコピーを提供するサーバーにリストアをリダイレクトします。
DAG の RDB	DAG の名前
スタンドアロンサーバーの RDB	スタンドアロンサーバーの名前
バックアップを実行した元のクライアント	クライアントを変更する必要はありません。
別のクライアント	リストから必要なクライアントを選択します。必要に応じて、最初にリストにクライアント名を追加します。

リストア対象	宛先クライアントに選択する項目
クラスター環境	仮想クライアントの名前
DAG ノード	ノードの名前 p.87 の「クライアントリストの物理ノード名の使用」を参照してください。
特定のメールボックスサーバー	サーバーの名前

Exchange データベースデータのリストアについて

Exchange Server のリストアを実行する前に、次の情報を確認してください。

- NetBackup for Exchange エージェントは、バックアップが最初に作成されたときと同じ Microsoft Service Pack (SP) または累積更新プログラム (CU) へのリストアをサポートします。Microsoft 社は SP や CU のデータベーススキーマに変更を加えることがあります。異なるレベルの SP または CU にリストアすると、データベースサーバーが正しく動作しないことがあります。
- 管理者は、個々のデータベースまたはトランザクションログのリストアを行う場合、Exchange Server のデータベース、トランザクションログおよびユーティリティの知識を習得している必要があります。正しいファイルがリストアされない場合、データベースはマウントに失敗します。
- それらをリストアする前に、データベースをマウント解除する必要があります。
- 完全および増分バックアップをリストアするには、次のいずれかの方法を実行します。
 - 一度の操作ですべてのバックアップをリストアする。
バックアップイメージは同じ形式である必要があります。たとえば、完全なスナップショットと完全な VMware バックアップはそれぞれ個別のリストアジョブでリストアする必要があります。ただし、1 つのリストアジョブで完全 VMware バックアップと差分スナップショットをリストアできます。
すべてのバックアップを一度の操作でリストアする場合、最後の増分バックアップのリストア後にコミットが行われます。
 - 完全バックアップと増分バックアップを個別にリストアする。
バックアップを個別にリストアするときに、完全バックアップとすべてで最後の増分バックアップセットのために[前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)]を選択解除します。最後の増分バックアップセットをリストアするときに、次のオプションを選択します。[前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)]および[リストア後にデータベースをマウントする (Mount database after restore)]にチェックマークを付けます。

- リストアジョブに失敗した場合、一時的な格納場所 (サブディレクトリを含む) を調べ、以前のリストアジョブのログファイルが削除されていることを確認してください。
NetBackup により、Exchange 作業ディレクトリにログがコピーされます。データベースがリストアされると、Exchange により、一時的な格納場所のログファイルがデータベースに適用され、その後現在のログファイルが適用されます。リカバリが完了すると、Exchange により、ログファイルは一時的な格納場所から削除されます。
- Exchange Server ファイルのリストアを行うと、常に既存のファイルが上書きされます。(たとえば、Pub.edb がターゲットサーバー上にすでに存在している場合、そのファイルはバックアップのコピーによって上書きされます。)
- 既存のトランザクションログの情報を確認します。
p.128 の「既存の Exchange Server トランザクションログ」を参照してください。

既存の Exchange Server トランザクションログ

実行するデータリカバリの手順に応じて、既存のトランザクションログを考慮する必要があります。

たとえば、次のいずれかの作業を実行します。

- ロールフォワードリカバリ (すべてのログファイルをリプレイ)
ファイルのリストアの実行後、サービスを起動すると、リストアを行ったログ内のトランザクションが Exchange によってコミットされます。一番大きい番号が付いているリストア済みのログ以降の連続するログがサーバー上に存在する場合、それらのトランザクションもコミットされます。ログ名の番号が連続していない場合、不連続となったものより後のトランザクションはコミットされません。
この手順は、トランザクションログは破損していないものの、データベースのリストアの実行が必要な場合に効率的です。既存のトランザクションログを保存しておく、Exchange Server で失敗した時点へのリカバリを行うことができます。保存しない場合、最後の完全バックアップまたは最後の増分バックアップの時点にリカバリする必要があります。
- 指定した時点へのリカバリ (リストア済みのログファイルのみをリプレイ)
最後のバックアップの時点までのリストアのみを行う場合は、このオプションを使用します。最後のバックアップ以降に作成されたトランザクションログはデータベースのリカバリに含まれません。スナップショットのリストアでは、NetBackup は現在のログファイルを削除します。

Exchange スナップショットバックアップのリストアについて

スナップショットバックアップから、Microsoft Information Store または Exchange データベースをリストアできます。バックアップに対して個別リカバリテクノロジー (GRT) を有効

にした場合、バックアップからメールボックスおよびパブリックフォルダの項目もリストアすることができます。

p.143 の「[個々の Exchange メールボックスおよび共有フォルダの項目のリストアについて](#)」を参照してください。

スナップショットバックアップをリストアする場合、次のことに注意してください。

- リストアの対象として選択するイメージはすべて、スナップショットバックアップのイメージである必要があります。
- **Exchange** では、リカバリデータベース (RDB) にリストアできます。
- インスタントリカバリリストアの場合:
ボリュームのロールバックを実行する場合でも、[通常バックアップ (Normal Backup)] を選択します。**NetBackup** は、適切である時はいつでも、自動的にボリュームをロールバックします。

次のいずれかが実行されます。
 - **NetBackup** は、スナップショットから元のボリュームに、選択したデータベースのボリュームをスナップバック (再同期化) します。
 - **NetBackup** は、スナップショットボリュームから元のボリュームに、選択したデータベースのファイルのコピーを戻します。

Exchange スナップショットのリストアオプション

次のリストアオプションはスナップショットのリストアを実行するときに利用可能です。

表 9-2 スナップショットのリストアオプション

オプション	説明
ロールフォワードリカバリ (すべてのログファイルをリプレイ) (Roll-Forward Recovery (Replay all log files))	既存のトランザクションログを保持します。 Exchange により、リストア操作の一部であるトランザクションログがリプレイされ、その後、現在存在するトランザクションログがリプレイされます。 p.128 の「 既存の Exchange Server トランザクションログ 」を参照してください。
指定した時点へのリカバリ (リストア済みのログファイルのみをリプレイ) (Point-in-Time Recovery (Replay only restored log files))	データベースをリストアし、バックアップ時に存在したトランザクションログだけを上書きします。 リストアに完全バックアップおよび 1 つ以上の増分バックアップが必要な場合があります。この場合、すべてのイメージを選択して、1 つのジョブでリストアを実行できます。また、各バックアップイメージを別々にリストアすることができます。後者の場合、最初のジョブには[指定した時点へのリカバリ (Point-in-Time Recovery)]のみを有効にします。それ以外の場合、各々の指定した時点のリカバリにより、先行するリストアジョブからトランザクションログが削除されます。

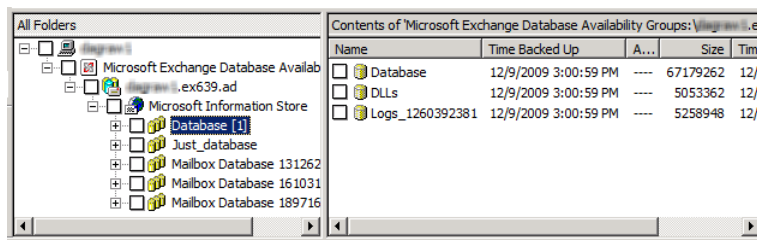
オプション	説明
ログファイルを一時的に配置する場所 (Temporary location for log files)	スナップショットリストアでは使用できません。
リストアの前にデータベースをマウント解除する (Dismount database prior to restore)	リストアが開始される前にデータベースをマウント解除します。デフォルトでは、このオプションは選択されていません。 このオプションによって[復元時はこのデータベースを上書きする (Database can be overwritten by a restore)]フラグも設定されます。 メモ: このオプションは慎重に使用してください。このオプションでマウント解除を選択する前に、リストア対象として正しいデータベースが選択されていることを確認してください。
前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)	このオプションは、複数ジョブのリストアの最後のジョブにだけ設定してください。このオプションを使用すると、リストア操作によって、すべてのログファイルを再生して、すべての未完了のトランザクションをロールバックすることが可能になります。このオプションを選択しない場合、リストア後にデータベースを手動でマウントする必要があります。 中間バックアップの適用時に[前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)]を選択した場合、バックアップのリストアを続行できません。この場合、リストア操作を最初からやりなおす必要があります。
リストア後にデータベースをマウントする (Mount database after restore)	[前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)]が有効な場合、[リストア後にデータベースをマウントする (Mount database after restore)]が自動的に選択されます。それ以外の場合、このオプションは無効に設定されます。
リストアの開始 (Start Restore)	リストア操作を開始します。

データベース可用性グループ (DAG) のスナップショットリストアの実行

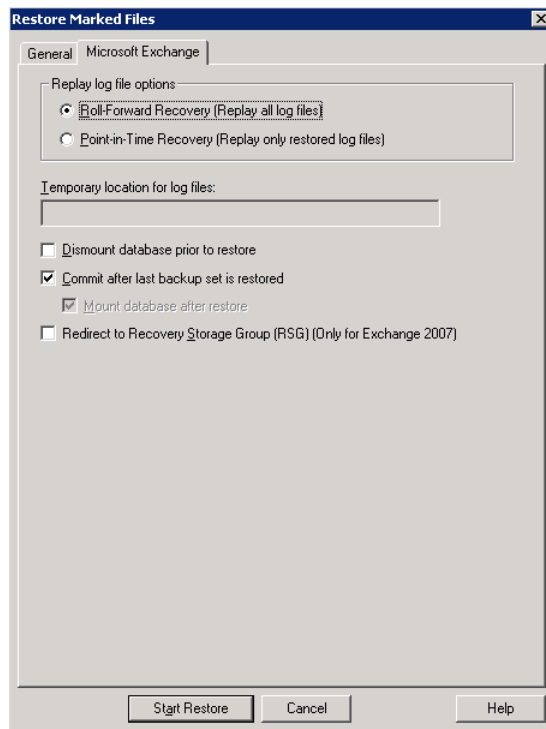
データベース可用性グループ (DAG) のスナップショットリストアを実行する方法

- レプリケーションを手動で一時停止します。この手順は、使用する任意のスナップショットプロバイダに適用されます。
<http://technet.microsoft.com/en-us/library/dd298159.aspx>
- リストアするすべての Exchange データベースのマウントを解除します。
または、リストアを実行するときに[リストアの前にデータベースをマウント解除する (Dismount database prior to restore)]オプションをクリックします。
- バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを開きます。
- [ファイル (File)]>[リストアするファイルおよびフォルダの選択 (Select Files and Folders to Restore)]>[通常バックアップからリストア (from Normal Backup)]をクリックします。

- 5 [ファイル (File)]>[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]を選択します。
- 6 [NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]ダイアログボックスで、次の情報を入力します。
 - リストアを実行したサーバー。
 - ソースクライアントには、DAG の仮想名を選択します。
p.119 の「[Exchange Server バックアップ操作のソースクライアントの選択について](#)」を参照してください。
 - ポリシー形式には、[ポリシー (MS-Exchange-Server)]を選択します。
- 7 [NetBackup の履歴 (NetBackup History)]ペインで、リストアするオブジェクトが含まれているバックアップイメージをクリックします。
 - 最後の完全バックアップまたはユーザー主導バックアップ
 - 最後の完全バックアップおよびそれ以降のすべての差分増分バックアップ
 - 最後の完全バックアップおよび最後の累積増分バックアップ
- 8 [すべてのフォルダ (All Folders)]ペインで、リストアを行うオブジェクトを選択します。
 - VMware ポリシーからのリストアの場合、Exchange データベースはノード [Microsoft Exchange Database Availability Groups]の下に表示されます。次のオブジェクトをリストアできます。
 - データベース可用性グループ。
[Microsoft Exchange Database Availability Groups]を展開し、[DAG_Name]を選択します。このオブジェクトを選択すると、NetBackup によってすべてのデータベースがリストアされます。
 - データベース。
[Microsoft Exchange Database Availability Group]>[DAG_Name]>[Microsoft Information Store]の順に展開します。その後、リストアするデータベースおよびログファイルを選択します。



- Exchange ポリシーからのリストアからの場合、Exchange データベースはノード [Microsoft Information Store] の下に表示されます。次のオブジェクトをリストアできます。
 - Microsoft インフォメーションストア。
[Microsoft Information Store] の隣のチェックボックスにチェックマークを付けます。
 - データベース。
[Microsoft Information Store] を選択します。その後、リストアするデータベースおよびログファイルを選択します。
- 9 [処理 (Actions)] > [リストア (Restore)] をクリックします。
- 10 [Microsoft Exchange] タブをクリックします。
- p.129 の「[Exchange スナップショットのリストアオプション](#)」を参照してください。



- 11 [リストアの開始 (Start Restore)]をクリックします。
バックアップされたデータベースに関係なく、アクティブな Exchange データベースにリストアが実行されます。NetBackup により、アクティブな Exchange データベースを現在含んでいる Exchange Server が自動的に検出されます。
- 12 リストアが完了したら、レプリケーションを再開します。
- 13 必要に応じて、メールボックスデータベースコピーを更新します。
<http://technet.microsoft.com/en-us/library/dd351100.aspx>

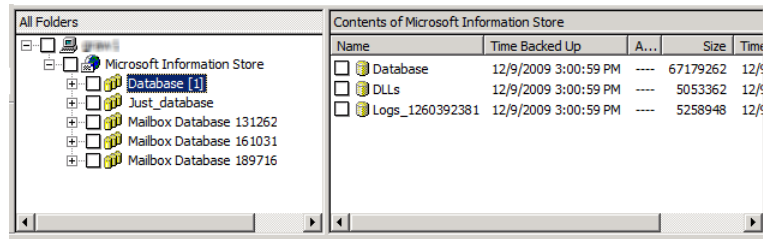
Exchange スタンドアロンサーバーのスナップショットリストアの実行

Exchange スタンドアロンサーバーのスナップショットリストアを実行する方法

- 1 リストアするすべての Exchange データベースのマウントを解除します。
または、リストアを実行するときに[リストアの前にデータベースをマウント解除する (Dismount database prior to restore)]オプションをクリックします。
- 2 バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを開きます。
- 3 [ファイル (File)]>[リストアするファイルおよびフォルダの選択 (Select Files and Folders to Restore)]>[通常バックアップからリストア (from Normal Backup)]をクリックします。
- 4 [ファイル (File)]>[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]を選択します。
- 5 [NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]ダイアログボックスで、次の情報を入力します。
 - リストアを実行したサーバー。
 - ポリシー形式には、[ポリシー (MS-Exchange-Server)]を選択します。
- 6 [NetBackup の履歴 (NetBackup History)]ペインで、リストアするオブジェクトが含まれているバックアップイメージをクリックします。
 - 最後の完全バックアップまたはユーザー主導バックアップ
 - 最後の完全バックアップおよびそれ以降のすべての差分増分バックアップ
 - 最後の完全バックアップおよび最後の累積増分バックアップ
- 7 [すべてのフォルダ (All Folders)]ペインで、次のように、リストアするオブジェクトを選択します。
 - Microsoft インフォメーションストア。
コンピュータ名または[Microsoft Information Store]の横のチェックボックスをクリックします。
 - データベース。

[Microsoft Information Store]ノードを展開します。その後、リストアするデータベースおよびログファイルを選択します。

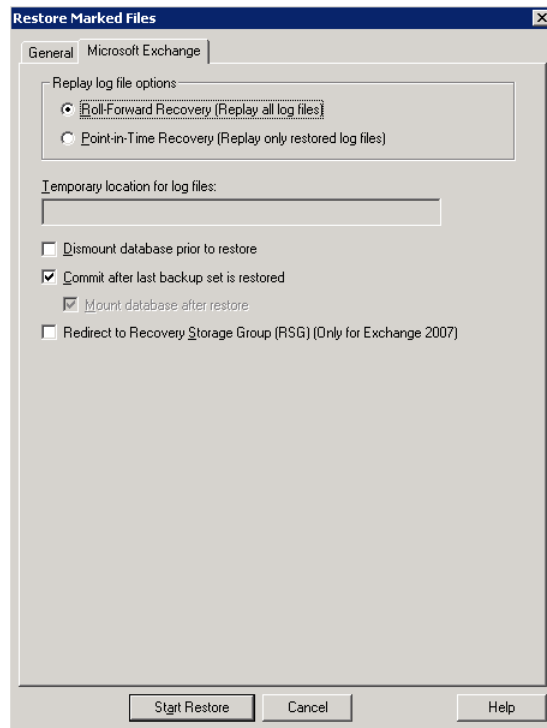
次の図は、Exchange 2010 のリストアを示しています。



8 [処理 (Actions)]>[リストア (Restore)]をクリックします。

9 [Microsoft Exchange]タブをクリックします。

p.129 の「Exchange スナップショットのリストアオプション」を参照してください。



10 [リストアの開始 (Start Restore)]をクリックします。

別のデータベースまたはリカバリデータベース (RDB) へのデータベース可用性グループ (DAG) スナップショットバックアップのリダイレクト

Exchange スナップショットバックアップを別のデータベースまたはリカバリデータベースにリダイレクトする方法

- 1 次の手順はレプリケーションの一時停止に適用されます。
 - 別のデータベースにリダイレクトする場合は、レプリケーションを手動で一時停止します。この手順は、使用する任意のスナップショットプロバイダに適用されます。
 - RDB にリダイレクトする場合、**NetBackup** はターゲットサーバー上でレプリケーションを一時停止します。

<http://technet.microsoft.com/en-us/library/dd298159.aspx>

- 2 データベースまたはリカバリデータベースが、すでに存在する必要があります。

RDB にリストアするには、必要に応じて、**Exchange Server** 上で RDB を作成します。RDB はマウントしないままにします。
- 3 バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを開きます。
- 4 [ファイル (File)]>[リストアするファイルおよびフォルダの選択 (Select Files and Folders to Restore)]>[通常バックアップからリストア (from Normal Backup)]をクリックします。
- 5 [ファイル (File)]>[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]をクリックします。

6 [NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]ダイアログボックスで、次の情報を入力します。

バックアップおよびリストアに使用 リストアを実行したサーバーを選択します。

使用するサーバー (Server to use for backups and restores)

リストアのソースクライアント (Source client for restores) 仮想 DAG 名を選択します。

リストアの宛先クライアント (Destination clients for restores) 同じ DAG 内の別のデータベースをリストアするには、宛先クライアントをソースクライアントと同じままにしておきます。NetBackup はデータベースのアクティブなコピーを提供するサーバーにリストアをリダイレクトします。

別の DAG にリダイレクトリストアするには、そのデータベースが存在する DAG の名前を指定します。特定のメールボックスサーバーにリストアするには、そのサーバー名を入力します。RDB にリストアするには、DAG の名前を指定します。RDB がスタンドアロンサーバーに存在する場合は、宛先クライアントとしてそのサーバー名を指定します。

異なるクライアントへのリダイレクトについての注意事項と制限事項を確認してください (該当する場合)。

p.125 の「[Exchange リストア操作の宛先クライアントの選択について](#)」を参照してください。

リストアのポリシー形式 (Policy type for restores) MS-Exchange-Server を選択します。

7 [NetBackup の履歴 (NetBackup History)]ペインで、次のいずれかを選択します。

- 最後の完全バックアップ
- 最後の完全バックアップおよび後続のすべての差分増分バックアップ
- 最後の完全バックアップおよび最後の累積増分バックアップ

8 [すべてのフォルダ (All Folders)]ペインで、[Microsoft Exchange Database Availability Groups]>[Forest or domain name]を展開します。

9 リストアを行うデータベースを選択します。

10 [処理 (Actions)]>[リストア (Restore)]をクリックします。

11 別のデータベースまたは RDB に宛先パスを変更します。

- [一般 (General)]タブをクリックします。
- [すべてを異なる位置にリストア (既存の構造を維持) (Restore everything to a different location (maintaining existing structure))]を選択します。

- [宛先 (Destination)] フィールドに、リストア先の代替データベースの名前を入力します。または、以前に作成した RDB の名前を入力します。

Exchange では、RDB が存在しても、自動的にデータベースを RDB にリダイレクトしません。

Restore Marked Files

General | Microsoft Exchange

Restore Destination Choices

☐ Restore everything to its original location

☒ Restore everything to a different location (maintaining existing structure)

Destination:

Groups\dagname\Microsoft Information Store\DestinationDatabase\ Browse...

☐ Restore individual folders and files to different locations (double-click to modify)

Source

Microsoft Exchange Database Availability Groups\dagname\Microsoft Information Store

☐ Create and restore to a new virtual hard disk file

Destination for virtual hard disk file:

Properties

Restore Options

☐ Restore without access-control attributes (Windows clients only)

☐ Skip verification and force rollback

☐ Force rollback even if it destroys later snapshots

If the destination file already exists:

☒ Overwrite existing files

☐ Restore the file using a temporary filename

☐ Do not restore the file

☐ Override default job priority

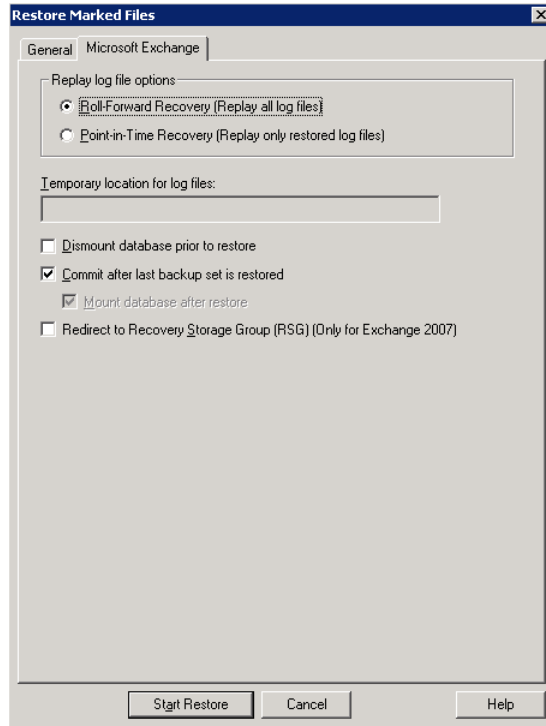
job priority: 90000

(Higher number is greater priority)

Start Restore Cancel Help

12 [Microsoft Exchange] タブをクリックします。

p.129 の「Exchange スナップショットのリストアオプション」を参照してください。



13 [前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)] にチェックマークを付けます。

バックアップイメージを個別にリストアする場合は、最後の増分バックアップセットをリストアするときのみ、[前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)] にチェックマークを付ける必要があります。

[前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)] を選択しない場合は、リストアの完了後にデータベースを手動でマウントします。

p.143 の「リストア後の Exchange データベースの手動でのマウント」を参照してください。

- 14 [リストアの開始 (Start Restore)]をクリックします。

バックアップされたデータベースに関係なく、アクティブな Exchange データベースにリストアが実行されます。NetBackup により、アクティブな Exchange データベースを現在含んでいる Exchange Server が自動的に検出されます。

- 15 リストアが完了したら、レプリケーションを再開します。
- 16 必要に応じて、メールボックスデータベースコピーを更新します。

<http://technet.microsoft.com/en-us/library/dd351100.aspx>

別のデータベースまたはリカバリデータベース (RDB) への Exchange スタンドアロンサーバースナップショットバックアップのリダイレクト

この項では、別のデータベースまたはリカバリデータベース (RDB) に Exchange スタンドアロンサーバーのスナップショットバックアップをリダイレクトする方法について説明します。

リカバリデータベースに Exchange スタンドアロンサーバースナップショットバックアップをリダイレクトする方法

- 1 データベースまたはリカバリデータベースが、すでに存在する必要があります。
RDB にリストアするには、必要に応じて、Exchange Server 上で RDB を作成します。RDB はマウントしないままにします。
- 2 バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを開きます。
- 3 [ファイル (File)]>[リストアするファイルおよびフォルダの選択 (Select Files and Folders to Restore)]>[通常バックアップからリストア (from Normal Backup)]をクリックします。
- 4 [ファイル (File)]>[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]をクリックします。

5 [NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)] ダイアログボックスで、次の情報を入力します。

バックアップおよびリストアに使用 リストアを実行したサーバーを選択します。

用するサーバー (Server to use
for backups and restores)

リストアの宛先クライアント
(Destination clients for
restores)

別のサーバー上の RDB にリストアするには、その RDB をホスティングする Exchange Server に宛先クライアントを変更します。このクライアントは、リダイレクトリストアの宛先となるデータベースをホスティングする Exchange Server である必要があります。異なるクライアントへのリダイレクトについての注意事項と制限事項も確認してください。

p.125 の「[Exchange リストア操作の宛先クライアントの選択について](#)」を参照してください。

RDB またはローカルサーバーのデータベースにリストアするには、宛先クライアントをソースクライアントと同じままにします。

リストアのポリシー形式 (Policy type for restores) MS-Exchange-Server を選択します。

6 [NetBackup の履歴 (NetBackup History)] ペインで、次のいずれかを選択します。

- 最後の完全バックアップ
- 最後の完全バックアップおよび後続のすべての差分増分バックアップ
- 最後の完全バックアップおよび最後の累積増分バックアップ

7 [すべてのフォルダ (All Folders)] ペインで、[Microsoft Information Store] を展開します。

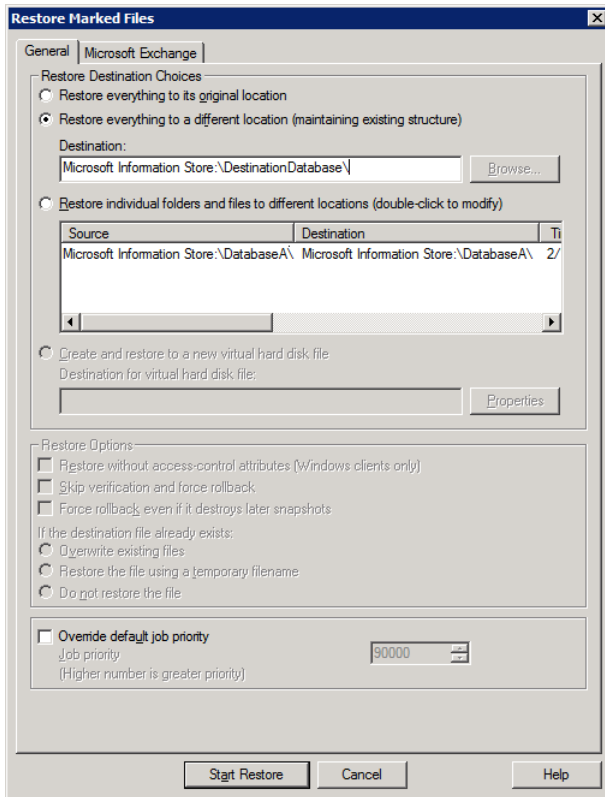
8 リストアを行うデータベースを選択します。

9 [処理 (Actions)] > [リストア (Restore)] をクリックします。

10 [マークされたファイルのリストア (Restore Marked Files)] ダイアログボックスで、[全般 (General)] タブをクリックします。

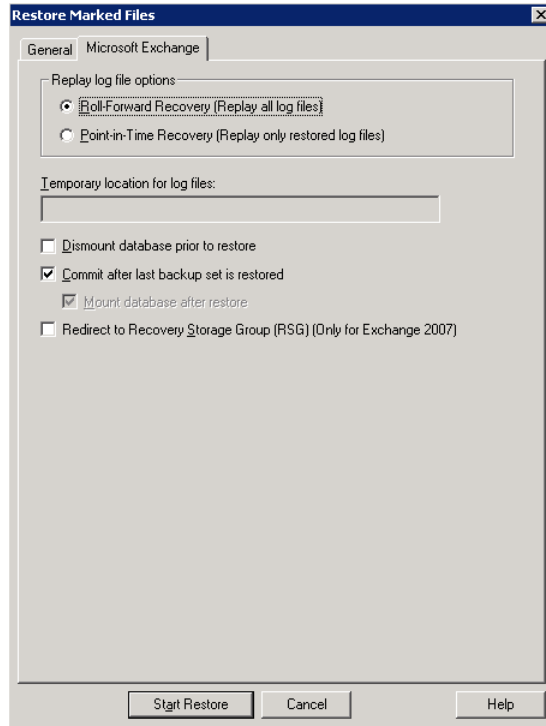
11 別のデータベースまたは RDB に宛先パスを変更します。

- [すべてを異なる位置にリストア (既存の構造を維持) (Restore everything to a different location (maintaining existing structure))] を選択します。
- [宛先 (Destination)] フィールドに、リストア先の代替データベースの名前を入力します。または、以前に作成した RDB の名前を入力します。
Exchange では、RDB が存在しても、自動的にデータベースを RDB にリダイレクトしません。



- 12 [Microsoft Exchange] タブをクリックします。

p.129 の「[Exchange スナップショットのリストアオプション](#)」を参照してください。



- 13 [前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)] にチェックマークを付けます。

バックアップイメージを個別にリストアする場合は、最後の増分バックアップセットをリストアするときのみ、[前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)] にチェックマークを付ける必要があります。

[前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)] を選択しない場合は、リストアの完了後にデータベースを手動でマウントします。

p.143 の「[リストア後の Exchange データベースの手動でのマウント](#)」を参照してください。

- 14 [リストアの開始 (Start Restore)] をクリックします。

リストア後の Exchange データベースの手動でのマウント

[前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored)]をクリックしなかった場合は、リストアの完了後に、データベースを手動でマウントする必要があります。

リストア後にデータベースを手動でマウントする方法

- 1 リストアを行ったすべてのデータベースをマウントします。
- 2 マウントが失敗した場合は、Exchange データベースの簡単なリカバリ (一致しないデータベース添付ファイルを無視するリカバリ) を試行して、データベースの一貫性が保たれている状態にします。

```
eseutil /r E0n /i
```

- 3 データベースを再マウントします。

個々の Exchange メールボックスおよび共有フォルダの項目のリストアについて

個別リカバリテクノロジー (GRT) が有効なバックアップからは、個々のメールボックスまたは共有フォルダの項目 (フォルダ、メッセージ、文書) をリストアできます。次の項を参照してください。

p.143 の「Exchange メールボックスフォルダおよびメッセージの件名の特殊文字」を参照してください。

p.144 の「Exchange の個々のメールボックス、メールボックスフォルダ、パブリックフォルダまたはメッセージのリストアを実行するための前提条件および操作上の注意事項」を参照してください。

Exchange メールボックスフォルダおよびメッセージの件名の特殊文字

オブジェクトはファイルパス構文を使用して処理されるので、NetBackup では、メールボックスフォルダ名およびメッセージの件名のスラッシュおよび円記号に対してエスケープシーケンスが使用されます。波形符 (~) 文字はエスケープ文字であるため、これもエスケープされる必要があります。

リストアする項目を参照すると、エスケープ処理された文字シーケンスが表示されます。表 9-3 を使用して、変換された文字を、リストアされた項目に表示される文字に変換します。

表 9-3 メールボックスフォルダおよびメッセージの件名の特殊文字の変換

文字	変換後
~	~0
/	~1
¥	~2

Exchange の個々のメールボックス、メールボックスフォルダ、パブリックフォルダまたはメッセージのリストアを実行するための前提条件および操作上の注意事項

個々のメールボックス、メールボックスフォルダ、パブリックフォルダまたはメッセージをリストアする前に、次の情報を確認します。

- メールボックスのリストアを正常に行うには、宛先メールボックスが存在している必要があります。
- メールボックスのメッセージまたはパブリックフォルダの文書をリストアする際、[既存のメッセージの上書き (Overwrite existing message(s))]
オプションを使用すると、元のオブジェクトの内容とプロパティが上書きされます。メッセージは、メッセージが存在する場所に関係なく上書きされます。(たとえば、メッセージが Deleted Items フォルダに移動された場合も上書きされます。)元のメッセージが存在しない場合、同じ内容とプロパティで新しいメッセージが生成されます。新しい宛先の場所が入力されると、新しいメッセージも生成されます。

[メッセージをリストアしない (Do not restore the message(s))]
オプションを選択すると、NetBackup は、現在の場所に関係なく、存在するメッセージのリストアをスキップします。

元のメッセージが存在しない場合、リストアを実行するたびにメッセージのリストアによって新しいコピーが生成されることに注意してください。メッセージのリストアされたコピーは、存在の確認では元のメッセージとして見なされません。

- GRT を使うリストアはディスクストレージユニットから行う必要があります。テープコピーからのリストアは実行できません。
- NetBackup では、ユーザーのオンラインアーカイブメールボックスをバックアップできます。ただし、GRT を使用した、バックアップからのリストアでは、デフォルトで項目をユーザーのメールボックスにリストアし、アーカイブメールボックスにはリストアしません。項目のリストアは、メールボックス階層のルートから開始されます。または、パス Top of Information Store¥Inbox¥Archives¥ にリストアをリダイレクトすることもできます。
- Exchange Server には、完全に削除した項目を一定期間保持する機能があります。削除された項目はまだ存在しているため、NetBackup によって作成されたバックアップ

ブイメーじには削除された項目も含まれます。**NetBackup** では、個別のバックアップイメーじを参照した際に、これらの削除された項目が表示され、リストアすることができ
ます。

- **NetBackup** はマルチテナントの **Exchange** 環境でテナントのメールボックスへのメールボックス項目のリストアをサポートしません。テナントのメールボックスに関する項目をリカバリするには、非テナントのメールボックスにリカバリをリダイレクトしてください。

Exchange Server メールボックスオブジェクトまたは共有フォルダオブジェクトのリストアのオプション

メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトのリストア時に、**NetBackup** はデータベースにすでに存在するメッセージを検出することがあります。**NetBackup** が既存のオブジェクトを置換するかどうかを示すために、[表 9-4](#) からオプションを 1 つ選択します。

メモ: リダイレクトリストアの場合、これらのオプションは無視されます。

表 9-4 Exchange Server メールボックスオブジェクト【≡または≡】共有フォルダオブジェクトのリストアのリストアオプション

オプション	説明
メッセージをリストアしない (Do not restore the message(s))	メールボックスメッセージがすでに存在する場合、メッセージをリストアしません。
メッセージを上書き (Overwrite the message)	バックアップからのものと既存のメッセージを置換します。

Exchange メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトのリストア

メールボックスのオブジェクトを異なる場所へリストアするには、別の手順を実行します。

p.148 の「[Exchange メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトの代替パスへのリダイレクトリストア](#)」を参照してください。

メモ: 個別リカバリテクノロジーを使用したバックアップは、個別でないバックアップイメーじに比べて参照時間が長くなる可能性があります。メディアサーバーはこの時点で個別情報を収集するため、待機時間が異なります。メディアサーバーの負荷に応じて、[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)] 値を大きくする必要がある場合があります。このオプションは、[タイムアウト (Timeouts)] タブのクライアントホストプロパティに存在します。

メモ: 個別リカバリテクノロジーを使用するバックアップと使用しないバックアップを同じリストアジョブでリストアしないでください。

メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトをリストアする方法

- 1 サーバーに管理者としてログオンします。
- 2 バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを開きます。
- 3 [ファイル (File)]>[リストアするファイルおよびフォルダの選択 (Select Files and Folders to Restore)]>[通常バックアップからリストア (from Normal Backup)]をクリックします。
- 4 [ファイル (File)]>[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]をクリックします。
- 5 [NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]ダイアログボックスで、サーバーとポリシー形式を選択します。
- 6 [NetBackup の履歴 (NetBackup History)]ペインで、リストアを行うオブジェクトが含まれているイメージをクリックします。

Veritas は個々の項目をリストアする際には一度に 1 つのバックアップイメージセットを選択することをお勧めします。この推奨事項は制限ではなく、より多くのメッセージのコピーを一度にリストアできる場合もあります。

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用したスナップショット増分バックアップから個々の項目をリストアすることはできません。

次のいずれかを選択します。

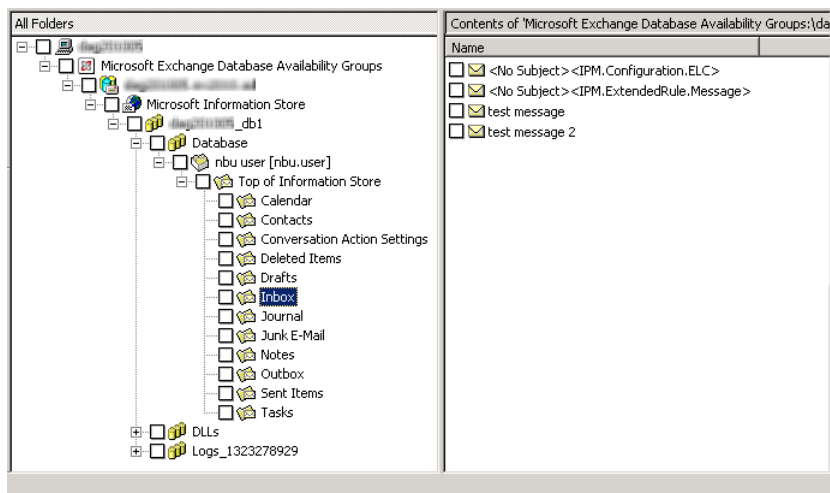
- 最後の完全バックアップ
- 最後の完全バックアップおよびそれ以降のすべての差分増分バックアップ
- 最後の完全バックアップおよび最後の累積増分バックアップ

- 7 次のいずれかを展開します。
 - [Microsoft Exchange Database Availability Groups]>[Forest or Domain]>[Microsoft Information Store]>[Mailbox Database]
 - [Microsoft Exchange Database Availability Groups]>[Forest or Domain]>[Microsoft Information Store]>[Public Store]
 - [Microsoft Information Store]>[Mailbox Database]
 - [Microsoft Information Store]>[Public Store]
- 8 [すべてのフォルダ (All Folders)]ペインで、リストアを行うオブジェクトを次の中から選択します。
 - メールボックス

- メールボックスフォルダ
- メールボックスのオブジェクト
- パブリックフォルダ
- パブリックフォルダ内の文書

DLLs フォルダは無視できます。

次の図に、個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用した DAG のリストアを示します。



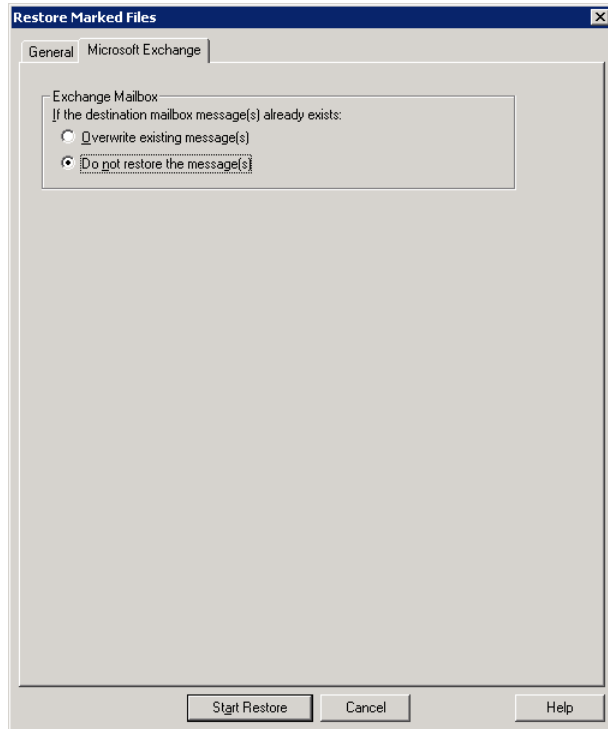
オブジェクトはすべてフォルダおよびメッセージとして表示されます。一部の非メッセージオブジェクトは、件名で識別できます。たとえば、Appointment1 というカレンダーイベントを作成した場合、その名前がオブジェクトの件名に表示されます。

ただし、フォームやビューなどの一部のオブジェクトには (名前を付けることはできても) 件名は存在しません。これらのオブジェクトは簡単に識別できない場合があります。

- 9 [処理 (Actions)]>[リストア (Restore)]をクリックします。

- 10 [Microsoft Exchange] タブで、既存のメールボックスメッセージをリストアするかどうかを選択します。

p.145 の「[Exchange Server メールボックスオブジェクトまたは共有フォルダオブジェクトのリストアのオプション](#)」を参照してください。



- 11 代替のメールボックスまたはメールボックスフォルダへ個々のメールボックス項目をリストアできます。

p.148 の「[Exchange メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトの代替パスへのリダイレクトリストア](#)」を参照してください。

- 12 [リストアの開始 (Start Restore)] をクリックします。

Exchange メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトの代替パスへのリダイレクトリストア

NetBackup では、Exchange メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトを代替パスにリストアできます。

詳しい情報および手順については、次の項を参照してください。

- p.149 の「Exchange メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトの代替パスへのリダイレクトリストアの要件」を参照してください。
- p.150 の「Exchange メールボックス、メールボックスフォルダまたはパブリックフォルダのリダイレクトリストア」を参照してください。
- p.152 の「Exchange フォルダ、メッセージ、またはドキュメントの代替パスへのリダイレクトリストア」を参照してください。

Exchange メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトの代替パスへのリダイレクトリストアの要件

Exchange メールボックスまたは共有フォルダの代替パスへのリダイレクトリストアを実行する場合は、次の要件を確認します。

- 明示的なパス (またはフルパス) を指定する必要があります。
- 宛先パスの次のセグメントは変更できません。
 Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥
 Microsoft Information Store:¥
 パスのこの部分を変更すると、NetBackup は通常の (Exchange 以外の) ファイルとしてオブジェクトのリストアを試行します。
- 宛先メールボックスまたは宛先フォルダに、関連付けられたユーザーアカウントが存在している必要があります。
- パブリックフォルダのリストアをリダイレクトするには、宛先パスに表示されたフォルダが存在する必要はありません。
- 個別バックアップからリストアをリダイレクトする場合は、次のリストアの宛先例を参照してください。

```
Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥server1¥My-database¥Database¥  
John Q. Employee [JQEmployee]¥Top of Information Store¥Inbox¥
```

```
Microsoft Information Store:¥My-database¥Database¥John Q. Employee [JQEmployee]¥  
Top of Information Store¥Inbox¥
```

この例では、次の点に注意してください。

- 「**server1**」をターゲットサーバーと想定します。
- 「**My-database**」は、ターゲットサーバーの有効なデータベースである必要があります (ただし、直接アクセスされません)。
- **John Q. Employee** は、有効でアクセス可能なメールボックスである必要があります。

Exchange メールボックス、メールボックスフォルダまたはパブリックフォルダのリダイレクトリストア

このトピックでは、メールボックス、メールボックスフォルダまたはパブリックフォルダを異なるメールボックスまたはパブリックフォルダにリダイレクトリストアする方法について説明します。

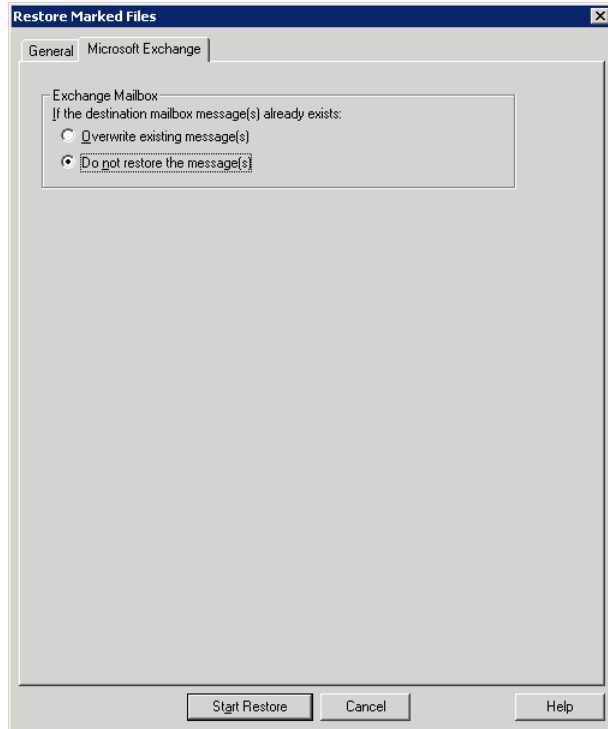
注意: パブリックフォルダの場合、別のフォルダにリストアできるように、ターゲットフォルダのフォルダレベルの **Publisher** 編集権限が必要です。

メールボックス、メールボックスフォルダまたはパブリックフォルダをリダイレクトリストアする方法

- 1 サーバーに管理者としてログオンします。
- 2 バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを開きます。
- 3 [ファイル (File)]>[リストアするファイルおよびフォルダの選択 (Select Files and Folders to Restore)]>[通常バックアップからリストア (from Normal Backup)]をクリックします。
- 4 [ファイル (File)]>[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]をクリックします。
- 5 [NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]ダイアログボックスで、サーバーとポリシー形式を選択します。
- 6 [NetBackup の履歴 (NetBackup History)]ペインで、リストアを行うオブジェクトが含まれているイメージをクリックします。次のいずれかを選択します。
 - 最後の完全バックアップ
 - 最後の完全バックアップおよびそれ以降のすべての差分増分バックアップ
 - 最後の完全バックアップおよび最後の累積増分バックアップ個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用した増分バックアップから個々の項目をリストアすることはできません。
- 7 [すべてのフォルダ (All Folders)]または右ペインで、リストアするメールボックスまたはパブリックフォルダをクリックします。
- 8 [処理 (Actions)]>[リストア (Restore)]をクリックします。

- 9 [Microsoft Exchange] タブで、必要なリストアオプションを選択します。

p.145 の「Exchange Server メールボックスオブジェクトまたは共有フォルダオブジェクトのリストアのオプション」を参照してください。



- 10 [全般 (General)] タブで、[すべてを異なる位置にリストア (既存の構造を維持) (Restore everything to a different location)] をクリックします。
- 11 [宛先 (Destination)] ボックスで、オブジェクトをリストアする場所を指定します。明示的なパス (またはフルパス) を指定する必要があります。
- メールボックスの名前を既存の代替メールボックスに変更します。たとえば、Mailbox 1 の内容を Mailbox 2¥Folder にリストアする場合、[宛先 (Destination)] ボックスに次のいずれかを指定します。

Microsoft Exchange Database Availability Groups:¥DAG¥Microsoft Information Store¥My-database¥Database¥mailbox2 [mailbox2]

Microsoft Information Store:¥My-database¥Database¥mailbox2 [mailbox2]¥

- パブリックフォルダのリストアを行う場合、パブリックフォルダ名をリストアの宛先とするフォルダに変更します。このフォルダは存在する必要はありません。

12 [リストアの開始 (Start Restore)]をクリックします。

Exchange フォルダ、メッセージ、またはドキュメントの代替パスへのリダイレクトリストア

このトピックでは、メールボックスまたはパブリックフォルダオブジェクトを代替パスへリストアする方法について説明します。

Exchange フォルダ、メッセージ、またはドキュメントを代替パスにリダイレクトリストアする方法

- 1 サーバーに管理者としてログオンします。
- 2 [ファイル (File)]>[リストアするファイルおよびフォルダの選択 (Select Files and Folders to Restore)]>[通常バックアップからリストア (from Normal Backup)]をクリックします。
- 3 [ファイル (File)]>[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]をクリックします。
- 4 [NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]ダイアログボックスで、サーバーとポリシー形式を選択します。
- 5 [NetBackup の履歴 (NetBackup History)]ペインで、リストアを行うフォルダが含まれているイメージをクリックします。

次のいずれかを選択します。

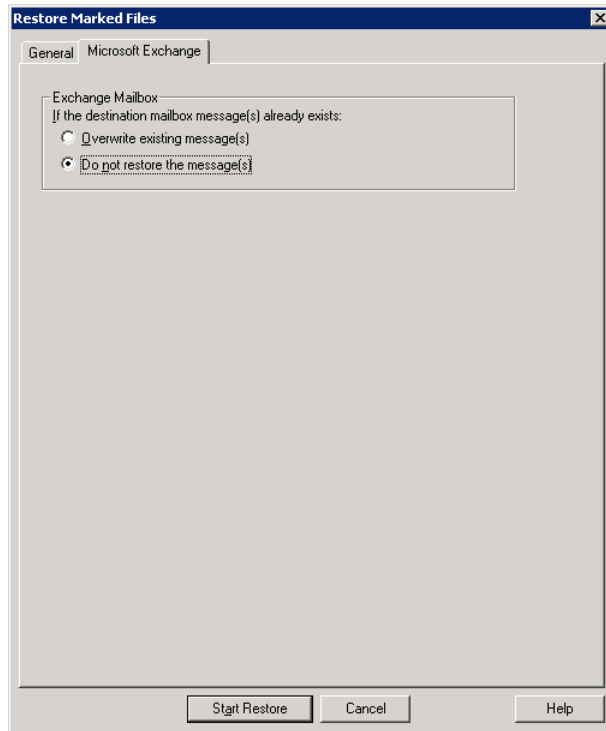
- 最後の完全バックアップ
- 最後の完全バックアップおよびそれ以降のすべての差分増分バックアップ
- 最後の完全バックアップおよび最後の累積増分バックアップ

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用した増分バックアップから個々の項目をリストアすることはできません。

- 6 [内容 (Contents of)]ペインまたは右ペインで、リストアするフォルダ、メッセージまたは文書をクリックします。
 [すべてのフォルダ (All Folders)]ペインで項目を選択した場合は、個々のオブジェクトをリダイレクトできません。
- 7 [処理 (Actions)]>[リストア (Restore)]をクリックします。

- 8 [Microsoft Exchange] タブで、必要なリストアオプションを選択します。

p.145 の「[Exchange Server メールボックスオブジェクトまたは共有フォルダオブジェクトのリストアのオプション](#)」を参照してください。



- 9 [全般 (General)] タブで、[個々のフォルダおよびファイルを異なる位置にリストア (Restore individual folders and files to different locations)] オプションをクリックします。

[個々のフォルダおよびファイルを異なる位置にリストア (Restore individual folders and files to different locations)] の下の各行は、個々のフォルダ、メッセージまたは文書に関連付けられています。

- 10 行をダブルクリックして、リストアの宛先を変更します。

- 11** [宛先 (Destination)] ボックスで、オブジェクトをリストアするメールボックスまたはフォルダを指定します。

メールボックスフォルダまたはメッセージをリダイレクトする場合、宛先には既存の任意のメールボックスまたはメールボックスフォルダを指定できます。パブリックフォルダまたは文書をリダイレクトする場合、宛先には新規または既存のパブリックフォルダを指定できます。明示的なパス (またはフルパス) を指定する必要があります。

たとえば、Mailbox 1 の Inbox の内容を同じメールボックスの Other フォルダにリストアするとします。[宛先 (Destination)] ボックスには次のいずれかを指定します。

```
Microsoft Exchange Database Availability Groups:\$DAG\$Microsoft Information Store\$My-database\$Database\$mailbox2 [mailbox2]\$Other\$
```

```
Microsoft Information Store:\$My-database\$Database\$mailbox2 [mailbox2]\$Other\$
```

- 12** [OK] をクリックします。
- 13** [リストアの開始 (Start Restore)] をクリックします。

コマンドラインを使用したExchange個別バックアップイメージの参照またはリストア

NetBackup 管理コンソールに加え、コマンドラインを使って、個別バックアップイメージの参照またはリストアを行うこともできます。

- メールボックスまたはメールボックスフォルダのスナップショットリストアを実行する場合は、Microsoft Information Store または DAG とデータベースに対するファイル名を指定します。たとえば、

```
Microsoft Exchange Database Availability Groups:\$server1\$Microsoft Information Store\$My-database\$Database\$John Q. Employee [JQEmployee]\$Top of Information Store\$Inbox\$
```

```
Microsoft Information Store:\$My-database\$Database\$John Q. Employee [JQEmployee]\$Top of Information Store\$Inbox\$
```

- 複製操作用のプロキシホストを指定するには、bpduplicate コマンドまたは bplist コマンドで「- granular_proxy」オプションを使用します。
 p.26 の「Exchange 個別のプロキシのホストの構成」を参照してください。
 プロキシホストを指定する bplist コマンド例を次に示します。

```
bplist -t 16 -k exchgranpolicy -R -s 06/09/2016 16:00:00  
-granular_proxy ProxyServerA "\$Microsoft Information Store\$My-database\$DeptA\$EmployeeA\$Top of Information Store\$Inbox\$"
```

VMware バックアップを使用した Exchange Server データの保護について

この章では以下の項目について説明しています。

- VMware バックアップによる Exchange Server データの保護について
- Exchange Server を保護する VMware ポリシーの構成に関する注意事項
- Exchange Server を保護する VMware バックアップの構成について
- レプリケーションディレクトリを使用して Exchange サーバーを保護する VMware バックアップを構成し、スナップショットレプリケーションを管理する
- VMware バックアップからの Exchange データのリストアについて
- VMware バックアップでの Exchange データベースのパスリブコピーの保護の有効化

VMware バックアップによる Exchange Server データの保護について

VMware のバックアップポリシーを使用することで、NetBackup では仮想マシンに存在する Exchange サーバーの一貫した完全バックアップを作成できます。1 回の VMware バックアップから、.vmdk のリストア (ディスクレベル)、SFR リストア (ファイルレベルのリカバリ)、Exchange データベースのリストア、Exchange の個別レベルのリストア (GRT) のリストアオプションを選択できます。また、ログを切り捨てるかどうかを選択できます。

VMware ポリシーでサポート対象のアプリケーションを保護するには、VMware の検出ジョブの後、スナップショットジョブの前にアプリケーション状態キャプチャ (ASC) ジョブを

実行します。この ASC ジョブはゲストの仮想マシンの NetBackup クライアントにアクセスします。ASC ジョブは、アプリケーションリカバリと個別リカバリ (GRT) 機能のために必要なアプリケーション固有のデータを収集してカタログ化します。

ASC ジョブと関連付けられたログについての詳細情報を参照できます。

p.195 の「[Exchange Server の VMware のバックアップとリストアのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Veritas VSS provider for vSphere について

次の場合は、VMware VSS プロバイダの代わりに Veritas VSS provider を推奨します。

- VMware バックアップで Exchange Server 仮想マシンのログを切り捨てる必要がある。Veritas VSS provider は完全 VSS バックアップによって Exchange Server のログを切り捨てます。
- バックアップを作成する対象の仮想マシンが Exchange DAG のノードである。この場合、データベースのアクティブなコピーのみがカタログ化され、それらの同じデータベースのみのログファイルは切り捨てられます。
- Exchange のエクスクルードファイルリストを使いたい。Exchange のエクスクルードファイルリストを設定する方法について詳しくは、次を参照してください。
p.92 の「[バックアップからの Exchange 項目の除外について](#)」を参照してください。

Veritas VSS provider がインストールされ、NetBackup が仮想マシンのスナップショットを開始すると、VMware ツールはファイルレベルの一貫したバックアップのために VSS ライターを静止するように Veritas VSS provider に要求します。ログの切り捨てがポリシーで有効になっている場合は、VMware スナップショットが完了すると、Exchange VSS ライターがトランザクションログを切り捨てます。

メモ: Veritas VSS provider は個別にインストールする必要があります。

p.161 の「[Veritas VSS provider for vSphere のインストール](#)」を参照してください。

Exchange サーバーを保護する VMware バックアップのサポート

以下に示す、Exchange Server を保護する VMware バックアップの必要条件と情報を確認してください。

- 仮想環境のサポートについて詳しくは、『[NetBackup 互換性リスト](#)』を参照してください。
- Veritas VSS provider または VMware VSS プロバイダのいずれかが必要です。これらのプロバイダのいずれかがない場合、データベースリカバリに手動での手順が必要になることがあり、個別リカバリはサポートされません。

Veritas は、Exchange をホストする仮想マシンには Veritas VSS provider を推奨します。

p.156 の「[Veritas VSS provider for vSphere について](#)」を参照してください。

- VMware バックアップは、スタンドアロンの Exchange Server と DAG でサポートされます。
- DAG ノードの場合には NetBackup は DAG のノードレベルで保護します。この動作は、保護が DAG レベルのエージェントバックアップとは異なります。

Exchange Server を保護する VMware ポリシーの使用に関する制限事項

Exchange Server を保護する VMware ポリシーを構成するときには、次の制限事項があります。

- このリストは VMware ポリシー制限の包括的なリストではありません。仮想環境の NetBackup のサポートについて詳しくは次の Web サイトを参照してください。
https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.000006177
- Exchange Server の VMware 増分バックアップは、このバージョンの NetBackup ではサポートされません。ただし、アクセラレータを使用すると、完全バックアップの速度が上がります。
- VMware バックアップでは、Exchange データベースの一貫性チェックは実行されません。
- 次のいずれかの操作を行うと、アプリケーション状態キャプチャ (ASC) ジョブは失敗し、データベースは保護されません。
 - [仮想マシンの静止 (Virtual machine quiesce)] オプションを無効にします。
 - [ディスクの除外 (Exclude Disks)] タブで、VMware ポリシーから任意のディスクデータを除外します。除外するディスクに Exchange データが含まれないようにしてください。
- マウント解除されたデータベースは保護されません。
- データベースは VMware バックアップのためにサポートされる構成に存在する場合にのみカタログ化され、保護されます。保護できるデータベースが存在する限り、ASC ジョブは続行されます。サポートされているディスクとサポートされていないディスクに存在するデータベースをバックアップ用を選択すると、ASC ジョブは状態 1 (部分的に成功) を生成します。ASC ジョブではこれらの状況が検出され、ジョブの詳細にはバックアップ処理の結果が含まれます。

Exchange Server データベースが次の場所にある場合は、データベースはカタログ化されず、バックアップされません。

- Raw デバイスマッピング (RDMs) (Raw device mapping (RDMs))。Exchange 仮想マシンがデータベースとトランザクションログのストレージとして RDM を使わないことを確認します。
- 独立としてマークされている仮想マシンディスク (vmdk) ボリューム。Exchange データベースとトランザクションログが独立したディスクに保存されないことを確認します。
- 仮想ハードディスク (VHD)。
NetBackup が VHD ディスク上のデータベースオブジェクトを検出すると、ASC ジョブは失敗し、Exchange の内容はカタログ化されません。バックアップのすべてのオブジェクトは、VHD に存在しないものも含めてカタログ化されません。
- RAID ボリューム。
- ReFS ファイルシステム。
- 除外された Windows ブートディスク。ASC ジョブは、この種類のディスクを検出し、それを独立したディスクと同様に処理します。
VMware バックアップでは、いかなる理由でも NetBackup がインストールされているディスクをエクスクルードできません。たとえば、NetBackup がブートドライブ (通常 C:) にインストールされている場合、[ブートディスクのエクスクルード (Exclude boot disk)] オプションを選択しないでください。

Exchange Server を保護する VMware ポリシーの構成に関する注意事項

仮想マシンの Exchange Server をバックアップするには、VMware ポリシー形式を使って完全バックアップを構成します。ログの切り捨ては任意です。VMware バックアップでは個別リカバリテクノロジー (GRT) が自動的に提供されます。

ここでは、Exchange Server の保護に固有の詳細についてのみ説明します。VMware ポリシーの作成方法について詳しくは、『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』を参照してください。

ログの切り捨て

NetBackup でバックアップ後に正常にログを切り捨てるには、次の条件が適用されます。

- Veritas VSS provider をインストールする必要があります。
p.161 の『[Veritas VSS provider for vSphere のインストール](#)』を参照してください。
- ASC ジョブで Veritas VSS provider がインストールされていることを検出する必要があります。

- まずログの切り捨てなしで VMware の完全バックアップを実行する必要があります。まずこの完全バックアップを実行しない場合、ASC ジョブは失敗します。このバックアップが完了したら、ポリシーでログの切り捨てを有効にします。
- データベースがアクティブで、マウントされ、エクスクルードリストに含まれず、保護可能である必要があります。
p.157 の「Exchange Server を保護する VMware ポリシーの使用に関する制限事項」を参照してください。

操作上の注意事項

Exchange Server バックアップの VMware ポリシーを構成する場合、次のことに注意してください。

- VMware ポリシーでは Exchange の増分バックアップを構成できません。代わりに、Exchange の増分バックアップには MS-Exchange-Server ポリシーを作成する必要があります。VMware 増分ポリシーを使用して Exchange のバックアップを試行すると、アプリケーション状態キャプチャ (ASC) ジョブは失敗します。ただし、VMware のバックアップジョブは成功します。完全バックアップの VMware ポリシーと増分バックアップの Exchange ポリシーの両方を使用する場合は、注意が必要です。バックアップが別の時刻に行われるようにスケジュールされていることを確認してください。
- Exchange Server を保護する VMware バックアップのバックアップ履歴は保存されません。NetBackup はアクティブなコピーが仮想マシンにあるデータベースのみ保護するので、VMware バックアップには適用されません。
- [プライマリ VM 識別子 (Primary VM identifier)] として [VM ホスト名 (VM hostname)] を選択した場合、問題が発生する可能性があります。VMware ポリシーの仮想マシンを参照および選択するときに、適切なアドレスまたはクライアント名が返されない場合があります。この問題が発生した場合は、代わりに [VMware 表示名 (VMware display name)] を使用してください。

Exchange Server を保護する VMware バックアップの構成について

次の手順を使用して Exchange Server を保護する VMware バックアップを構成します。

表 10-1 Exchange Server を保護する VMware バックアップを構成する手順

手順	処理	説明
手順 1	VMware 環境を構成し、必要なライセンスを追加します。	『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。 データベースをホストする各 ESX Server で、Exchange ライセンスと Enterprise Client ライセンスの NetBackup を追加します。 Exchange を実行している仮想マシンに、NetBackup クライアントソフトウェアをインストールします。
手順 2	Veritas VSS provider をインストールします。	p.161 の「 Veritas VSS provider for vSphere のインストール 」を参照してください。
手順 3	VMware バックアップから個々のメールボックスとパブリックフォルダの項目をリストアする場合、個別リカバリの要件を確認します。	p.163 の「 Exchange を保護する VMware バックアップを使用した個別リカバリテクノロジー (GRT) の構成 」を参照してください。
手順 4	VMware ポリシーの構成。	p.165 の「Exchange サーバーをバックアップするための VMware ポリシーの構成」を参照してください。 『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。 ログを切り捨てる場合、まずログの切り捨てなしでの完全バックアップを実行する必要があります。 p.158 の「Exchange Server を保護する VMware ポリシーの構成に関する注意事項」を参照してください。 VMware の完全バックアップを高速化する可能性のあるアクセラレータの使い方については追加情報が利用可能です。 p.162 の「NetBackup アクセラレータを使った VMware の完全バックアップの速度の増加」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 5	NetBackup サーバーで、分散アプリケーションのリストアのマッピングを設定します。	DAG またはクラスタでのバックアップの場合、またはブローキンホストを使用する場合は、環境内のアプリケーションホストとコンポーネントホストをマッピングする必要があります。たとえば、各 DAG ノードは、DAG 名を使ってバックアップイメージにアクセスする必要があります。マスターサーバーの[分散アプリケーションリストア マッピング (Distributed Application Restore Mapping)]ホストプロパティで、これらのマッピングを設定します。 p.38 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定」を参照してください。
手順 6	NetBackup サーバーで、環境内のホストの自動検出マッピングを確認します。	場合によっては、NetBackup ホストに追加のホスト名があるか、他のホストと特定の名前を共有しています。たとえば、各 DAG ノードは DAG 名にマッピングする必要があります。NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの[ホスト管理 (Host Management)]プロパティで、この設定を実行します。 p.41 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

Veritas VSS provider for vSphere のインストール

メモ: 最新バージョンの Veritas VSS provider をインストールする必要があります。プロバイダの既存のバージョンがあれば、最初に古いバージョンをアンインストールしてください。NetBackup クライアントをアップグレードしても、Veritas VSS provider はアップグレードされません。

Veritas VSS provider を使うには、Windows クライアントの NetBackup のインストール後に手動でインストールする必要があります。VMware VSS プロバイダがインストールされている場合はインストールプログラムによって削除され、コンピュータの再起動が必要になることがあります。

Veritas VSS provider をインストールする方法

- 1 次の場所を参照します。
- `install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥goodies¥`
- 2 [vSphere 用の Veritas VSS provider (VSS provider for vSphere)]のショートカットをダブルクリックします。

- 3 プロンプトに従います。
- 4 ユーティリティが完了したら、メッセージが表示される場合はコンピュータを再起動します。
- 5 再起動後、ユーティリティが再開されます。プロンプトに従って、インストールを完了します。

Veritas VSS provider をアンインストールする方法

- 1 [コントロールパネル]で、[プログラムの追加と削除]または[プログラムと機能]を開きます。
- 2 [vSphere 用の Veritas VSS provider (VSS provider for vSphere)]をダブルクリックします。

アンインストールプログラムでは、VMware VSS プロバイダは自動的に再インストールされません。

NetBackup アクセラレータを使った VMware の完全バックアップの速度の増加

[アクセラレータを使用 (Use Accelerator)]オプションを選択して、NetBackup アクセラレータを使うと、VMware の完全バックアップが高速化される可能性があります。バックアップ時間の短縮によって、VMware バックアップをバックアップ処理時間帯内に簡単に完了できるようになります。この機能を使うには、最初に[アクセラレータを使用 (Use Accelerator)]を有効にして初回バックアップを実行する必要があります。以降のバックアップ時間はかなり減らすことができます。

Exchange 向けのアクセラレータのサポートは、現在、完全スケジュール形式のバックアップのみに制限されています。この制限は、Exchange を保護する VMware バックアップをアクセラレータなしで実行する場合にも適用されます。

p.159 の「[Exchange Server を保護する VMware バックアップの構成について](#)」を参照してください。

クライアントの変更検出の新しい基準を定期的に確立するには、[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションを有効にして個別のポリシースケジュールを作成します。

この機能は MSDP または PureDisk のストレージユニットと[データ保護最適化オプション (Data Protection Optimization Option)]のライセンスを必要とします。VMware バックアップでアクセラレータを使用する方法について詳しくは、『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』を参照してください。

Exchange を保護する VMware バックアップを使用した個別リカバリテクノロジー (GRT) の構成

このトピックでは、ご使用のNetBackup環境でExchangeメールボックスとパブリックフォルダのオブジェクトをVMwareバックアップから個別にリストアできるように構成する手順を説明します。

表 10-2 Exchange を保護する VMware バックアップを使用した個別リカバリテクノロジー (GRT) の構成

手順	処理	説明
手順 1	サポート対象の Exchange Server 構成があり、GRT をサポートするメディアサーバープラットフォームがあることを確認します。	アプリケーションとデータベースエージェントの互換性リストを参照してください。 ソフトウェアの互換性リストを参照してください。
手順 2	NetBackup サーバーと Exchange サーバーのソフトウェアの必要条件が満たされていることを確認します。	p.16 の「NetBackup for Exchange 用 NetBackup サーバーの要件」を参照してください。 p.18 の「NetBackup for Exchange の Exchange サーバーソフトウェア要件」を参照してください。
手順 3	どのクライアントが設定を必要とするかを判断し、NetBackup クライアントの必要条件が満たされていることを確認してください。	p.47 の「Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ」を参照してください。 p.17 の「NetBackup for Exchange 用 NetBackup クライアントの要件」を参照してください。 クラスタ環境またはレプリケートされた環境の場合は、クラスタ内のデータベースノードごとにこれらの手順を実行します。Exchange データベース可用性グループ (DAG) の場合は、DAG の各データベースノードで手順を実行します。
手順 4	すべての個別リストア用クライアント上で、バックアップイメージのマウント先となるドライブ文字が各ノードに割り当てられていないことを確認します。	

手順	処理	説明
手順 5	すべての個別リストア用クライアントで、ご使用の環境に合わせて NFS を有効化または構成します。	クラスタ環境またはレプリケートされた環境の場合は、クラスタ内のデータベースノードごとにこれらの手順を実行します。Exchange DAG の場合は、バックアップを参照するノードを構成します。この構成は、仮想マシンのバックアップ時にデータをキャプチャする場合は必要ありません。 p.54 の「Windows 2012、2012 R2、2016 でのネットワークファイルシステム (NFS) 用サービスの構成について」を参照してください。 p.62 の「2008 および Windows 2008 R2 での NFS 用サービスの構成について」を参照してください。 p.71 の「個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用するバックアップおよびリストアのための UNIX メディアサーバーおよび Windows クライアントの構成」を参照してください。
手順 6	すべての個別リストア用クライアントで、NetBackup 用の Exchange 操作アカウント (独自のメールボックス) を作成します。	アカウントがローカル管理者であり、各サーバーのプロセスレベルトークンを置換する権限があることを確認します。 p.30 の「NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について」を参照してください。
手順 7	すべての個別リストア用クライアントで、Exchange クレデンシャルを設定します。	NetBackup Exchange 操作のアカウントのクレデンシャルを使います。 p.28 の「クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシャルについて」を参照してください。 Exchange 2013 以降の場合は、Exchange Server を「表示限定の組織管理」ロールグループに追加できます。Exchange Administration Center (EAC) または Active Directory でこの設定を実行します。詳しくは、次の Microsoft 社の記事を参照してください。 http://technet.microsoft.com/en-us/library/jj657492 クラスタ環境またはレプリケートされた環境の場合は、クラスタ内のデータベースノードごとにこれらの手順を実行します。

手順	処理	説明
手順 8	ポリシーを次のように作成します。 ■ VMware ポリシー形式を選択します。 ■ サポートされるディスクストレージユニットを選択します。	VMware バックアップで Replication Director を設定する方法について詳しくは、『NetBackup Replication Director ソリューションガイド』を参照してください。 p.171 の「スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用して Exchange Server をバックアップするための VMware ポリシーの構成」を参照してください。 Exchange を保護する VMware バックアップでは、個別リカバリが自動的に提供されます。ポリシーで有効にする必要はありません。
手順 9	NetBackup サーバーで、分散アプリケーションのリストアのマッピングを設定します。	DAG またはクラスタでのバックアップの場合、またはプロキシホストを使用する場合は、環境内のアプリケーションホストとコンポーネントホストをマッピングする必要があります。たとえば、各 DAG ノードは、DAG 名を使ってバックアップイメージにアクセスする必要があります。マスターサーバーの[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)]ホストプロパティで、これらのマッピングを設定します。 p.38 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定」を参照してください。
手順 10	NetBackup サーバーで、環境内のホストの自動検出マッピングを確認します。	場合によっては、NetBackup ホストに追加のホスト名があるか、他のホストと特定の名前を共有しています。たとえば、各 DAG ノードは DAG 名にマッピングする必要があります。NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの[ホスト管理 (Host Management)]プロパティで、この設定を実行します。 p.41 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

Exchange サーバーをバックアップするための VMware ポリシーの構成

このトピックでは、Exchange サーバーをバックアップするために VMware ポリシーを構成する方法について説明します。必要に応じて、NetBackup アクセラレータを使用できます。

Exchange サーバーをバックアップするために VMware ポリシーを構成する方法

- 1 新しいポリシーを作成するか、構成するポリシーを開きます。
- 2 [ポリシーの変更 (Change Policy)]ダイアログボックスで、[属性 (Attributes)]タブをクリックします。

- 3 [ポリシー形式 (Policy type)]リストで、[VMware]を選択します。

VMware バックアップのポリシーを作成する方法について詳しくは、『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』を参照してください。

- 4 [ポリシーストレージ (Policy storage)]フィールドで、ディスクストレージユニットを選択します。

NetBackup アクセラレータを使う場合は、PureDisk ストレージユニット形式 (MSDP または PureDisk) を選択します。サポート対象のストレージ形式はすべて、NetBackup のデバイスマッピングファイルにリスト表示されています。

- 5 NetBackup アクセラレータを使うには、[アクセラレータを使用 (Use Accelerator)]をクリックします。

アクセラレータは初回の完全バックアップを使って基準を確立します。アクセラレータを使って実行される以降のバックアップは非常に高速に実行できます。[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションを有効にするための追加のポリシースケジュールを作成することもできます。このオプションにより、次のアクセラレータバックアップ用の新しい基準が確立されます。NetBackup アクセラレータについて詳しくは、次を参照してください。

p.162 の「[NetBackup アクセラレータを使った VMware の完全バックアップの速度の増加](#)」を参照してください。

『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』

アクセラレータを有効にすると、[VMware]タブで[Block Level Incremental (BLI) バックアップを有効にする (Enable block-level incremental backup)]オプションも選択され、灰色で表示されます。

- 6 [クライアント (Clients)]タブで、[問い合わせを使用して自動的に選択 (Select automatically through query)]をクリックします。

問い合わせを使って問題が発生した場合、[VMware]タブで、[プライマリ VM 識別子 (Primary VM identifier)]を[VM ホスト名 (VM hostname)]から[VM 表示名 (VM display name)]に変更します。

- 7 [仮想マシンの自動選択を実行するための NetBackup ホスト (NetBackup host to perform automatic virtual machine selection)]から、使用したいホストを選択します。

- 8 バックアップする仮想マシンを選択するルールを作成するには、クエリービルダーを使います。

クエリービルダーについて詳しくは、『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』を参照してください。

- 9 [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブをクリックします。

このタブには、[クライアント (Clients)]タブで作成したクエリーが表示されます。

- 10 [VMware]タブをクリックします。

このダイアログボックスのオプションについて詳しくは、『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』を参照してください。

- 11 バックアップのカタログ化に使う[プライマリ VM 識別子 (Primary VM identifier)]を選択します。

- 12 [VM バックアップからのファイルリカバリを有効にする (Enable file recovery from VM backup)]を選択します。

Exchange Server のアプリケーション保護を行うためには、このオプションを有効にする必要があります。

- 13 [Exchange Recovery を有効にする (Enable Exchange Recovery)]を選択します。

このオプションは仮想マシンバックアップからの Exchange データベースまたはメールボックスメッセージのリカバリを有効にします。このオプションが無効になっている場合、バックアップから仮想マシン全体をリカバリできます。ただし、データベースやメールボックスメッセージを個別にリカバリすることはできません。

- 14 ログを切り捨てる場合、この時点で[ログの切り捨て (Truncate logs)]を有効にしないでください。この手順の後のほうの説明に従って、最初に、ログの切り捨てを行わずに完全バックアップを実行する必要があります。

- 15 VMware バックアップから特定のディスクを除外する場合は、[ディスクを除外 (Exclude Disks)]タブをクリックします。

NetBackup は、Exchange Server を保護する VMware バックアップからそれらのディスクを除外します。除外するディスクに Exchange データが含まれないようにしてください。

[ディスクを除外 (Exclude Disks)]タブについて詳しくは、『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』を参照してください。

- 16 [OK]をクリックして、ポリシーを保存します。

トランザクションログを切り捨てない場合、これ以上の処理は必要ありません。

トランザクションログを切り捨てる場合は、手順 17 を続行します。

- 17 ログの切り捨てを行わずに完全バックアップを実行します。

まずこの完全バックアップを実行しない場合、ASC ジョブは失敗します。

- 18 バックアップが完了したら、ステップ 1 で作成したポリシーを開いてください。

- 19 [VMware]タブをクリックします。

- 20

「Exchange Recovery を有効にする (Enable Exchange Recovery)」の下にある「ログを切り捨てる (Truncate logs)」を選択します。

このオプションは仮想マシンの VMware スナップショットが完了したときにトランザクションログを切り捨てます。
- 21

「OK」をクリックして、ポリシーを保存します。
- 22

VMware の完全バックアップを実行します。

レプリケーションディレクトクを使用して Exchange サーバーを保護する VMware バックアップを構成し、スナップショットレプリケーションを管理する

次の手順に従って Exchange サーバーを保護する NetBackup for VMware バックアップを構成し、レプリケーションディレクトクを使用してスナップショットレプリケーションを管理します。この機能には、NetBackup レプリケーションディレクトクライセンスが必要です。

表 10-3 レプリケーションディレクトクを使用して Exchange サーバーを保護する VMware バックアップを構成し、スナップショットレプリケーションを管理する手順

手順	処理	説明
手順 1	VMware 環境を構成し、必要なライセンスを追加します。	『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。 データベースをホストする各 ESX Server で、Exchange ライセンスと Enterprise Client ライセンスの NetBackup を追加します。 Exchange を実行している仮想マシンに、NetBackup クライアントソフトウェアをインストールします。
手順 2	Veritas VSS provider をインストールします。	p.161 の「 Veritas VSS provider for vSphere のインストール 」を参照してください。
手順 3	ストレージライフサイクルポリシー (SLP) を作成します。	『 NetBackup Replication Director ソリューションガイド 』を参照してください。

手順	処理	説明
手順 4	NetApp ファイラにアクセスできるアカウントで NetBackup Client Service を構成します。	スナップショットのコピーで VMware バックアップの個別項目を参照したり、リストアするには、NetBackup クライアントサービスのログオンアカウントを構成する必要があります。このアカウントは、NetApp ディスクアレイに作成される CIFS 共有にアクセスする必要があります。 p.173 の「NetApp ディスクアレイ上の共有 CIFS へのアクセスを使用した NetBackup の構成」を参照してください。
手順 5	VMware バックアップから個々のメールボックスとパブリックフォルダの項目をリストアする場合、個別リカバリの要件を確認します。	p.170 の「Replication Director を使用して Exchange を保護する VMware バックアップで個別リカバリテクノロジー (GRT) を構成し、スナップショットレプリケーションを管理する」を参照してください。
手順 6	SLP ストレージユニットで VMware のポリシーを設定し、レプリケーションディレクタを有効にします。	ポリシーを次のように作成します。 ■ VMware ポリシー形式を選択します。 ■ 使用するストレージライフサイクルポリシー (SLP) を選択します。スナップショットとスナップショットレプリケーションのためにこの SLP を設定する必要があります。 ■ [レプリケーションディレクタを使用 (Use Replication Director)] を選択します。 ■ ログを切り捨てる場合、まずログの切り捨てなしでの完全バックアップを実行する必要があります。 p.158 の「Exchange Server を保護する VMware ポリシーの構成に関する注意事項」を参照してください。 ■ Exchange を保護する VMware バックアップでは、個別リカバリが自動的に提供されます。ポリシーで有効にする必要はありません。 p.171 の「スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用して Exchange Server をバックアップするための VMware ポリシーの構成」を参照してください。 VMware バックアップで Replication Director を設定する方法について詳しくは、『NetBackup Replication Director ソリューションガイド』を参照してください。

手順	処理	説明
手順 7	NetBackup サーバーで、分散アプリケーションのリストアのマッピングを設定します。	DAG またはクラスタでのバックアップの場合、またはプロキシホストを使用する場合は、環境内のアプリケーションホストとコンポーネントホストをマッピングする必要があります。たとえば、各 DAG ノードは、DAG 名を使ってバックアップイメージにアクセスできる必要があります。マスターサーバーの[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)]ホストプロパティで、これらのマッピングを設定します。 p.38 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定」を参照してください。
手順 8	NetBackup サーバーで、環境内のホストの自動検出マッピングを確認します。	場合によっては、NetBackup ホストに追加のホスト名があるか、他のホストと特定の名前を共有しています。たとえば、各 DAG ノードは DAG 名にマッピングする必要があります。NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの[ホスト管理 (Host Management)]プロパティで、この設定を実行します。 p.41 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

Replication Director を使用して Exchange を保護する VMware バックアップで個別リカバリテクノロジー (GRT)を構成し、スナップショットレプリケーションを管理する

このトピックでは、ご使用の NetBackup 環境で Exchange メールボックスとパブリックフォルダのオブジェクトを VMware バックアップから個別にリストアできるように構成する手順を説明します。

表 10-4 Replication Director を使用して Exchange を保護する VMware バックアップで個別リカバリテクノロジー (GRT)を構成し、スナップショットレプリケーションを管理する

手順	処理	説明
手順 1	サポート対象の Exchange Server 構成があり、GRT をサポートするメディアサーバープラットフォームがあることを確認します。	アプリケーション/データベースエージェント互換性リスト ソフトウェアの互換性リスト
手順 2	Exchange サーバーのソフトウェアの要件が満たされていることを確認します。	p.18 の「NetBackup for Exchange の Exchange サーバーソフトウェア要件」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 3	すべての Exchange メールボックスサーバーで、NetBackup の Exchange メールボックスを作成します (または NetBackup Exchange 操作のアカウント)。	p.30 の「 NetBackup Exchange 操作のアカウントの構成について 」を参照してください。
手順 4	すべての Exchange メールボックスサーバーで、Exchange クレデンシャルを構成します。	前の手順で作成したアカウントを使用して、Exchange クレデンシャルを構成します。 クラスタ環境またはレプリケートされた環境の場合は、クラスタ内のデータベースノードごとにこれらの手順を実行します。DAG の各データベースノードでこれらの手順を実行します。 p.28 の「クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシャルについて」を参照してください。

スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用して Exchange Server をバックアップするための VMware ポリシーの構成

このトピックでは、スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用した Exchange Server をバックアップするための VMware ポリシーの構成方法について説明します。NetBackup が NetApp ディスクアレイ上の CIFS 共有にアクセスする必要がありますことに注意してください。ログの切り捨てに対応するために、Veritas VSS provider をインストールする必要があります。

p.173 の「[NetApp ディスクアレイ上の共有 CIFS へのアクセスを使用した NetBackup の構成](#)」を参照してください。

p.161 の「[Veritas VSS provider for vSphere のインストール](#)」を参照してください。

スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用した Exchange Server をバックアップするための VMware ポリシーの構成方法

- 1 新しいポリシーを作成するか、構成するポリシーを開きます。
- 2 [ポリシーの変更 (Change Policy)] ダイアログボックスで、[属性 (Attributes)] タブをクリックします。
- 3 [ポリシー形式 (Policy type)] リストで、[VMware] を選択します。

VMware バックアップのポリシーを作成する方法について詳しくは、『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』を参照してください。

- 4 [ポリシーストレージ (Policy storage)]リストで、使用したいストレージライフサイクルポリシー (SLP) を選択します。スナップショットとスナップショットレプリケーションのためにこの SLP を設定する必要があります。

VMware バックアップで Replication Director を設定する方法について詳しくは、[『NetBackup Replication Director ソリューションガイド』](#)を参照してください。

- 5 Snapshot Client および Replication Director グループで、[Replication Director を使用 (Use Replication Director)]をクリックします。
- 6 [クライアント (Clients)]タブをクリックします。
- 7 [問い合わせを使用して自動的に選択 (Select automatically through query)]をクリックします。

問い合わせを使って問題が発生した場合、[VMware]タブで、[プライマリ VM 識別子 (Primary VM identifier)]を[VM ホスト名 (VM hostname)]から[VM 表示名 (VM display name)]に変更します。

- 8 [仮想マシンの自動選択を実行するための NetBackup ホスト (NetBackup host to perform automatic virtual machine selection)]から、使用したいホストを選択します。
- 9 バックアップする仮想マシンを選択するルールを作成するには、クエリービルダーを使います。

クエリービルダーについて詳しくは、[『NetBackup for VMware 管理者ガイド』](#)を参照してください。

- 10 [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブをクリックします。
このタブには、[クライアント (Clients)]タブで作成したクエリーが表示されます。
- 11 [VMware]タブをクリックします。
このダイアログボックスのオプションについて詳しくは、[『NetBackup for VMware 管理者ガイド』](#)を参照してください。
- 12 バックアップのカタログ化に使う[プライマリ VM 識別子 (Primary VM identifier)]を選択します。
- 13 [Exchange Recovery を有効にする (Enable Exchange Recovery)]を選択します。

このオプションは仮想マシンバックアップからの Exchange データベースまたはメールボックスメッセージのリカバリを有効にします。このオプションが無効になっている場合、バックアップから仮想マシン全体をリカバリできます。ただし、データベースやメールボックスメッセージを個別にリカバリすることはできません。

- 14 ログを切り捨てる場合、この時点で[ログの切り捨て (Truncate logs)]を有効にしないでください。この手順の後のほうの説明に従って、最初に、ログの切り捨てを行わずに完全バックアップを実行する必要があります。

- 15 [OK]をクリックして、ポリシーを保存します。
トランザクションログを切り捨てない場合、これ以上の処理は必要ありません。
トランザクションログを切り捨てる場合は、手順 16 を続行します。
- 16 ログの切り捨てを行わずに完全バックアップを実行します。
まずこの完全バックアップを実行しない場合、ASC ジョブは失敗します。
- 17 バックアップが完了したら、ステップ 1 で作成したポリシーを開いてください。
- 18 [VMware]タブをクリックします。
- 19 [Exchange Recovery を有効にする (Enable Exchange Recovery)]の下にある
[ログを切り捨てる (Truncate logs)]を選択します。
このオプションは仮想マシンの VMware スナップショットが完了したときにトランザクションログを切り捨てます。
- 20 [OK]をクリックして、ポリシーを保存します。
- 21 VMware の完全バックアップを実行します。

NetApp ディスクアレイ上の共有 CIFS へのアクセスを使用した NetBackup の構成

Replication Director を使用して、スナップショットのコピーを作成したり、ディスクにイメージを複製するなど、VMware スナップショットやスナップショットレプリケーションを管理できます。スナップショットのコピーから VMware バックアップの個別項目を参照したり、リストアするには、NetBackup Client Service のログオンアカウントを構成する必要があります。このアカウントは、NetApp ディスクアレイに作成される CIFS 共有にアクセスする必要があります。

NetBackup Client Service のログオンアカウントを構成するときは次の点に注意してください。

- データベースをリストアする場合には、NetBackup Client Service のログオンアカウントを構成する必要はありません。ディスクイメージの個別項目を参照したり、リストアする場合も、アカウントを構成する必要はありません。
- 個別の操作を実行する各クライアントを構成します。構成するクライアントを決定するには、次のトピックを参照してください。
p.49 の「Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ」を参照してください。
- クラスタ環境の場合は、クラスタ内のデータベースノードごとにこれらの手順を実行します。DAG の各データベースノードでこれらの手順を実行します。

NetApp ディスクアレイで共有される CIFS へのアクセスを使用して NetBackup を構成する方法

- 1 Windows のサービスアプリケーションを開始します。
- 2 [NetBackup Client Service] エントリをダブルクリックします。
- 3 [ログオン (Log On)] タブをクリックします。
- 4 NetApp ディスクアレイ上で作成される CIFS 共有へのアクセスを持つアカウントを追加します。[ログオン (Log on as)] アカウントを変更するには、管理者グループの権限が必要です。
 アカウントは、ユーザーアカウントが後ろに続くドメイン名 `domain_name¥account` を含む必要があります。たとえば、`recovery¥netbackup` です。
- 5 パスワードを入力します。
- 6 [OK] をクリックします。
- 7 NetBackup Client Service を停止して、再起動します。
- 8 サービスアプリケーションを終了します。

VMware バックアップからの Exchange データのリストアについて

Exchange データは、Exchange エージェントによって実行されたバックアップからリストアされる場合と同様に、VMware バックアップからリストアされます。VMware ポリシー形式を使用してデータをバックアップしますが、リストアには [MS-Exchange-Server] ポリシー形式を使用します。NetBackup では、リストアに利用可能である VMware バックアップイメージに含まれる Exchange データを表示します。VMware バックアップから Exchange データをリストアする方法については、次のトピックを参照してください。

p.128 の「[Exchange スナップショットバックアップのリストアについて](#)」を参照してください。

p.143 の「[個々の Exchange メールボックスおよび共有フォルダの項目のリストアについて](#)」を参照してください。

p.148 の「[Exchange メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクトの代替パスへのリダイレクトリストア](#)」を参照してください。

一般的な注意事項

VMware バックアップから Exchange をリストアする際は、すべてのリストアオプションが利用可能です。次のいずれかにリカバリできます。

- リカバリデータベース
- 別のデータベース

- 代替サーバー
 ターゲットサーバーには仮想コンピュータまたは物理コンピュータを使用できます。

ソースクライアントと宛先クライアントの選択

リストアを実行するときに、適切なソースクライアントまたは宛先クライアントを選択することが重要です。次の点に注意してください。

- VMware ポリシーのプライマリ VM 識別子が、VMware ホストとして構成される NetBackup クライアント名と一致しない場合があります。この場合、リダイレクトリストアを実行するにはクライアントを構成する必要があります。
[『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』](#)を参照してください。
- クラスタ (DAG を含む) のリストアには、ソースクライアントとして仮想 Exchange サーバー名を選択します。VMware バックアップのクライアント名で完全修飾ドメイン名 (FQDN) を使用していた場合は、DAG 名も FQDN 形式になります。
- Exchange スタンドアロンサーバーのリストアの場合、NetBackup で VMware バックアップのために使用したソースクライアント名を選択する必要があります。たとえば、特定の Exchange サーバーの実際のホスト名が `Exchangesv1` であるとします。[VMware 表示名 (VMware display name)] の `Exchange_server1` を使用して VMware のバックアップポリシーを構成し、バックアップを実行します。リストアを実行するときには、ソースクライアント名 `Exchange_server1` を使用してバックアップを参照します。
- NetBackup で認識される宛先クライアント名を選択します。宛先クライアント名はネットワーク名またはコンピュータ名である必要があります。この名前は、NetBackup が NetBackup クライアントに接続することを許可している必要があります。

Replication Director を使用しない VMware バックアップからのリストア

Exchange データベースを VMware バックアップからリストアする場合、追加の要件は適用されません。ただし、個別の参照とリストアを実行する場合は、次の要件が適用されます。

- 参照またはリストアに使う NFS をクライアントで構成する必要があります。
- バックアップイメージをマウントするための未割り当てドライブ文字がクライアントに与えられている必要があります。
- リストア操作のための宛先クライアントに対しては、Exchange クライアントのホストのプロパティの [Exchange クレデンシャル (Exchange credentials)] を構成する必要があります。

Replication Director によって作成されたスナップショットのコピーからのリストア

Replication Director によって作成されたスナップショットのコピーから Exchange データベースをリストアする場合に適用される追加の要件はありません。ただし、スナップショッ

トのコピーからの個別の参照またはリストアを実行する場合は、次のことに注意してください。

- **NetBackup Client Service** 用のログオンアカウントを構成する必要があります。このアカウントは、**NetApp** ディスクアレイに作成される **CIFS** 共有にアクセスする必要があります。
- リストアに対しては、**Exchange** クライアントのホストのプロパティの[**Exchange** クレデンシヤル (**Exchange credentials**)]を構成する必要があります。
- スナップショットのコピーを参照またはリストアする場合、**NetBackup** に **NFS** は必要ありません。バックアップイメージをマウントする未割り当てのドライブ文字も必要ありません。

Replication Director によって作成されたディスクイメージからのリストア

Replication Director を使用してディスクイメージを作成し、そのイメージから個別の参照またはリストアを実行する場合は、次の要件が適用されます。

- 参照またはリストアに使う **NFS** をクライアントで構成する必要があります。
- バックアップイメージをマウントするための未割り当てドライブ文字がクライアントに与えられている必要があります。
- ディスクイメージからリストアするために、**NetApp** ディスクアレイにアクセスできるアカウントを含む **NetBackup Client Service** 用のログオンアカウントは必要ありません。個別リストアのための宛先に対しては、**Exchange** クライアントのホストのプロパティの[**Exchange** クレデンシヤル (**Exchange credentials**)]を構成する必要があります。

VMware バックアップでの Exchange データベースのパッシブコピーの保護の有効化

DAG ノードの場合、バックアップで選択された VM 上にあるデータベースのアクティブコピーがカタログ化されます。データベースのパッシブコピーはカタログ化されません。**Veritas VSS provider**がインストールされている限り、パッシブコピーのログファイルは切り捨てられます。

パッシブデータベースのコピーを保護するためには、手順で記述されているレジストリ値を作成します。DAG のバックアップサーバーとして動作するように DAG の 1 つの VM を指定します。次に、そのサーバーのレジストリ値を設定します。このバックアップサーバーの DAG には、各データベースのパッシブコピーが必要です。

VMware バックアップでの Exchange データベースのパッシブコピーの保護を有効にするには

- 1 バックアップサーバーとして動作している VM で、regedit.exe を起動します。
- 2 次のキーを開きます。

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥VERITAS¥NetBackup¥CurrentVersion¥Agents

- 3 VM_Exchange_Backup_Passive_DBs という名前の新しい文字列値を作成します。
- 4 新しい値を右クリックして、[修正]をクリックします。
- 5 [値のデータ]ボックスに、「Yes」と入力します。
- 6 [OK]をクリックします。

修復された Exchange Server または代替の Exchange Server への Exchange データベースのリカバリ

この章では以下の項目について説明しています。

- [Exchange データベースのリカバリについて](#)
- [Exchange データベースのリカバリ](#)

Exchange データベースのリカバリについて

[表 11-1](#) では、Exchange データベースをリカバリするための手順について説明します。

表 11-1 Exchange データベースのリカバリ

手順	処理	説明
手順 1	Exchange Server を修復するか、または代替 Exchange Server を作成します。	Exchange データベースをリカバリする必要がある場合は、修復された Exchange Server または代替の Exchange Server にリストアできます。Exchange Server のディザスタリカバリの実行の手順に関しては、 表 11-2 を参照してください。

手順	処理	説明
手順 2	Exchange データベースをリカバリします。	p.179 の「Exchange データベースのリカバリ」を参照してください。
手順 3	サーバーにメールボックスまたはパブリックフォルダのデータを抽出します。	代替サーバーにリストアした後、そのサーバーにメールボックスまたはパブリックフォルダのデータを抽出できます。次の記事では、リストア操作に代替サーバーを構成する方法について説明します。 http://www.veritas.com/docs/TECH29816

表 11-2 では、Exchange データベースをリカバリする方法を説明する利用可能なリソースを説明します。

表 11-2 ディザスタリカバリのリソース

Exchange 2010 [http://technet.microsoft.com/en-us/library/dd876880\(EXCHG.140\).aspx](http://technet.microsoft.com/en-us/library/dd876880(EXCHG.140).aspx)

Exchange のすべて www.microsoft.com/exchange
のバージョン

Exchange データベースのリカバリ

Exchange データベースをリカバリする方法

- 代替の Exchange Server または修復された Exchange Server で、元のデータベースに一致するデータベースを作成します。

マスターサーバーでバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを使って、リカバリするデータベースまたはストレージグループの正しい論理名を表示することができます。
- リストアする各データベースストアをマウントし、マウント解除します。

この処理により、NetBackup でリストアに必要なデータファイルが作成されます。
- データベースストアを右クリックし、[プロパティ (Properties)]をクリックします。
- [データベース (Database)]タブで、[復元時はこのデータベースを上書きする (This database can be overwritten by a restore)]をクリックします。
- 代替の Exchange Server または修復された Exchange Server に NetBackup クラライアントソフトウェアをインストールします。
- マスターサーバーで、バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを開きます。
- [ファイル (File)]>[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]をクリックします。

8 [NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]ダイアログボックスで、次を指定します。

バックアップおよびリストアに使用するサーバー (Server to use for backups and restores)	バックアップを実行した NetBackup サーバーを選択します。
リストアのソースクライアント (Source client for restores)	バックアップの実行元のクライアントを選択します。クラスタ環境または DAG 環境の場合、このクライアントは仮想 DAG 名または仮想クラスタ名です。
リストアのポリシー形式 (Policy type for restores)	MS-Exchange-Server を選択します。
リストアの宛先クライアント (Destination clients for restores)	リストア先のクライアントを選択します。このクライアントは代替または修復された Exchange Server です。

9 [OK]をクリックします。

10 データベースおよびトランザクションログをリストアします。

11 リカバリしたメールボックスを **Active Directory** ユーザーアカウントに再接続します。

12 代替 **Exchange Server** にリカバリした場合は、**Veritas** では、個別リカバリテクノロジー (**GRT**) を使用したバックアップからメールボックスデータをリストアすることを推奨します。

個々の項目を代替データベースまたは **RDB** から移動するには、**EXMerge** などのサードパーティツールを使用することもできます。

EXMerge について詳しくは、**Microsoft** 社の **Web** サイトを参照してください。

Exchange サーバーのバックアップとリストアのトラブルシューティング

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup for Exchange デバッグログ](#)
- オフホスト Exchange サーバーでのイベントビューアログの表示
- [NetBackup の状態レポート](#)
- [Exchange リストア操作のトラブルシューティング](#)
- [Exchange Server のトランザクションログの切り捨てエラー](#)
- [Exchange のバックアップとリストアのパスの長さ制限の動的エンフォースメント](#)
- [Exchange スナップショット操作のトラブルシューティング](#)
- [個別リカバリテクノロジー \(GRT\) を使用したトラブルシューティング Exchange ジョブ](#)
- [Exchange 2010 と 2013 でのメモリ使用量の増加](#)
- [DAG のバックアップとリストアのトラブルシューティング](#)
- [Exchange Server の VMware のバックアップとリストアのトラブルシューティング](#)

NetBackup for Exchange デバッグログ

NetBackup マスターサーバーおよびクライアントソフトウェアでは、NetBackup の操作中に発生する可能性のある問題のトラブルシューティングのために、広範囲なデバッグログ

のセットを提供します。デバッグログは、Exchange Server のバックアップ操作およびリストア操作でも使用できます。

ログを作成する方法と、ログに書き込まれる情報量を制御する方法については、次のトピックを参照してください。

p.182 の「[NetBackup for Exchange クライアントのデバッグログの自動的な有効化](#)」を参照してください。

p.182 の「[NetBackup for Exchange のバックアップ操作のデバッグログ](#)」を参照してください。

p.183 の「[NetBackup for Exchange のリストア操作のデバッグログ](#)」を参照してください。

p.187 の「[NetBackup for Exchange Windows クライアントのデバッグレベルの設定](#)」を参照してください。

問題の原因を判断できたら、事前に作成したデバッグログディレクトリを削除して、デバッグログを無効にします。これらのデバッグログの内容に関する詳細を参照できます。

『[NetBackup ログリファレンスガイド](#)』を参照してください。

NetBackup クライアントのログおよび NetBackup マスターサーバーのログに関する詳細を参照できます。

バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースのヘルプを参照してください。

『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』を参照してください。

メモ: デバッグログを有効にしておくと、ファイルサイズが大きくなる場合があります。これは、同じファイルが通常のファイルのバックアップでも使用されるためです。

NetBackup for Exchange クライアントのデバッグログの自動的な有効化

デバッグログを有効にするには、各ログディレクトリを作成するバッチファイルを実行します。すべてのログファイルディレクトリを自動的に作成するには、次を実行します。

```
install_path¥NetBackup¥logs¥mklogdir.bat
```

NetBackup for Exchange のバックアップ操作のデバッグログ

バックアップを実行した後、デバッグログの情報は `install_path¥NetBackup¥logs` ディレクトリに配置されます。プロセスごとにサブディレクトリが作成されます。デバッグログファイルには `mmdyy.log` と名前が付けられます。

ログ記録について詳しくは、『[NetBackup ログリファレンスガイド](#)』を参照してください。

スナップショットバックアップ	次のログを参照してください。 ■ bpbkar オフホストバックアップの場合、bpbkar ログは代替クライアントにあります。 ■ bpfis オフホストバックアップの場合、bpfis ログは代替クライアントとブライマリクライアントにあります。 ■ nbdisco このログは Exchange 2013 以降にのみ適用されます。discovery 情報の場合、すべてのメールボックスクライアントでこのログを確認します。マスターサーバーで NetBackup は discovery データベースの情報を <code>install_path¥NetBackup¥db¥discovery</code> に記録します。
GRT を使用するバックアップ (非 VMware)	次のログを参照してください。 ■ bpbkar ■ nbfsd このログは、クライアントおよびメディアサーバーに表示されます。
VMware バックアップ	次のログを参照してください。 ■ bpbkar ■ bpfis ■ nbdisco このログは Exchange 2013 以降にのみ適用されます。discovery 情報の場合、すべてのメールボックスクライアントでこのログを確認します。マスターサーバーで NetBackup は discovery データベースの情報を <code>install_path¥NetBackup¥db¥discovery</code> に記録します。 ■ ncfnbcs ASC の問題とエラーのために、このログはバックアップ済みである VM で作成されます。
すべての Exchange のバックアップ	次のログを参照してください。 ■ bpbkar ■ bpresolver このログは DAG ノードに書き込まれます。DAG のホストサーバーノードを確認するには、次を参照してください。 p.194 の「データベース可用性グループ (DAG) の現在のホストサーバーの検出」を参照してください。

NetBackup for Exchange のリストア操作のデバッグログ

リストアを実行した後、デバッグログの情報は `install_path¥NetBackup¥logs` ディレクトリに配置されます。プロセスごとにサブディレクトリが作成されます。デバッグログファイルには `mmdyy.log` と名前が付けられます。レガシーログの場合、ファイルは

`mmdyy.log` と名前を付けられます。統合ログの場合、ログファイルはベリタス製品に共通の形式です。

統合ログとレガシーログについて詳しくは、『[NetBackup ログリファレンスガイド](#)』を参照してください。

個別リカバリテクノロジー (GRT) 次のログを参照してください。

を使用したリストアを除く、すべてのリストア

- `bpbrm`
このログはメディアサーバーに表示されます。
- `bpdbm`
- `bprd`
- `tar`

GRT を使用するリストア

次のログを参照してください。

- `beds`
- `bpcd`
このログは宛先またはプロキシクライアントに表示されます。これは GRT 検索操作に適用されます。
- `bpdbm`
- `bpbrm`
このログはメディアサーバーに表示されます。
- `bprd`
- `nbfsd`
このログは、クライアントおよびメディアサーバーに表示されます。このログは、(Replication Director を使った) VMware スナップショットコピーの参照操作やリストア操作には適用されません。
- `ncflbc`
これは `nblbc.exe` のログです。これは宛先クライアントまたはプロキシクライアントに表示されます。
- `ncfgre`
これは `nbgre.exe` のログです。これは宛先クライアントに表示されます。

インスタントリカバリとオフホスト インスタントリカバリ 次のログを参照してください。

- bpbkar
オフホストインスタントリカバリリストアの場合、bpbkar ログは代替クライアントにあります。
- bpbrm
このログはマスターサーバーに表示されます。
- bpdbm
- bpfis
このログはインスタントリカバリのロールバックリストアに適用されます。オフホストインスタントリカバリリストアでは、bpfis ログは、プライマリクライアントと代替クライアントの両方に格納されます。
- bppfi
オフホストインスタントリカバリリストアでは、bppfi ログは、プライマリクライアントと代替クライアントの両方にあります。
- bprd
- tar
オフホストインスタントリカバリでは、このログはプライマリクライアントに表示されます。

すべての Exchange のリストア 次のログを参照してください。

- bpbkar
- bpdbm
- bprd
- bpresolver
このログは、指定すると DAG ノードまたはその他の宛先クライアントに書き込まれます。アクティブノードを確認するには、次を参照してください。
[p.194 の「データベース可用性グループ \(DAG\) の現在のホストサーバーの検出」](#)を参照してください。

VMware バックアップからのリストア 次のログを参照してください。

- bpbkar
- bpdbm
- bppfi
- bprd
- tar

Replication Director を使った 次のログを参照してください。
スナップショットからのリストア

- bpbkar
このログはバックアップホストに書き込まれます。
- bpdbm
- bpfis
このログは GRT 操作のみに適用されます。このログは、参照またはリストアが起きるクライアントに表示されます。
- bprd
- ncfnbhfr
このログはバックアップホストに書き込まれます。
- tar
このログはターゲット Exchange サーバーに書き込まれます。

Veritas VSS provider ログ

Veritas VSS provider は Windows イベントログにアクティビティを記録します。次の場所では、デバッグログも利用可能です。

`install_path\Veritas VSS provider\logs`

レジストリで Veritas VSS provider のログを有効にする

Exchange がインストールされている NetBackup コンピューターで Veritas VSS provider のログを有効にします。

レジストリで Veritas VSS provider のログを有効にする方法

- 1 NetBackup がインストールされているコンピュータに管理者 (Administrator) としてログオンします。
- 2 レジストリエディタを開きます。
- 3 次のキーを開きます。

`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Symantec\Backup Exec for Windows\Backup Exec\Engine\Logging`

- 4 CreateDebugLog という名前で新しい DWORD 値を作成します。
- 5 新しい値を右クリックして、[修正]をクリックします。
- 6 [値のデータ (Value data)]ボックスに、1 と入力します。
- 7 [OK]をクリックします。

Veritas VSS provider のログのデバッグレベルを上げる

ログのデバッグレベルを上げるには、C:\Windows フォルダの pre-freeze-script.bat ファイルと post-thaw-script.bat ファイルの両方を修正します。スクリプト内の

BeVssRequestor.exe がコールされる行に -log パラメータを追加します。VMware に
よって呼び出されるスクリプトが決定されます。

Veritas VSS provider のログのデバッグレベルを上げる方法

- 1 pre-freeze-script.bat の次の行を変更します。

```
BeVssRequestor.exe -pre2 -logscreen !SkipExReplica! !SkipSQL!  
!VMBackupType! !ExcludeList!
```

この行を次のように変更します。

```
BeVssRequestor.exe -pre2 -logscreen !SkipExReplica! !SkipSQL!  
!VMBackupType! !ExcludeList! -log
```

- 2 また post-thaw-script.bat の次の行も変更します。

```
BeVssRequestor.exe -post2 -logscreen !SkipExReplica! !SkipSQL!  
!VMBackupType! !ExcludeList!
```

この行を次のように変更します。

```
BeVssRequestor.exe -post2 -logscreen !SkipExReplica! !SkipSQL!  
!VMBackupType! !ExcludeList! -log
```

NetBackup for Exchange Windows クライアントのデバッグレベルの設定

デバッグログに記録される情報の量を制御するには、クライアントの[一般 (General)]、
[詳細 (Verbose)]および[データベース (Database)]デバッグレベルを変更します。通
常は、デフォルト値の 0 (ゼロ) で十分です。ただし、障害分析をするために、テクニカル
サポートより、デフォルト以外の大きな値を設定するように依頼することがあります。

このデバッグログは、install_path¥NetBackup¥logs に存在します。

NetBackup for Exchange クライアントでレガシープロセスのデバッグレベルを設定する 方法

- 1 バックアップ、アーカイブおよびリストアプログラムを開きます。
- 2 [ファイル (File)]>[NetBackup クライアントのプロパティ (NetBackup Client Properties)]を選択します。
- 3 [トラブルシューティング (Troubleshooting)]タブをクリックします。
- 4 [全般 (General)]デバッグレベルを設定します。

このレベルを 2 に設定します。

- 5 [詳細 (Verbose)] デバッグレベルを設定します。

このレベルを 5 に設定します。

- 6 [OK] をクリックして、変更を保存します。

NetBackup for Exchange クライアントで統合ログを使用するプロセスのデバッグレベルを設定する方法

- 1 `ncfgr` などの新しい **NetBackup** プロセスは、統合ログ (VxUL) を使用します。VxUL ログレベルを上げるには、次のコマンドを実行します。

```
install dir¥NetBackup¥bin¥vxlogcfg -a -p 51216 -o OID -s  
DebugLevel=6 -s DiagnosticLevel=6
```

すべての OID 値のリストについては、『[NetBackup ログリファレンスガイド](#)』を参照してください。

- 2 VxUL ログレベルのデフォルト値をリセットするには、次のコマンドを実行します。

```
install dir¥NetBackup¥bin¥vxlogcfg -a -p 51216 -o OID -s  
DebugLevel=1 -s DiagnosticLevel=1
```

オフホスト Exchange サーバーでのイベントビューアログの表示

オフホストバックアップの検証中に、**Exchange Server** はオフホストサーバーのログにメッセージを記録します。これらのログは、バックアップの検証段階でトラブルシューティングが必要な場合に役立ちます。アプリケーションのイベントログは、**Exchange** スナップショットバックアップとリストアおよび一貫性チェックに使用されます。**Exchange Server** がリモートサーバーにインストールされていない場合、これらのログの詳細を表示することはできません。

リモートサーバー上のログを表示するには、次のいずれかの方法を実行します。

- イベントビューア
p.188 の「[イベントビューア内からリモート Exchange サーバーへの接続](#)」を参照してください。
- Exchange システム管理ツール
p.189 の「[リモートサーバーへの Exchange システム管理ツールのインストール](#)」を参照してください。

イベントビューア内からリモート Exchange サーバーへの接続

リモートサーバーのログを表示するには、**Exchange Server** がインストールされているサーバーでイベントビューアを開きます。その後、リモートコンピュータ (オフホストバックアップを実行したサーバー) に接続します。

イベントビューア内からリモートサーバーに接続する方法

- 1 Exchange Server がインストールされているサーバーにログインします。
- 2 イベントビューアを開きます。
- 3 [操作]>[別のコンピュータへ接続]を選択します。
- 4 [コンピュータの選択]ダイアログボックスで、[別のコンピュータ]をクリックします。
- 5 リモートサーバーの名前を入力するか、[参照]をクリックしてサーバーを選択します。
- 6 [OK]をクリックします。
- 7 左ペインで、[アプリケーション]をクリックして、オフホストバックアップに関連した Exchange ログを表示します。

リモートサーバーへの Exchange システム管理ツールのインストール

Exchange システム管理ツールをインストールする場合は、次の記事を参照してください。

- Microsoft 社の次のサポート Web サイトで記事番号 834121 を参照してください。
<http://support.microsoft.com>

NetBackup の状態レポート

NetBackup では、バックアップおよびリストア操作が完了したことを確認するために、多数の標準的な状態レポートが用意されています。また、必要に応じて、ユーザーおよび管理者が別のレポートを設定することもできます。

管理者には、NetBackup 管理コンソールから操作の進捗レポートにアクセスする権限があります。生成されている可能性のあるレポートは、[バックアップの状態 (Status of Backups)]、[クライアントバックアップ (Client Backups)]、[問題 (Problems)]、[すべてのログエントリ (All Log Entries)]、[メディアリスト (Media Lists)]、[メディアの内容 (Media Contents)]、[メディア上のイメージ (Images on Media)]、[メディアのログ (Media Logs)]、[メディアの概略 (Media Summary)]および[書き込み済みメディア (Media Written)]です。特定の期間、クライアントまたはマスターサーバーを対象としてこのようなレポートを生成することも可能です。

詳しくは『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

クライアント上の進捗レポートによって、ユーザーの操作の監視を簡単に行うことができます。ユーザー主導のバックアップ操作またはリストア操作ごとに NetBackup クライアントでレポートが作成されている場合、管理者はこれらの操作を監視し、発生したすべての問題を検出することが可能です。

NetBackup for Exchange 操作の進捗レポートの表示

このトピックでは、NetBackup for Exchange のバックアップ操作またはリストア操作の進捗レポートを表示する方法について説明します。

NetBackup for Exchange 操作の進捗レポートを表示する方法

- 1 [ファイル (File)]>[状態の表示 (View Status)]を選択します。
- 2 進捗状況を確認する処理をクリックします。
- 3 [更新 (Refresh)]をクリックします。

進捗レポートおよびメッセージについて、詳細情報を参照できます。

『NetBackup バックアップ、アーカイブおよびリストア スタートガイド』を参照してください。

Exchange リストア操作のトラブルシューティング

次の情報を確認して、Exchange リストア操作の問題をトラブルシューティングしてください。

- 正常なリストア後に、イベント ID 2059 がログ記録されます。
コミットされていないログのみ含んでいたバックアップをリストアした場合、Exchange は次に類似したエラーを報告することがあります。

```
Event Type:      Error
Event Source:    MSEXCHANGEREPL
Event Category:  Service
Event ID:        2059
```

この問題を解決する方法の情報に関しては次の記事を参照してください。

<http://www.veritas.com/docs/TECH88101>

- 名前に角カッコを含む Exchange データベースのリストアに失敗することがあります。
バックアップ、アーカイブ、リストア (BAR) インターフェースの左ペインで複数のイメージを選択すると、名前にカッコを含む (例: Exch_DB(Sales)) Exchange データベースのリストアに失敗することがあります。この問題を回避するためには、1 つずつリストアするイメージを選択してください。

異なる Exchange サービスパックまたは異なる累積更新プログラムのレベルへのリストア

NetBackup for Exchange エージェントでは、バックアップが最初に作成された時点と同じ Microsoft サービスパック (SP) または累積更新プログラム (CU) へのリストアをサポートしています。Microsoft 社は SP や CU のデータベーススキーマに変更を加えることが

あります。異なるレベルの SP または CU にリストアすると、データベースサーバーが正しく動作しないことがあります。

Exchange Server のトランザクションログの切り捨てエラー

Exchange Server は、バックアップが正常に実行された後に、トランザクションログを削除します (完全バックアップおよび差分バックアップの場合)。削除処理中に Exchange Server でエラーが発生すると、この情報がアプリケーションのイベントログに書き込まれます。実際のバックアップは正常に実行されているため、NetBackup は、バックアップが正常に実行されたことを示す状態 0 (ゼロ) で終了します。トランザクションログで発生するすべてのエラーについては、Microsoft Exchange Server のマニュアルを参照してください。

Exchange のバックアップとリストアのパスの長さ制限の動的エンフォースメント

『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』では、パスの長さが 1023 文字を超えるファイルおよびディレクトリがバックアップから自動的にエクスクルードされることを説明しています。GRTを有効にしたバックアップの場合、パスの長さの制限は個々のメールボックスフォルダおよびメッセージに適用されます。個別バックアップでは、個別バックアップイメージの表示およびリストア中に NetBackup がパス名の長さの制限を確認し、例外をレポートします。制限を超えるパス名を統合ログの ncf1bc または ncfgre ログに記録します。その後、リストア中にスキップされた項目は[状態の表示 (View Status)]ウィンドウにレポートされます。

Exchange スナップショット操作のトラブルシューティング

Exchange スナップショットバックアップまたはリストア操作を実行する場合は、次のことに注意してください。

- スナップショットイメージからリストアする場合、データベースのトランザクションログフォルダに Exxrestore.env ファイルが存在すると、リストアが失敗します。この一時 Exchange ファイルは、以前に失敗したリストアから残っている場合があります。Exchange の Windows アプリケーションのイベントログエントリは、このファイルが問題であることを示します。別のリストアを試行する前に、このファイルを手動で削除してください。

- **NetBackup** で複数のデータベースのスナップショットを処理するときに、bpfis.exe のメモリ使用状況が増加します。**NetBackup** のテストでは、bpfis.exe プロセスのメモリ使用状況が、ストレージグループまたはデータベースごとに数 MB 増加します。単一のスナップショットジョブで多数のデータベースを処理する場合は、処理の仮想メモリのサイズが 1 GB を超えることがあります。この問題を回避するには、この増加分に対応するのに十分な仮想メモリを確保するか、またはバックアップをより小さなスナップショットに分割します。

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用したトラブルシューティング Exchange ジョブ

NetBackup で個別リカバリテクノロジーを使用してバックアップ操作またはリストア操作を実行する場合には、次のことに注意してください。

- **QLogic SANSurfer** ソフトウェアを無効にするかアンインストールします。**Client for NFS** のポートマッパーと競合する場合があります。
- メディアサーバーまたはクライアントに **NFS** をインストールする前に、**ONC/RPC Portmapper** サービスを検索します。存在する場合は、停止して無効にします。そのようにしないと、**Windows** の **NFS** 用サービスのインストールは失敗します。
- **Exchange** カッコを含む表示名を使う **VM** バックアップイメージの場合、**GRT** 操作に失敗することがあります。たとえば、バックアップ、アーカイブ、リストア (**BAR**) インターフェースから **GRT** ライブ参照をリストアすると、次のエラーで失敗します。
データベースのシステムエラーです (database system error)
- (**Exchange 2010**) タスクオブジェクトの「会社」情報はリストアされません。
- **GRT** を有効にしたバックアップで個別の処理操作が正常に完了しなかった場合、状態 1 のエラーが発生する場合があります。アクティビティモニターまたはエラーログのジョブの詳細に、このエラーの原因が状態 1 であるかどうかが表示されます。bpbkar デバッグログで詳細を参照します。
- **NetBackup** は、プロキシホスト (該当する場合) または宛先クライアントと通信できる必要があります。
NetBackup がこのクライアントと通信できない場合、[問題 (Problems)] または [すべてのログエントリ (All Log Entries)] レポートにエラーが表示されます。**NetBackup** のエラーログに次のエラーメッセージが表示されます。

```
The granular proxy <clientname> for client <clientname> could not be
contacted. Unexpected results may have occurred. See bprd debug log for more
details.
```

```
Could not connect to <clientname> for virtual browse operation, errno=#,
bpcd_status=#
```


p.47 の「[Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ](#)」を参照してください。

- Exchange 2010 では、次の状況によりリストアがステータス 5 で失敗します。

- パブリックフォルダへの専用のメールボックス項目のリストア
 - 専用のメールボックスへのパブリックフォルダ項目のリストア
- ncfgrs ログで、次のエラーが示されます。

```
EWS Failed to get mailbox properties
```

- Exchange 2010 のパブリックフォルダ項目を作成したことがないサブフォルダにリストアしようとする、リストアがステータス 5 で失敗します。次のエラーが進捗ログに表示されます。

```
MNR - error writing file: %1
```

この問題は、次のいずれかの回避策で解決できます。

- リストア操作を再試行します。NetBackup が新しいサブフォルダを作成しようとするときにエラーを受信します。エラーを受信してもサブフォルダは作成されます。同じサブフォルダへリストアを再試行すると、リストアは成功します。
- リストアを試みる前にサブフォルダを手動で作成します。サブフォルダが存在する場合、リストアは成功します。
- テクニカルサポートでメディアサーバーからの nbfsd ログが必要な場合があります。nbfsd ログは非常に大きくなる可能性があるため、Verbose 設定は慎重に使います。

Exchange 2010 と 2013 でのメモリ使用量の増加

Exchange 2010 または Exchange 2013 でメールボックスユーザーの数を増やすと、MONAD.EXE はバックアップ操作の間により多くのメモリを使います。この問題については、Microsoft 社とともに修正に取り組んでいます。

DAG のバックアップとリストアのトラブルシューティング

DAG のバックアップとリストアには、次の問題が存在します。

- DAG のノードからリストアを開始した場合に DAG バックアップの状態が空になることがあります。
データベース可用性グループ (DAG) バックアップのデータベースや個別項目をリストアする場合は、バックアップ、アーカイブ、リストア (BAR) インターフェースでリストアの状態が空になることがあります。DAG のノードからリストアを開始した場合、状態は

空になります。動作状態を適切に表示するには、アクティブ DAG ノードまたは NetBackup サーバーからリストアを開始する必要があります。

- DAG 環境でのユーザー主導バックアップを現在アクティブになっていない DAG のノードから開始すると失敗します。
DAG 環境でのユーザー主導バックアップは、仮想 DAG 名に対して現在アクティブになっていない DAG 内のノードから開始されると、失敗します。バックアップを適切に開始するには、アクティブ DAG ノードからユーザーバックアップを開始するか、または NetBackup マスターからバックアップを手動で開始します。

データベース可用性グループ (DAG) の現在のホストサーバーの検出

データベース可用性グループ (DAG) の現在のホストサーバーを検出するには

- 1 いずれかの Exchange DAG サーバーで、[プログラム]>[管理ツール]>[フェールオーバークラスタマネージャー]を開始します。
- 2 左ペインで、DAG を選択します。
- 3 右ペインの[クラスタの概要]の下で、[現在のホストサーバー]を見つけます。

データベース可用性グループ (DAG) のバックアップ状態の表示およびリセット

次のコマンドを使用して DAG のバックアップ状態を表示し、リセットします。バックアップ状態を使用してバックアップの実行元のノードを選択する方法について、詳細な情報が参照できます。

p.105 の「[Exchange データベース可用性グループ \(DAG\) のバックアップ状態と優先サーバーリスト](#)」を参照してください。

メモ: -EXDB では、大文字と小文字が区別されます。

バックアップ状態データベースを表示するには、NetBackup マスターサーバーから次のコマンドの 1 つを入力します。

```
bpclient -client host_name -EXDB
```

```
bpclient -All -EXDB
```

ここで、**host_name** は、DAG 名です。このコマンドの出力は次のとおりです。

EX_DB: DAG_DB3	EX_SRVR: EXSRV3	EX_TIME: 1259516017	EX_COUNT: 1	EX_STATUS: 156
EX_DB: DAG_MBOX7	EX_SRVR: EXSRV3	EX_TIME: 1259516040	EX_COUNT: 2	EX_STATUS: 0
EX_DB: EXCHDB001	EX_SRVR: EXSRV2	EX_TIME: 1259516018	EX_COUNT: 1	EX_STATUS: 0

メモ: `-exdb` では、大文字と小文字が区別されます。

特定の **Exchange** データベースのバックアップ状態データベースをリセットするには、次のコマンドを入力します。

```
bpclient -client host_name -update  
-exdb <db_name:server_name[:timestamp:count:status]>
```

次に例を示します。

```
bpclient -client DAG_Name -update -exdb DAG_DB3:EXSRV1:0:0:0
```

Exchange Server の VMware のバックアップとリストアのトラブルシューティング

アプリケーションを保護する **VMware** バックアップを実行するときには、次の点に注意してください。

- 1つのアプリケーション状態キャプチャジョブは、ポリシーで選択されるアプリケーションに関係なく、**VM** ごとに作成されます。
- **VMware** ディスクのレイアウトが前回の検出から変更されていると、**ASC** ジョブが失敗する場合があります。この場合、[**VM** 選択問い合わせ結果を再利用 (**Reuse VM selection query results for**)] オプションの値を小さく設定して、**NetBackup** に仮想マシンの再検出を強制する必要があります。『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』を参照してください。
- **ASC** ジョブが失敗しても、**VMware** スナップショットまたはバックアップは続行されます。アプリケーション固有のデータはリストアできません。
- 失敗の結果、検出ジョブまたは親ジョブが状態コード **1** で終了します。
- **ASC** メッセージは **ASC** ジョブの詳細にフィルタリングされます。
- 特定アプリケーションのリカバリを有効にしたが、そのアプリケーションが **VM** に存在しない場合、**ASC** ジョブは状態 **0** を返します。
- **ASC** ジョブの詳細はアクティビティモニターのジョブの詳細で見つけることができます。
- バックアップ時に **Veritas VSS provider** または **VMware VSS** プロバイダがいずれもインストールされていない場合、**Exchange** のデータベースは静止状態ではありません。この場合、リストアされた後、**Exchange** データベースのリカバリは、**Exchange** の **ESEUTIL** ユーティリティを使って手動で行う手順が必要になる場合があります。
- **bpfis** が実行され、**VSS** スナップショットバックアップをシミュレートします。このシミュレーションはアプリケーションの論理情報を取得するために必要になります。

- Exchange がインストールされているボリュームを VMware バックアップに含めない場合、個別参照操作は失敗します。

Exchange の保護を使った VMware バックアップを実行する場合には、Exchange Server がインストールされているボリュームを含んでいることを確認します。たとえば、NetBackup が F:¥ にインストールされ、Exchange Server が C:¥ にインストールされている場合には、バックアップに C:¥ を含めます。

NetBackup Legacy Network Service (Exchange 2010)

この付録では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup Legacy Network Service のログオンアカウントの構成 \(Exchange 2010\)](#)

NetBackup Legacy Network Service のログオンアカウントの構成 (Exchange 2010)

メモ: NetBackup 7.6 より前は、Exchange 2010 DAG 構成のために、NetBackup Legacy Network Service のログオンアカウントを構成する必要がありました。このログオンアカウントには、Exchange のデータベース操作および個別 (GRT) 操作を実行するためのアクセス許可が必要でした。今回からそのような構成が必要ではなくなり、Exchange クレデンシャルをクライアントホストプロパティに構成します。NetBackup の既存ユーザーはこのサービスのためのログオンアカウントを引き続き構成できますが、Veritas では新しい構成を使用することを推奨します。

デフォルトでは、NetBackup Legacy Network Service はログオンに「Local System」アカウントを使用します。NetBackup に Exchange 2010 DAG バックアップを実行するために必要なローカルシステム権限が与えられるように、異なるアカウントが必要になります。

次の点に注意してください。

- DAG の各メールボックスサーバーでこれらの手順を実行します。

- GRT によるリストアのために、個別操作を実行する各クライアントを構成します。構成するクライアントを決定する方法については、次のトピックを参照してください。
 - p.47 の「[Exchange 個別リストア用クライアントと非 VMware バックアップ](#)」を参照してください。
 - p.49 の「[Exchange 個別リストア用クライアントおよび VMware バックアップ](#)」を参照してください。

NetBackup Legacy Network Service のログオンアカウントを構成する方法

- 1 Windows のサービスアプリケーションを開始します。
- 2 [NetBackup Legacy Network Service] エントリをダブルクリックします。
- 3 [ログオン] タブをクリックします。
- 4 以前に作成した NetBackup Exchange 操作用のアカウントの名前を入力します。
[ログオン (Log on as)] アカウントを変更するには、管理者グループの権限が必要です。
 - p.32 の「[EWS アクセス用の特権付き NetBackup ユーザーアカウントの作成](#)」を参照してください。
 - p.33 の「[Exchange 用の最小の NetBackup アカウントの作成](#)」を参照してください。アカウントは、ユーザーアカウントが後ろに続くドメイン名 *domain_name¥account* を含む必要があります。たとえば、*recovery¥netbackup* です。
- 5 パスワードを入力します。
- 6 [OK] をクリックします。
- 7 NetBackup Legacy Network Service を停止して、再度開始します。
- 8 サービスアプリケーションを終了します。

記号

- アプリケーション状態キャプチャ (ASC) 155
- インスタントリカバリ
 - 有効化 110
- インスタントリカバリ (Instant Recovery) 82、103
- インスタントリカバリ用または SLP 管理用にスナップショットを保持する (Retain snapshots for Instant Recovery or SLP management) 110
- インストール
 - NetBackup クライアントの要件 17
 - ライセンスの追加 20
- オフホストバックアップ 99、103
 - Snapshot Client のライセンス 110
 - クライアントとサーバーの権限の構成 47
 - 分散アプリケーションリストマッピングの設定 38
 - 要件 19
- キーワード句 (keyword phrase) 120
- クラスタ 17
 - サポート 10
 - 分散アプリケーションリストマッピングの設定 38
- コピーバックアップ 77、83
- コミットされていないログファイルのみをバックアップ (Back up only uncommitted log files) 25
- スケジュール
 - プロパティ 85
 - 追加 83
 - 間隔 (Frequency) 85
- ストア後にデータベースをマウントする (Mount database after restore) プロパティ 129
- ストレージライフサイクルポリシー (SLP) 10、168
- スナップショット
 - MS-Exchange-Server 23
 - Replication Director 28
- ディザスタリカバリ 178
- デバッグログ 182
 - デバッグレベル 187
 - バックアップ操作 182～183
 - リストア後の適用方法 127
 - リストア操作 184
 - 有効化 182
- トラブルシューティング
 - NetBackup のデバッグログ 182
 - NetBackup 操作の状態 189
 - スナップショット操作 191
- トランザクションログ
 - すべてをリプレイ 128
 - インスタントリカバリ 27
 - スナップショットバックアップ 97
 - ロールフォワードリカバリ 129
 - 作業ディレクトリ 127
 - 増分バックアップ 83
 - 指定した時点へのリカバリ 129
- バックアップ
 - 手動 117
 - 自動 117
- バックアップ、スナップショット
 - トラブルシューティング 191
 - 制限事項 97
 - 要件 18
- バックアップ、ユーザー主導 77
 - クラスタ環境 119
 - コピーバックアップ 83
 - スナップショット 120
- バックアップ、手動 77
- バックアップ、自動 77
 - VSS バックアップからの項目の除外 92
 - スナップショット 99
 - バックアップからの項目の除外 93
- バックアップからのデータベースのエクスクルード 93
- バックアップソース、DAG またはレプリケーションバックアップ用の構成 103
- バックアップ対象 (Backup Selections)
 - 手動での追加 87
- バックアップ形式
 - 、個別リカバリテクノロジー (GRT) でサポートされる 45
 - ユーザー 83
 - 完全バックアップ 83
 - 差分増分バックアップ 83
 - 累積増分バックアップ 83
- プライマリ VM 識別子 (Primary VM identifier) 174
- ホスト管理 41
- ホスト管理での自動検出されたマッピングの承認 41

- ポリシーの構成 99
 - スケジュール 83
 - テスト 117
 - バックアップを行うオブジェクトの指定 87
 - 属性 82
 - 概要 78
- ポリシー構成のテスト 117
- マルチテナント環境 10
- ライセンス 20
- リストア 127
 - 「リストア、スナップショット」も参照
 - 「リストア、リダイレクト」も参照
 - 「リストア、個別リカバリテクノロジー (GRT) の使用」も参照
 - リストア後のデータベースの手動でのマウント 143
- リストア、スナップショット 127, 133
 - トラブルシューティング 191
 - メールボックスと共有フォルダ 145
 - 制限事項 97
 - 失敗 127
 - 指定した時点へのリカバリ 129
 - 既存のトランザクションログ 128
- リストア、リダイレクト
 - Exchange スナップショットバックアップ 139
 - メールボックスとパブリックフォルダ 150, 152
 - 代替クライアント 125
 - 別のデータベースまたはリカバリデータベースへの Exchange DAG 135
 - 異なるターゲットまたはデータベースの場所 124
 - 要件 149
- リストアの前にデータベースをマウント解除する (Dismount database prior to restore) プロパティ 129
- リストアの権限 31
- レプリケーションバックアップ、バックアップソースの構成 103
- レポート
 - クライアント 189
 - メディア 189
 - 操作 189
- ロールフォワードリカバリ (すべてのログファイルをリプレイ) (Roll-Forward Recovery (Replay all log files) プロパティ 129
- ワイルドカード文字 91
- 一貫性チェック 10
 - スナップショットバックアップ 19
- 一貫性チェック、スナップショットバックアップ 98
- 互換性情報 16
- 仮想名、指定 125
- 個別クライアント
 - 非 VMware バックアップ 47
- 個別プロキシホスト 47, 49
- 個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery) 82
- 個別リカバリテクノロジー (GRT)
 - クライアントの要件 17
 - サポートされる Exchange の構成 52, 163, 170
 - サポートされるバックアップ形式 45
 - サポートされるメディアサーバープラットフォーム 52, 163, 170
 - 分散アプリケーションリストアマッピングの設定 38
 - 説明 45
- 個別リストア用クライアント
 - VMware バックアップ 49
- 優先サーバーリスト 104
- 分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping) 38
- 前回のバックアップセットのリストア後にコミットする (Commit after last backup set is restored) プロパティ 129
- 圧縮 10, 82
- 完全修飾ドメイン名 (FQDN) 174
- 循環ログと増分バックアップ 83
- 指定した時点へのリカバリ (リストア済みのログファイルのみをリプレイ) (Point-in-Time Recovery (Replay only restored log files) プロパティ 129
- 指示句
 - 指示句セットの混在 87
 - 説明 87
- 暗号化 10, 82
- 用語 13
- 統合ログ 188
- 複数のデータストリームの許可 (Allow multiple data streams) 82
- 複数のデータストリームを許可する (multiple data streams) 90
- 追加するクライアント 125
- [Exchange クレデンシャル (Exchange credentials)] プロパティ 24
- [Exchange 個別リストア用プロキシホスト (Exchange granular proxy host)] プロパティ 24
- [Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) を使用するバックアップの前に一貫性チェックを実行する (Perform consistency check before backup with Microsoft Volume Shadow Copy Service (VSS))] プロパティ 24
- [Replication Director を使用 (Use Replication Director)] プロパティ 82

[アクセラレータを使用 (Use Accelerator)] プロパティ 159、162
 [インスタントリカバリが正常に完了した後でログを切り捨てる (Truncate log after successful Instant Recovery backup)] プロパティ 23
 [バックアップ (Backup Files)] ダイアログボックス 120
 [プロセスレベルトークンの置き換え (Replace a process level token)] 24、49
 [一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する (Continue with backup if consistency check fails)] プロパティ 24
 [個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)] プロパティ 82
 [完全バックアップ中のログファイルのバックアップオプション (Backup option for log files during full backups)] プロパティ 23

B

BeVssRequestor.exe 186
 bpduplicate コマンド 74

D

DAG バックアップ 17
 バックアップソースの構成 103
 分散アプリケーションリストアマッピングの設定 38

E

e0y.log 94
 edb.log 94
 Exchange Server を保護する VMware バックアップ 165、171
 Exchange Web サービス 31
 Exchange を保護する VMware バックアップ 155
 リストア元 174
 Exchange 個別プロキシサーバーホスト 38
 ExchangeVSS ライター 156
 Exchange 個別プロキシホスト 26

G

GPT ディスク 18
 GRT バックアップのカタログ化のみの操作 74
 GRT バックアップの複製 74

M

Microsoft Exchange の属性 83

N

nbfsd。「NetBackup File System デーモン」を参照
 nbfsd ポート 72
 NetApp
 ディスクアレイ 29
 NetBackup Client Service のログオンアカウント
 GRT 操作のための設定 75
 NetBackup Exchange 操作のアカウント、GRT 操作 30
 NetBackup File System デーモン 13
 NetBackup for Exchange の機能 10
 NetBackup アクセラレータ 165
 NetBackup クライアントソフトウェアの要件 17
 NetBackup Legacy Network Service ログオンアカウント、構成 197
 Network File System (NFS) のインストールおよび構成 54
 Network File System (NFS)、説明 54

R

raw デバイスマッピング
 VMware 158
 Replication Director 10、168、170～171
 スナップショットからのバックアップ 174
 Replication Director、NetApp ディスクアレイ上の CIFS
 共有へのアクセス 173

S

SAN Client Fibre Transport Service 75
 SAN クライアント、75
 Storage Foundations for Windows (SFW) 18～19、97
 Storage Foundations for Windows (SFW) 19、109

V

Veritas VSS provider 17、156
 インストール 161
 ログ 186
 VMware VSS プロバイダ 156、161
 VMware のバックアップ、サービスの設定 75
 VMware バックアップ、サポート 10
 VMware バックアップのログの切り捨て 156
 VMware、ポリシー 159、168
 VSS バックアップからのデータベースのエクスクルード 92

あ

インスタントリカバリ
 個別リカバリテクノロジー (GRT) 114
 バックアップスケジュールの構成 114～115

ファイルコピーバック 107

方式 107

ポリシーに関する推奨事項 108

ボリュームロールバック 107

要件 19

インストール

NetBackup サーバーの要件 17

か

仮想名、指定 86

クライアントリスト 86~87

個々のメールボックスおよびパブリックフォルダオブジェクトのリストア、前提条件 144

個別リカバリ技術 (GRT)

物理サーバーの名を使用した場合 87

さ

すべてのログファイルをバックアップ (コミットされたログファイルを含む) (Backup all log files 25

た

追加するクライアント 86

ディザスタリカバリ 108

トラブルシューティング

オフホストサーバーでのイベントビューアログの表示 188

トランザクションログ 191

トランザクションログ

トラブルシューティング 191

は

バックアップ、スナップショット

形式 96

バックアップ対象 (Backup Selections)

表示 88

必要なバックアップメディア 17

物理サーバーの名前を使用対 DAG の仮想名 87

ポリシーの構成

クライアントの追加 86

バックアップを行うオブジェクトの指定 88

ま

メールボックスのアーカイブ 144

ら

リストア

メールボックスと共有フォルダの文字変換 143

リストア、スナップショット

データベース可用性グループ 130

リストア、リダイレクト

メールボックスまたは共有フォルダのオブジェクト 148

リンク済みのメールボックス 144